地名研究会報

第７３号

平成１３年９月２日

鹿児島地名研究会

Ⅰ.第７３回例会　　平成１３年６月３日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・上野堯史・大田照夫・納　栄蔵・小山　更・小山田　稔・久米雅章・坂本　誠・永坂芳彦・西田春人・繁昌正幸・平田功美子・平田信芳・福元忠良・松田　誠・三善喜一郎・米原正晃（計１７名）

Ⅱ.大日本地名辞書読会　　P.1760～ P.1761　外之浦・櫛間・穆佐

Ⅲ.桜島の小字

〔問題となった地名および事項〕　文之和尚・外之浦・火崎・本城・串間・諸県郡・穆佐・雅楽・古代の朝鮮と日本・魏志倭人伝と吉野ヶ里遺跡・島津氏の出自・「武」姓のルーツ・「尾」という地名・小字の分割・郡(コオリ・クイ)

文之和尚

平田　今日の所で、何か問題はありませんか。南郷は文之和尚が生まれた所ということです。文之和尚は桂庵玄樹の弟子で島津氏に重んじられて大龍寺の開祖になります。亡くなった所は加治木の安国寺で、そこに文之和尚の墓があります。墓碑銘は西村天囚が書いていますが、今でもよく読める文字で、あれは拓本をとる人が多いのじゃないかと思います。綺麗な文字です。南浦文之は臨済宗の坊さんです。桂庵玄樹も臨済宗です。以前から説明しているように、臨済宗の坊さんたちは島津氏に仕えて日明貿易・琉球貿易に大きく関わった存在になります。文之は島津氏の外交担当者として活躍しました。その一環として彼が残した有名な本が『鉄炮記』です。鉄炮伝来の経緯が詳しく述べてあります。

外之浦

平田　外之浦という所。これは内之浦に対して外之浦という言い方があったと思うのです。内之浦に近い方に根拠地があって内之浦と呼び、遠い方を外之浦と呼んだに違いないと思うのですが、いつ、そのような名称が生まれたのか、はっきりしません。

目井津、どういう意味か判りません。榎原は榎が生えていた原ということ、市木は櫟の木でしょう。都井岬の「トイ」はどういう意味でしょうか。いわゆる水を流す筧の樋から来ているかも知れません。

火崎

米原　此処に肝属の火崎とありますが、火崎は現在もありますかね。

平田　あるのじゃないの。内之浦に行く手前の岬（内之浦の町を過ぎて東南）。都井岬とこれに囲まれたのが志布志湾でしょうから。確か火崎は日と書く？地図にあると思って見もしませんでしたけど。（火崎が正しい。火崎・都井岬には烽火の痕跡はないのか。編集者後記）

本城・串間

平田　本城はどの時代の本城なのか判りません。「本庄」ではないと思います。次の串間、古くは串間とか櫛間と呼ばれていまし

たが、現在（近世以降）は「福島」と言っています。

諸県郡・穆佐

平田　諸県郡は東諸県・西諸県・南諸県・北諸県に分かれていました。南諸県に属した志布志・松山・大崎が、後に鹿児島県に編入されてしまいます。三国名勝図会では志布志・松山・大崎は日向国諸県郡で出ています。

ここに書いてあるように、記紀には諸県君の泉媛が石瀬川で一族を集めて景行天皇をもてなしたとか髪長媛が迎えられて仁徳天皇妃になったと記されています。これらは有名な話です。

穆佐というのは、よく判りません。六笠を意味するのか、向佐なのか。川向こうの場所というのが地名としては常識的かなと思います。

雅楽

西田　一番最後に雅楽の説明があります。大唐楽とか百済楽・高麗楽・新羅楽ですか、全部国名の「楽」になってますね。一番最後の「度羅楽」というのは不明なんですか。度羅という国があったのですかね。

平田　それは知りません。

西田　済州島は何と言いますかね。

平田　耽羅です。

西田　耽羅ですよね。済州島じゃないですかね。

平田　そうですね。済州島あたりが一番近いかも知れませんね。耽羅と度羅。

納　今話が出た高麗楽とか新羅楽。これらはほとんど朝鮮の名前になっていますね。宮崎県の、場所ははっきり憶えていないのですが、西の正倉院と言っているのは。

平田　南郷町です。

納　あれは、この近くですか。

平田　南郷はずーっと北の方です。

納　そうしたら相当距離が離れていてなにか行き来があったんでしょうね。

平田　さぁ、それは別でしょう。これは日本書紀から引用した文です。南郷町の伝説は最近になって表面化して来たわけですから系統は別でしょうけども。

西田　書かれているのは、雅楽の種類ですよね。国によって違うということはないでしょう。

平田　それは判りません。

古代の朝鮮と日本

平田　教科書問題で韓国政府は、まず任那日本府のことを問題にして来ました。言っていることは、あの頃には日本の呼び名はなかったのだから「任那日本府」という言い方はないのだ、ということだと思うのですけど。そう言えばよいのですが全く否定するような言い方をすると、おかしな歴史解釈になると思います。

教科書問題が起きてから『三国史記』：朝鮮の正史を読んでメモをとっているのですが、『三国史記』という本は今まで日本の学者はほとんど読まなかったのだろうと思います。朝鮮史研究の人々は読んだのでしょうけども。見事な本です。そして、日本関係の記事も非常に多いのです。「任那」という表現でなく伽耶国で通しています。

伽耶国が532年に新羅に滅ぼされたこと、562年：任那日本府が滅んだ年に伽耶国が新羅に併合されたことは『三国史記』に書いてあります。伽耶官家（カヤミヤケ）とよばれるものがあったのは事実ですし、：日本側の橋頭堡みたいなものはあったと思うのです。任那

日本府という表現は日本書紀にあるわけですから日本の歴史家がそのように表現しているのであって、韓国の歴史家が日本書紀の記述は信用出来ないと否定するのは行き過ぎだと私は思います。

古代の日本には、朝鮮の影響を受けているものが多い。例えば高松塚の壁画にしても、今問題にされているキトラ古墳にしても技法はすべて向こうから来ています。今日眺めた雅楽もそうですし、先日韓国の大学生たちが筏で王仁号というのを作って唐津にやって来ましたが、古代の航路を探るのがねらいのようです。二月、韓国に行った時、王仁博士の生まれ故郷に案内されました。観光地になっていて、今は整備されて見事なものが出来ています。その時初めて王仁の故郷というものを知りました。日本語が得意のガイドが「ワンニン」という言い方をして、日本語では「オウジンと読むのですか」と聞いたので「日本でもワニと読む」と言ったら喜んでいました。王仁の故郷は整備が進められ、周辺は発掘調査をしているようで、トレンチが入れられていました。王仁が日本に来て、論語や千字文を伝えたのは日本書紀にも書かれていることです。日本はいろんなものを学んでいるわけです。

延喜式神名帳に三千いくらかの神様の名前が書いてあるのですが、その冒頭に宮中神三十六があげてあるのです。その最初にあげてあるのが神産日神（カンミムスヒノカミ）と高御産日神（タカミムスヒノカミ）です。その他実用的な神様がずーっとあげてあって、おやっと思うのは宮内省で祭る三神なんです。一つは園神（ソノノカミ・ソノカミ）と他の二つは韓神です。韓国の神です。何故、宮中で韓神を祭らなきゃならないのか。案外、天皇家は加羅（韓）の出身だったかも知れない、ということが考えられる。そうしたら加羅（韓）は伽耶国：日本でいう任那ですから、此処の確保に天皇家がこだわって遠征軍を送ったということは当然考えられることです。

西田　そしたら、応神天皇はやっぱり加羅出身ですか。

平田　さあ、そこまではまだ考えませんけどね。（笑い）。百済が滅んだ時に百済の人たちが日本にやって来る。百済の学者とか楽人が日本にやって来て召し抱えられる。高句麗が滅んだ時も遺民が日本にやって来る。日本に行けば安全地帯があるから渡って来るわけです。そして、その人たちを日本は高官として大事に優遇してくれるわけですから、続々と渡って来た。あの頃は日本だ韓国だという国境はなかったわけです。一衣帯水の間ですからね。

また延喜式神名帳の冒頭の方に韓神二神を祭るとある。しかも宮内省で祭るのですよ。そんなことを言ったら韓国の人は喜ぶし、日本の右翼は怒るでしょうけどね。（笑い）

納　そうおっしゃればですね、これは言語学の服部四郎ですか、この人が北九州のどこかにほんのごく僅かしか来たに過ぎないと思われる人々が韓国から渡って来たのじゃなかろうか、と言っています。しかし言葉は朝鮮と日本では類似点はほとんどない。いわゆる音韻の関係ではですね。しかし沖縄とは音韻の関係は相当出て来る。

それだからして、起点は僅かなものじゃなかったろうかと、服部四郎という先生は言ってるのですね。

平田　それは昔の説ですよ。

納　私も、じゃろうなとは思っているのです。言葉は朝鮮とは・・・・。

平田　日本語と朝鮮語とはあまり類似性はない。日本語と沖縄は関係があるのですか。

納　この間は相当類似点がある。朝鮮語とはないというのです。服部四郎という人は面白いことをいうなと思って見たことがあります。

平田　向こうから渡って来た人たち渡って来る人たちを考えると、相当に裕福な人たちでなければ船を仕立てて渡って来れないわけです。少数であるけれども、その人たちの技術とか知識を古代の日本は受け入れていたわけです。

これは山口県に行った時の話ですが、大内館跡に行くと、観光掲示板に大内氏は日本に仏教を伝えた百済の聖明王の何番目かの息子の子孫だと堂々と書いてありました。百済の人々の子孫だというのです。その大内氏、大友氏それから少弐氏が朝鮮貿易に大きく関わったのです。

納　それから、これも諸県じゃなかったかと思うのですが、小さい石碑というか石塔に朝鮮文字に似た文字が彫り込んであるのです。場所ははっきり憶えてはいません。ハングル文字に似た文字です。それで、この辺まで朝鮮の人が入り込んでいたのじゃなかろうかと感じたことがあります。

平田　日本人の血の中には、朝鮮・中国のものが相当混じっている。朝鮮半島から来た人もいるし、中国大陸から来た人もいる。交流が激しかったのは倭寇によって捕らえられた人たちだろうと思います。

納　長崎の宮崎康平ですか、邪馬台国のことを書いたのは。

平田　あぁ、島原の人ですよ。

納　島原ですか。あの人が九州をいわゆる焼酎と清酒で分けていました。鹿児島県から宮崎県の真ん中、そして九州山脈ですかあれを登って大分。この線からこっち、外の方は焼酎。内の方は日本酒だだと言っています。鹿児島・宮崎は完全に人種が違う、独立しとったのじゃなかろうかという見方をしていた。面白いことをいうなと思って見ていました。

平田　焼酎は蒸留酒。醸造酒とは違うでしょう。焼酎が拡がったのは新しい時代です。

納　焼酎の場合は腐敗しない。日本酒の場合は腐るのが早いですからね。気候的なものもあるんじゃないかと思ったこともあります。

小山　焼酎は蒸留酒ですから腐らない。

平田功　私の実家は焼酎屋。焼酎を造っていたのです。今はもう甥の時代で、この間、止めました。やっせんもんじゃと内心残念に思っているのですけど。明治17年生まれの父は、宮崎に焼酎造りを習いに行ったみたいです。鹿児島では市来とか川内とかありますけど、宮崎に修業にいったようです。宮崎の八紘台の側に金丸さんという所があります。金丸焼酎というのは宮崎では有名じゃないでしょうか。そこの本家で修行したと聞いております。その頃は汽車はありませんし、野宿しながら宮崎へ行って焼酎造りを習ったと聞かされました。

学問的じゃないのですけど、昭和15年、小学校5年、それこそ八紘台が出来る頃でした。宮崎に子供たちだけで行きました。日豊線に乗り換えて鹿児島語でしゃべっていると学生が私たちを見っせぇ、あれは朝鮮じゃなかかち言われたりしました。韓国の人たちがしゃべいやっのを聞いてますと、まこて鹿児島語に似てると思って、恥ずかしく・・。

平田　恥ずかしがらんでもいいですよ。韓国に行って気が付いたのですが、飛行機の中で韓国の人たちがしゃべっているのに、鹿児島の衆が来てるのかなと思うぐらいでした。イントネーションがよく似ています。

魏志倭人伝と吉野ヶ里遺跡

平田　邪馬台国問題はやっぱり日本古代史の大きな謎だと思います。昨日、本屋で見たら邪馬台国の本が次から次へと出て来ているのですね。これには驚きました。邪馬台国を解く鍵は2世紀から3世紀にかけての集落跡と王墓。それらの分布図を作っていけば、魏志倭人伝に三十国の名前があげてあるわけですから、それがだんだん判って来るだろうと思うのです。

今のところ大体判っているのは、狗邪韓国・対馬・壱岐・末盧それから奴国。そこまでは疑問はない。そう言った中で、吉野ヶ里が出て来ました。吉野ヶ里が何国に当たるかというのが、今後大きな問題になると思うのです。あれくらいの規模であれば、吉野ヶ里は倭人伝の中のどれかというのが問題にならなければならない。

最も新しい説は「弥奴国」が吉野ヶ里の有力候補です。邪馬台国説もあります。それから吉野ヶ里については青銅器の産地だったことが注目されています。銅の鋳型が出て来たからです。それと倭の奴国も青銅器の産地という分析を考古学者はしています。しかも、どちらも朝鮮半島から来た技術であり、朝鮮半島から渡って来た人たちだろうとされています。これは出土した人骨の分析、いわゆる人類学的な分析によって、そうなっています。古代の日本は朝鮮半島から渡って来た人たちによって開けて行ったということは、率直に認めざるを得ないと思います。邪馬台国問題も朝鮮半島とのつながりを重視して眺めることが必要だと思います。

平田功　この間、あるデパートの5階で物産展があり、韓国の紫水晶とか青磁などいろんなのを売っていたのですが、あの時いろんな言葉をとりあげて、これは韓国から来たのだ、韓国の言葉を訳したのだと話していました。今日こんな話があるのだったら、もっとはっきり聞いとけば良かった。

島津氏の出自

久米　今、韓国の話が出てますけど、先日美山に苗代川焼を見に行きました。戦国時代に島津義弘が韓国から陶工を連れて来ているので、檀君伝説があそこに残されていて、その民俗があるのじゃないかと思って探してみました。最近、竹之下という所に碑の祭りがあることが判り、韓国と関係があるのじゃないかと言われています。

島津氏の始まりは元々惟宗氏ですが、室町期に源頼朝の庶子伝説を吹聴したというようなことです。惟宗という人たちは元々は百済からと言われます。先程話が出た加羅からかよう判りませんけど、そこから下って来て市来に住み着いた。そして権力を握って鹿児島で力を得た。昔は系図なんてのを、書き換え易いわけですから、それを考慮して権威としていった。

島津の紋章「丸に十の字」の十というのがキリストの十なのか、それがどこから来たのか。それが非常にうまいのですね。政略が。島津氏がどういうふうに権謀術数を駆使して

薩摩を支配して行ったのか、興味をもって探っているのです。今日、韓国の話が出て来たもんだから、島津氏自体もルーツを探って行くと、そういうことになる。鹿児島弁も韓国と関係が深いというか、そういう面で見ていくのも面白いテーマだなと思います。

平田功　島津氏の紋章、あれは銛。銛というのですか、魚を突く。あれから来ているという話もあります。

久米　ザビエル四百五十年祭が２年前にあった時、いろんなのを見たのですけど、丸に十の字というのは十字架の十と関係があるようなことをちょっと耳にしたものですからね。そういうようにいろんな知識を入れてうまく支配していくのが島津氏である。そういうことから考えると島津氏は韓国系の流れを汲んでいる。こんなことを大っぴらに発表すると、いろんな人たちから攻撃される材料になるだけで、確証はないのですけど何かそんなところがあるのじゃないかなと思ったりします。

平田功　島津の津とか、それから銛。さもありなん、というような考えを持ったことがあります。

平田　あのね、いろんな思い付きでいうのは結構ですけれども（笑い）。やっぱり確固たる証拠というか、史料・データーがなければね、その場限りの話になります。話が楽しいおしゃべりの方向に行ってますが、前半はこれで打ち切ります。休憩にしましょう。

桜島の小字

平田信芳

『角川日本地名大辞典』に「小字一覧」が入っていますが、鹿児島県では９カ町、恐らく担当者が手を抜いたと思うのですが、小字が載っていません。その中の一つに「桜島」があるわけです。

東桜島の小字は振り仮名付で「小字一覧」に入っていますが、西桜島が出ていないのです。たまたま西桜島の小字のコピーをある研究者から貰ったのですが、字総図に全部と言ってよいほど振り仮名が振ってあります。これをコピーして配るのは遠慮せねばいかんと思って表には出さずにおる次第です。突っ込んだ研究をされたいという方にはコピーをあげます。後で申し出て下さい。これに基づいて「桜島の小字」を分類しました。

赤水（ｱｶﾐｽﾞ）から古里まであげてありますが、東桜島もついでにと、一緒にまとめました。赤水・横山・小池・赤生原（ｱｺﾊﾞｲ）・武・西道（ｻｲﾄﾞｳ）。これは西堂が本来の意味だと思います。堂が道に化けているわけです。それから松浦（ﾏﾂﾗ）・二俣・白浜。ここまでが桜島町（西桜島）です。持木（ﾓﾁｷ）・野尻・高免（ｺｳﾒﾝ）・東桜島・有村・黒神・古里。これらが東桜島になります。

今日配った「自然現象にもとづく地名」の中で「黒神」を分析しておきましたので、黒神についてはそれを読んで下さい。忙しかったので、ルビはほとんど振ってありません。ルビを振ればとも思いましたが、全部にルビを振ると、反っておかしくなります。ゆっくり読みますので、適当に書き込んで下さい。その方が呑み込みも早いでしょう。

赤水――祈念崎（ｷﾈﾝｻﾞｷ）、羽山（ﾊﾔﾏ）・葉山平（ﾊﾔﾏﾋﾞﾗ）・葉山崎（ﾊﾔﾏｻﾞｯ）。役場が読んだ通りの振り仮名を言います。川塚（ｶﾜﾂﾞｶ）・高塚・宮内・山王山。ルビが振ってありませんが、（ｻﾝﾉｳﾔﾏ）でしょう。輪掛（ﾘﾝｶﾞｹ）。「輪」というのは輪くぐりみたいなのがあったのでしょう。

小山　これは役場からみた発音ですか。葉山崎（ﾊﾔﾏｻｷ）ではないのですね。大体、鹿児島県は「崎（ｻｷ）」なんですけど。

平田　これは（ﾊﾔﾏｻﾞｯ）と振ってあります。その通りに言ってるわけです。

横山――祈念崎。これは祈念崎一・祈念崎二と、字図にはなっています。羽山、次はルビがないのですが、山ノ神（ﾔﾏﾉｶﾐ）でしょうね。山ノ神一番・山ノ神二番となっています。神原（ｶﾝﾊﾞﾗ）、これも神原一番・神原二番とあります。神ノ尻（ｶﾝﾉｼｲ）・御嶽（ｵﾝﾀｹ）

小池――宮元・山神（ﾔﾏﾝｶﾝ）。

赤生原――尾立（ｵﾀﾞﾃ）・宮元。

武――本宮（ﾓﾄﾐﾔ）・下当原（ｼﾀﾝﾄﾉﾊｲ）・立尾（ﾀﾂﾉｵ）

西道――本宮（ﾓﾄﾐﾔ）

松浦――権現山・二俣・丸塚・宮ノ上・宮ノ尾・御嶽（ﾐﾀｹ）。御嶽は（ｵﾝﾀｹ）と（ﾐﾀｹ）と二通りのルビがあります。

白浜――寺城（ﾃﾗﾝﾄﾞ）。（ﾃﾗﾉｼﾞｮｳ）でしょうけど（ﾃﾗﾝﾄﾞ）とルビあり。立道（ﾀﾃﾐﾁ）・尾立。

持木以下は角川の「小字一覧」に全部ルビがあります。

持木――桜塚・川原塚（ｶﾜﾊﾗﾂﾞｶ）・御嶽（ｵﾝﾀｹ）

野尻――山宮・春山

高免――丸塚

東桜島――石神・上石神（ｶﾐｲｼｶﾞﾐ）・柴立（ｼﾊﾞﾀﾃ）・宮元

有村――権現・柴立・柴立山・中塚・宮原（ﾐﾔﾊﾗ）・瀬ノ神（ｾﾉｶﾐ）・辰上（ﾀﾂｶﾐ）。猿上は猿神のミス。山神谷（ﾔﾏﾝｶﾝﾉﾀｲ：ﾔﾏｶﾐﾉﾀﾆ）

黒神――寺山・宮山・神ノ浦（ｶﾐﾉｳﾗ）・笠立山でなく竿立山（ｻｵﾀﾃﾔﾏ）、単なるインプットミス。山ノ神・上山神（ｳｴﾔﾏｶﾐ）。次はルビが振ってありませんが浜弓場（ﾊﾏﾕﾐﾊﾞ）でしょう。呼塚（ﾖﾋﾞﾂﾞｶ）・花塚（ﾊﾅﾂｶ）・権現平（ｺﾞﾝｹﾞﾝﾋﾞﾗ・本権現（ﾓﾄｺﾞﾝｹﾞﾝ）・赤生塚（ｱｶｵﾂﾞｶ）

古里――山の神・建神（ﾀﾃｶﾞﾐ）

こう言ったものが信仰に基づく地名です。

(2)城郭・集落地名。「城」に関係する地名はほとんどありません。

赤水――中里（ﾅｶｻﾞﾄ）・山下（ﾔﾏｼﾀ）。山下というのは中世以来そう言った集落に付く地名です。県下には多い。

横山――城山（ｼﾛﾔﾏ）

武――新村（ｼﾝﾑﾗ）

西道――堀内（ﾎﾘﾉｳﾁ）

白浜――宇ノ城（ｳﾉｼﾛ）。宇ノ城は大ノ城：大きな城という意味でしょう。中城（ﾅｶﾝｼﾞｮ）・屋敷平（ﾔｼｯﾋﾞﾗ）

野尻――堀内（ﾎﾘｳﾁ）

有村――村ノ上（ﾑﾗﾉｳｴ）・村中（ﾑﾗﾅｶ）

黒神――下船里（ｼﾓﾌﾈｻﾄ）・前船里（ﾏｴ‥）

古里――上神村（ｳｴｶﾐﾑﾗ）下野村（ｼﾓﾉﾑﾗ）

(3)土地・区画地名は少ない。

赤水――八町（ﾊｯﾁｮｳ）・八町二番・八町崎（ﾊｯﾁｮｳｻﾞｷ）・拾町（ｼﾞｯﾁｮｳ）・中土手

赤生原――畦道（ｱｾﾞﾐﾁ）

武 —— 上六反(ウエンロッタン)・下六反(シモン・・)
そういうふうにルビがあります。
有村 —— 長割(ナガ゛ワリ)
黒神 —— 十反
古里 —— 長割
(4)市・町・交通地名。多くない。
赤水 —— 毛戸口(ケト゛クチ)・石坂(イシサ゛カ)・宮坂(ミヤサ゛カ)・土ケ坂(ツッカ゛サカ)・峠・歳坂(トシサカ)・渡瀬(ワタセ)
横山 —— 中道(ナカミッ)
小池 —— 橋口(ハシク゛ッ)
武 —— 船付(フネツケ)。船着き場でしょう。街道口(カ゛イト゛ウクチ)
藤野 —— 小坂(コサ゛カ)
松浦 —— 山道(ヤマミッ)
二俣 —— 坂之下(サカンシタ)・橋尾(ハシオ)
白浜 —— 乗越(ノリコ゛エ)・立道(タテミッ)
瀬戸通(セト゛ミッ)、「通」を(ミチ)と読むのでしょうか。
持木 —— 荒坂(アラサカ)・横道下(ヨコミチシタ)
野尻 —— 横道(ヨコミチ)
東桜島 —— 石道(イシミチ)・坂上(サカカ゛ミ)・坂之上(サカノウエ)・坂下(サカシタ)・志野木渡(シノキオトシ)。「渡」を(オトシ)と読ませています。「落シ」という表現があるので、どこかで間違ったのでしょう。落シの場所が渡し場であったかも知れませんけど。
黒神 —— 坂之上・中馬場(ナカバ゛バ)・下馬場(シモバ゛バ)・浜道(ハマミチ)・上牛道(ウエウシミチ)・中筋(ナカスジ゛)・申渡(サルワタシ)
(5)水利地名 —— 落ケ平(オチカ゛ヒラ)とルビがありますが、(オトシカ゛ヒラ)だと思うのです。上ノ落(ウエンオチ)、これも(オチ)と読ましていますがその次はルビがありません。上仁入木(カミニイリキ)と読むのでしょう。下仁入木(シモニイリキ?)。
小池 —— 出口(デ゛グ゛ッ)。赤生原も出口。
白浜 —— 落シ(オトシ)
持木 —— 長落(ナガ゛オチ)・水尾(ミズ゛オ)・出口(デ゛グ゛チ)・天狗落シ(テンク゛オトシ)・鉄砲落シ(テッポ゛ウオトシ)。
「落シ」とは田に引いた用水路の水を落とす所です。水を取り入れる場所は、水口(ミナクチ)または入木(イリキ)になるでしょう。
(6)人名地名 —— 千代崎(チヨサ゛キ)は瑞祥地名かも知れませんが、たまには女性地名もと考えて人名と解釈しました。権田平はその下に権太平(コ゛ンタ゛ヒ゛ラ)があるので、下の方が正しいと気付きます。松浦は初崎(ハッサ゛ッ)、野尻は甚蔵岩(シ゛ンソ゛ウイワ)。
(7)開発地名 「添」と「園」、開発地名としました。非常に数が少ない。城山添(シロヤマソ゛エ)・村山園(ムラヤマソ゛ン)・喜入園(キイレソ゛ン)・半分園(ハンフ゛ソ゛ン)・高屋添(タカヤソ゛エ)・燃添(モエソ゛エ)・足添(アシソ゛エ)・山添などです。
(8)田畑地名も少ない。内ノ田(ウッノタ゛)、古畑(フルハタ)、蕎麦畑(ソマハタ)のルビあり。上吉畑(カミノヨシハタ)・吉畑、上ノ畑根は「ノ」を消す。上畑根(ウエハタケノネ)・畑之根。
(9)職業・産業地名。木場・下木場(シモコバ゛)・猪差野(イサッノ)、志垣(シカ゛キ)、加治屋ノ上は(カンジ゛ャンウエ)とルビがある。猿懸(サルカ゛ケ)、馬野(ウマノ)、下木場・木場・中小場、中牛迫(ナカウシサ゛コ)、塩屋ノ元(シオヤノモト)。
(10)自然地名 数が多くなります。
赤水 —— 上崎(ウエサ゛キ)・中崎(ナカサ゛キ)・下崎(シモサ゛キ)・川崎(カワサキ)・洲崎(スサキ)・高崎・浜崎・小野・中野・古中野(コナカノ)・大野原(オオノハイ)・久保原(クボ゛バ゛イ)中原(ナカンハイ)。土ケ手は土ケ平(ツッカ゛ヒラ)の間違い。土ケ根(ツッカ゛ネ)、大迫(ウサコ)

のルビがあります。八谷(ヤタニ)・石山・岩山・嶽(タケ)。
横山 —— 高崎(タカサ゛キ)・大野・平(ヒラ)
小池 —— 大迫(ウサコ)
赤生原 —— 大迫(ウサ゛コ)。(ウサコ)と(ウサ゛コ)こんなのは困りますね。あまり気にしないことにしましょう。
原(ハラ)・長谷(ハセ)
武 —— 長谷(ハセ)・深谷(フカタン)・黒土平(クロツッノヒラ)
松浦 —— 宗平(ウヒラ)、その通りに書いた
白浜 —— 宇平(ウヒラ)、こちらが正しい。大平(ウヒラ)のこと。釜土尾(カマツッホ゛)・小浜(コハ゛マ)
持木 —— 上宇都(カミウト)・尻無尾瀬はルビなし。(シリナシオセ゛)?
野尻 —— 磯崎(イソサ゛キ)・中宇都(ナカウト)・下宇都(シモウト)・大久保
東桜島 —— 磯・山崎・石原・長迫・夏迫・火谷(ヒノタニ)
黒神 —— 長崎・永野・原・大谷
古里 —— 長平・大久保
(11)位置地名 圧倒的に多い。全体の四分の一を占める。
赤水 —— 高崎頭(タカサキカ゛シタ)・岩下・岩坂根(イワサ゛カンネ)・磯平根(イソヒ゛ラン ネ)・平根(ヒランネ)・前平(マエヒ゛ラ)・北平(キタヒ゛ラ)・久保原頭(クホ゛ハ゛イカ゛シタ)・田尻・上中野(ウエンナカノ)・中召輪野(ナカメワノ)?・召輪野尻(メワノシ゛リ)・前迫(マエサコ)・後迫(ウシトサ゛コ)・北迫(キタサ゛コ)
横山 —— 中浜辺・下浜辺:下浜崎はミス・中・北野・中野・上リ中野(ノホ゛リナカノ)中原(ナカハイ)・上ノ中原(ウエノナカハ゛イ)・北原(キタハラ)・西平(ニシヒ゛ラ)・中尾・中尾瀬(ナカオセ)・上ノ中道(ウエノナカミッ)・門之口(カト゛ンクッ)
小池 —— 小池原(コイケハ゛イ)?・中原(ナカハイ)西原(ニシハラ)・中尾・西元・横峯
赤生原 —— 中尾・西元・上床(ウワトコ)
武 —— 栄ノ尾(エノオ)、前回問題になった地名です。中ノ尾・村ノ尾・村ノ上・中津野・中野山(ナカンヤマ)・門口(カト゛クッ)・川原口(カワラクッ)・長谷口(ハセクッ)
藤野 —— 中尾・中津尾(ナカツオ)・中原尾(ナカハラオ)・村尾・東原(ヒカ゛シハ゛イ)・松平尾(マツヒ゛ラオ)
西道 —— 小中(コナカ)・西元・津田口(ツタ゛クッ)・横平(ヨコヒラ)
松浦 —— 岩下・東高尾・西尾・下西尾・中尾山・横垣(ヨッカ゛ッ)・中横垣(ナカンヨッカ゛ッ)・横グルス・上横グルス(ウエンヨコク゛ルス)・東向(ヒカ゛シムキ)・西向(ニシムキ)
二俣 —— 中尾・上中尾(ウエンナカオ)・下中尾(シモンナカオ)・大野上(オノウエ)・大野下(オノシタ)・横垣(ヨッカ゛ッ)。大野(オノ)と読むのが特徴的。
白浜 —— 高尾・中尾山・園山・磯口(イソクッ)・門口(モンク゛ッ?)・中尾口(ナカオクッ)仁田口(ニタンクッ)・先仁田口(サッノシタンク゛ッ)花瀬原・上花瀬原(ウエンハナセハ゛イ)・磯平(イソヒ゛ラ)・子牛ノ平(ネッノヒラ)、独特な読みです。西平(ニシヒ゛ラ)・横平(ヨコヒ゛ラ)。次は「、」を取って下さい。古川原ノ上(フクラノウエ)と読みます。古川原をフクラと読ませていますが、フクラを古川原という文字に当てたのでしょう。下ノ小浜(シタンコハマ)・宇ノ上(ウノウエ)・上ノカロウド(ウエノカロウト゛)・中ノカロウド(ナカンカロウト゛)・西

持木 —— 佐保頭(サホカ゛シラ)・中尾瀬（中尾頭はミス）・中尾瀬頭(ナカオセカ゛シラ)・平頭(ヒラカシラ)・平根(ヒラネ)・中野・土手ノ下・浜辺涯(ハマベ゛キ゛ワ)・浜元

野尻 —— 磯元・磯崎涯(イソサ゛キキ゛ワ)・川原涯(カワハラキ゛ワ)・中原(ナカハラ)

高免 —— 磯平(イソヒラ)・後平(ウシロヒラ)

東桜島 —— 磯元・磯ノ上・下崎(ケサキ)・岩ノ上・木ノ下・柴立下・中尾・上ノ山(カミノヤマ)・国生久保(コクショウクホ゛)・八久保頭(ハックホ゛カ゛シラ)・葛口(カス゛ラクグ゛チ)・仁田口(ニタクグ゛チ)・中野上(ナカノウエ)・中原持木原(モチキハ゛ル)・前平(マエヒラ)・愛ノ上(ココノウエ)

有村 —— 辰崎(タツサ゛キ)・中尾・中尾瀬・瀬ノ神上(セノカミウエ)・瀬ノ元・根口(ネクグ゛チ)堀口・植野・三合平(サンコ゛ウヒラ)・宮原上(ミヤハラウエ)・村ノ上頭(ムラノカミカ゛シラ)・竹山上(タケヤマウエ)・竹山下(タケヤマシタ)・上段(ジ゛ョウタ゛ン)・中段(チュウタ゛ン)・下段(ケ゛タ゛ン)・横畦(ヨコアゼ゛)

黒神 —— 磯脇・浜向(ハマムカイ)・下池谷(シモイケタニ)・中池谷・上池谷(カミイケタニ)・鉄砲落シ上(テッホ゛ウオトシウエ)・焼野ノ上(ヤケノノウエ)・下山神下(シモヤマカ゛ミシタ)・小松本

古里 —— 赤生ノ上(アコウノウエ)・国生久保・間野(マノ)・後平・上後平(ウエウシロヒ゛ラ)

(12)形状地名

赤水 —— 矢崎・丸尾・鞍山(コヤマ)・八久保(ハックホ゛)

横山 —— 鞍山(クラヤマ)とルビがあります。(コヤマ)(クラヤマ)、どちらが本当か判りません。桜島の役場でも読み方に困ってるのじゃないでしょうか。

小池 —— 枇杷石(ヒ゛ワイシ)・横石(ヨコイシ)これは弾く琵琶の形をした石。

赤生原 —— 梅石(ウメイシ)・横石・割石(ワリイシ)・丸尾

藤野 —— 高岩（高石はミス）

西道 —— 金床(カナトコ)

松浦 —— 岩屋・高尾・杙ケ嶽。ルビはないが(クイカ゛タケ)でしょう。

白浜 —— 割石(ワイイシ)・白嶽(シロタケ：白岩は誤記)・高岩・ミト岩、これは夫婦岩(メオトイワ)でしょう。丸尾、福良はカッコ書きで古川原としてあります。先程説明しました。

持木 —— 赤石・平石・割石・赤岩・高治木岩(タカシ゛キユワ)・八丈・摺鉢迫(スリハ゛チサ゛コ)・船ケ迫(フナカ゛サコ)

東桜島 —— 一久保(イックホ゛)・八久保(ハックホ゛)・屏風平(ヒ゛ュウカ゛ヒラ)・八丈

有村 —— 赤石・段平（タ゛ンノヒラ)・笠松

黒神 —— 赤石・片平・下平(シモヒラ)・鍋山・平山

古里 —— 赤石

(13)目印地名

赤水 —— 一本松・二本松・三本松・中高松(ナカンタカマッ)・小松山

横山 —— 柿山(カッヤマ)・竹山

小池 —— 竹山・小松ノ尾

赤生原 —— 一本松・二本松・松尾・松形瀬(マッカ゛セ)・横石平・官迫(カンサ゛コ)とルビがあるが、疑問。宮迫の間違いではないでしょうか。柳迫(ヤナッサ゛コ)

武 —— 上梶山(ウエンカッシ゛ャマ)・下梶山(シモンカッシ゛ャマ)・小栗山(コク゛イヤマ)・桜山・榎川(エノッカ゛ワ)・鹿馬野(カハ゛ノ)・上鹿馬野(ウエンカハ゛ノ)が正しい。迫を野に書き直して下さい。樺を鹿馬に変えた表現？

草木迫(クサッサ゛コ)

藤野 —— カバノ尾・松尾

西道 —— 水鳥(ミントイ)。水鳥をミントイと言いますか。

松浦 —— 栗ノ尾(クリノオ)・栗山(クイヤマ)

蕎麦山(ソハ゛ヤマ)、ここでは「ソハ゛」です。

二俣 —— 藤尾(フッノオ)・五本松

白浜 —— 平松

持木 —— 五本松・小松

野尻 —— カシノ木・茅野（カヤノ)

東桜島 —— 植松・五本松・竹松・飛松・駄竹(タ゛チク)・松平(マツヒラ)・小松山・井ケ迫・久保味(クホ゛ミ)

有村 —— 芋平(イモヒラ)・ヤンモチ平・摩虫山(マムシヤマ)

黒神 —— 上黒木(ウエクロキ)・下黒木(シモクロキ)鹿児松(カコ゛マッ)・柏原(カシワハ゛ラ)・以良原(イラハ゛ラ)・イラ迫(イラサコ)・篠納ケ迫(シノカ゛サコ)・杤木ケ谷(カシワキ゛カ゛タニ)とルビあり。なにかの間違い？

古里 —— 狐久保(キツネクホ゛)

(14)噴火地名　桜島周辺の島は、すべて噴火によるものです。これは桜島だけの独特な分類です。

赤水 —— 硫黄島(イオウシ゛マ)・蝦夷島(エヒ゛スシ゛マ)でしょうか？魚釣りに行く人たちが知っているのでしょうけど。

中島(ナカシマ)

武 —— 中島

西道 —— 中島

持木 —— 桜塚燃(サクラツ゛カモエ)・中燃(ナカモエ)横道下燃(ヨコミチシタモエ)・燃涯(モエキ゛ワ)

高免 —— 燃出(モエイテ゛)・湯之尾

東桜島 —— 燃脇(モエワキ)・湯崎(ユサキ)

有村 —— 中島・大燃ノ上(オオモエノウエ)・焼野（ヤケノ)・湯之上(ユノウエ)・湯浜(ユハマ)

黒神 —— 中島・浜島・大正燃(タイショウモエ)・燃崎(モエサ゛キ)・下焼野(シモヤケノ)・中焼野(ナカヤケノ)・湯之上(ユノウエ)・新湯之上（新湯北はミス）、湯之本

古里 —— 燃中(モエナカ)・燃涯(モエハテ)・湯之上(ユノウエ)。燃(モエ)は噴火のこと、湯は温泉、それと噴火で島が生まれる。

(15)川原・湿地地名

赤水 —— 元川原(モトカ゛ワラ)・北仁田(キタニタ)上仁田(ウエンニタ)・南仁田(ミナンニタ)

横山 —— 川原(カワラ)とルビあり。仁田

武 —— 川原(カワラ)

二俣 —— 滑(ナメイ)。ナメリがナメイに。

白浜 —— 川原(カワラ)・仁田川原(ニタンカワラ)・ナメイ

持木 —— 佐保川原(サホカワハラ)・川原坪(カワハラツホ゛)・先ノ川原(サキノカワハラ)・下川原(シモカワハラ)・下川原二番。東桜島町の場合は川原(カワハラ)とルビがある。

野尻 —— 川原・川原一番・川原二番・赤川原(アカカワハラ)

高免 —— 上川原(カミカワハラ)

東桜島 —— 水溜(ミッタマイ:ミス゛タマリ)

有村 —— 川原・上川原(カミカワハラ)

黒神 —— 上馬場川原(ウエハ゛バ゛カワハラ)・川原ウト(カワハラウト)・瀬戸川原・瀬戸ゴラ。川原がゴラに変わっているので、ゴラが本来のものだろう。仁田。

古里 —— 川穴(カワアナ)

(16)浸食・崩壊地名

東桜島 —— 崩石(イシ゛ヤイシ)。普通は(クエイシ)と読むのですが。崩れることをそのようにいうのですかね。

黒神 —— 洗出・上ノ洗出(ウエノアライテ゛)

(17)気象地名

赤生原 —— 日影(ﾋｶｹﾞ)

武 —— 日当尻(ﾋﾅﾀｼﾞﾘ)

(18)意味不明

赤水 —— 茂小山(ﾓｺﾔﾏ)・山岸(ﾔﾏｷﾞｼ)・尾発(ｵﾊﾂ?)、ﾙﾋﾞなし。朝ケ平(ｱｻｶﾞﾋﾗ)引平(ﾋｷﾉﾋﾗ)・召輪野(ﾒﾜﾉ)・美輪久(ﾐﾜｸ)

横山 —— 迷目、ﾙﾋﾞなし。

小池 —— 尾明ケ元、ﾙﾋﾞなし。猿口(ｻﾙｸﾞﾁ方崎(ｵｻﾞｯ)・松良宗、ﾙﾋﾞなし。

赤生原 —— 揚ケ谷(ｱｹﾞｶﾞﾀｲ)・ウ子(ｳﾈ)・コモツ口(ｺﾓﾂｸﾞﾁ)・八ケ石(ﾊｹﾞｼ)

西道 —— 相目野(ｱﾒﾉ)・絵袋、ﾙﾋﾞなし。山光(ｻﾝｺｳ)・中旨(ﾅｶﾑﾈ)

二俣 —— 志之五。何ですかね、シノゴノ言ウナ、ということですかね（笑い）

白浜 —— アコシ川・カロウド・ムエノワキ

持木 —— 猿口(ｻﾙｸﾞﾁ)・保良園(ﾎﾗｿﾞﾝ)

野尻 —— 一町星(ｲｯﾁｮｳﾎﾞｼ)・ビロ・下ビロ(ｼﾓﾋﾞﾛ)・船ト(ﾌﾈﾄ)・山揚・上山揚(ｳｴﾔﾏｱｹﾞ)・下山揚(ｼﾓﾔﾏｱｹﾞ)

高免 —— カロト・割狩(ﾜﾘｶﾘ)

東桜島 —— 足投(ｱｼﾅｹﾞ)・足添(ｱｼｿﾞｴ)もある。上空(ｶﾐｿﾗ)・日グルト（日ダルトは間違い）

有村 —— 行迫(ﾕｷｻﾞｺ)。東桜島に入れたのはインプットミス。

黒神 —— 上句(ｳｴｸ)・牛根(ｳｼﾈ)・上内干山・上内万・下内万、すべてﾙﾋﾞなし上ナゴラ・中ナゴラ・下ナゴラ・上ヨコ八・コク浦・中イボ・ナメキ・原ボヒ・カカイ松・ユイカ松・ヨマケンヘタ。これらはすべて意味不明。

桜島の小字総括表

二通りありますが、インプットしとことを忘れて、三日前にあわてて作り、プリントしたら以前打ち込んだものが出て来たのです。著碌もいいところです。二度の打ち込みは稽古をしたようなものです。

この表では、総数695ですが、統計実数は684です。同一小字、一番・二番の数え違いもあろうかと思いますし、重複もあります。信仰地名74は桜島全体の小字数695の10.6%を占めることが判るようにした総括表です。一番右側は東桜島・西桜島を含めてのﾊﾟｰｾﾝﾃｰｼﾞです。

この表の利用法は、一番右側に示したﾊﾟｰｾﾝﾃｰｼﾞより大きいものを三つほどマークすると、その大字の特徴を把握するのに役立ちます。

(1)信仰地名で10.6%を超えるのは、横山23.4%、有村19.2%、野尻18.4%。二つか三つをマークすればよい。沢山マークするとわけが判らなくなります。

(2)城・集落地名の2.4%を超えるものは古里10.0%、白浜6.0%、有村4.3%。しかし全体として「城」らしいものはほとんどなく集落地名が主になります。

(3)土地・区画地名は、全部で11ですからﾊﾟｰｾﾝﾃｰｼﾞをとってもあまり意味はありません。しかし一条とか十六は、ああこれは谷山の地名だな、ご免なさい（笑い）、私がボケています。土地・区画地名は八町とか六反とか長割とかで、大した意味はありません。

(4)市・町・交通地名、全部で36です。見ての通り「坂」とか「道」という地名が多いのです。桜島の場合は海上交通が主ですから陸上交通の地名は少ないと見てよい。ﾊﾟｰｾﾝﾃｰｼﾞの表を見ると白浜10.0%、武8.8%ですから、白浜・武が交通の中心地だったとの見当が付きます。

(5)水利地名。落シ・出口（井手口）のどちらかです。桜島全体で15例です。桜島には川らしい川はないので、あまりないということでしょう。

(6)人名地名。(7)開発地名とも結び付くのですが、共に少ない。人名地名が５例、開発地名が９例、(8)田畑地名も７例でﾊﾟｰｾﾝﾃｰｼﾞをとってもたいして意味はありません。

(9)産業地名は補足説明しておきます。木場・下木場は伐った木を集める場所です。猪差野は猪を解体したか、猪を捕った場所でしょう。志垣は猪を防ぐ石垣で、日本全国にあります。志垣太郎というタレントもいますが、猪を防ぐ施設です。加治屋上を(ｶﾝｼﾞｬﾝｳｴ)と読むのは鹿児島県独特の表現でしょうね。猿懸は猿を捕る罠のこと、猿が出て来る崖じゃない。馬野・牛迫以下は説明は不要でしょう。

平田功　カンジャと言ったら鍛冶屋のことですか。

平田　(ｶﾝｼﾞｬﾝｳｴ)とﾙﾋﾞがあります。

小山　加治屋町を(ｶﾝｼﾞｬﾏﾁ)と言います。

平田功　そうですね。カンジャと言いますね。

平田　今でもカンジャマチと言いますか。

平田功　はい。

平田　(10)自然地名、これが多い。とくに赤水・赤生原・野尻など、古い溶岩がある所：文明溶岩が流れた所で出入りの多い地形が多い。また「崎」の付く地名が多いのも桜島の特徴です。

(11)位置地名も多い。〇〇頭・〇〇下などそういう地名が190例。しかも藤野の78.5%松浦50.0%、白浜48.0%。その集落の地名のほとんどが〇〇上・〇〇下というような名付け方をしていることになります。

(12)形状地名というのは形が〇〇に似ているもの。発想として自然に出て来る地名です。

(13)目印地名、64例。松の木一本の一本松、そして二本松、三本松。梶が生えている、榊の木がある、栗の木が生えている、そういう植生地名が多い。動物地名はわりと少ない。あるのは狐、猿、マムシ。ほとんどが植生地名です。目印地名が多いのは赤生原24.1%、武23.5%、二俣16.7%、人口が割合多い所。

桜島だから(14)噴火地名として整理しました。平均が5.6%、多いのは高免22.2%、野尻18.4%、古里15.0%。東桜島に集中しています。ということはこれらの地名が文明噴火後あるいは安永噴火以後に生まれたことを示すのでしょう。

(15)川原・湿地地名　37例だからそんなに多くはない。川原があるのは持木・野尻・高免など。現在さかんに砂防堤防が造られている地域。雨が降ると山肌を削る浸食作用の激しい所ですから、桜島全体が隆起しない限り削られるだけで、いつかは無くなる。堆積が進んで川原が出来ることは考えられない。浸食地名・気象地名は問題にせずともよい。

(16)意味不明は多い。意味が判らなくなっているのは、歴史が古いことを示します。しかし高免の22.2%。此処は歴史的には新しい所です。小池20.0%、黒神18.6%。鹿児島語のまる出しで、意味を理解しかねるものが多い。黒神も集落としてはそんなに古いとは思いません。ちょっと解釈しかねているところです。

小字をこのように分類してみると大字それぞれの特色が大体出て来ると思うのです。こういう表を作ることによって地名の由来も考え易くなります。ちょうど12時になりましたので、後は質問を受けて終わりにします。

〔質疑応答〕

「武」姓のルーツ

久米　桜島というのは信仰的なものがあったのですか。以前は向島と言って、桜島という名前は新しい時代の命名・・・。

平田　向島では御嶽信仰はあったでしょうね。御嶽信仰はさらに権現信仰とも結び付くと思います。

久米　赤水には「羽山」が多いけど、羽山・山王・御嶽は何か関係がある？

平田　羽山は牛馬神に結び付きます。

久米　野尻は地域的にいうと？

平田　野尻は古里に近い。

久米　そこに「春山」という地域がありますね。私は「春山」のことばかり気にしているものだから。今日も出て来たら「春山」があるもんだから。春山にはやっぱり山岳信仰と馬の関係がみられる。桜島も昔はその対象になった所かなと思いますが。

平田　それは、そうでしょうね。

久米　そういう古い地名が残っていることで興味を覚えます。

平田　桜島の武と鹿児島市の武、武という地名は本来は「嶽」です。鹿児島県の電話帳で武姓を調べると、桜島町武と鹿児島市武に集中的にみられます。したがって鹿児島市武は桜島の武から移って来た人たちだなという見当が付きます。そして「武」は「嶽」信仰に由来するもの。麓で「御嶽さぁ」が祀られて「嶽（武）」という地名が生まれた。名字の90%～95%は地名に基づきます。現在は県庁所在地に人々が移住していますが、田舎のいわゆる在地の名字は根強く残っていますから名字は歴史追求の素材として使えます。鹿児島の「武」という名字は、一つのよい例です。

「尾」という地名

納　「尾」というのはどんな地形なんですか。

平田　岡(ｵｶ)が縮まったもの。ちょっとした小高い所です。地名の意味を調べる方法は根気がいるのですけど、鹿児島県の「小字一覧」から「尾」の付く地名を全部引き出して、どんな種類があるかを整理すると自然と判るのです。私は「平」と「田」の付く地名を拾いつつあるのですが、まだ終わっていません。「迫」「宇都」など、鹿児島県に多い地名を拾い上げて整理すれば必ず理解出来ると考えます。皆で手分けして取り組んで貰おうかなと思ってはいるのですが一つのテーマでも大変な作業なので二の足を踏んでいる次第です。

平田功　兄の友達で林さんという方ですが昔中国から来た人だと聞いたことがあるのですが。

平田　それも多い。向こうから来た人は頭がよく、秀才が多い。

小字の分割

納　6ﾍﾟｰｼﾞ、(16)浸食地名の上の方、黒神に瀬戸川原と瀬戸ゴラとありますが、同じものじゃないのですか。片方は漢字で片方は仮名で。川原は鹿児島流に言えばコラまたはゴラになるのです。

平田　同じですけど、こういうことなのです。小字の面積が広い場合、二つに分けて、

片方に瀬戸川原と書き、もう一方に瀬戸ゴラと書いたりするのです。他の所では○○一番・○○二番というような分け方をしてるのですが、此処は二つ別々に書いたということです。

納　高山町と吾平町の境に「論地」という所があります。高山論地と吾平論地に分けています。それから大隅半島では辺塚の場合、あれは・・・。

平田　佐多辺塚と内之浦辺塚があります。これは小字の分割ではありませんが。

平田功　川に遊びに行く時「カワンコラ」と言っていました。

平田　「カワンコラ」と言います。川原のことです。

9ケ町の小字

平田　「小字一覧」に洩れている9ケ町を一つずつつぶす目的で、今日は桜島を取り上げました。松田さんから電話が来て、公文を出して欲しいとのことで、公文で小字地名の提供を求めたのですが、何の返事もありません。しまったと思うのは税務課長宛に出したことで、社会教育課長宛に出せばよかったかなと思っています。それで高山・東串良・内之浦はしばらく置いておいて、また別のやり方でアタックしなけらばと思います。内之浦・東串良・高山の社会教育課にコネがあれば字一覧を手に入れて、このような分類をして下さい。9月、野田町をお願い出来ますか。

繁昌　7月・8月にはいろいろ行事があり9月は無理だろうと思います。

平田　彼が野田町をやれないとすると、どなたか他の所をやって頂けませんか。あなたは12月ならばやれますか？われと思わん人は高山でも坊津でも、どこか？（笑い）

米原　その後にしますが。

平田　その後ですか。上野さんはどうですか。

上野　地名は、もうちょっと後に。

平田　あなたに期待してるのは日向街道を歩く結果を聞きたいのだけど。

上野　歩くためにもうちょっと減量せねばいかんもんですから。

平田　そうですか。9月は誰かおられませんか。私はしゃべる材料をいくらでも持っているのですが。しばらくは私が手持ちの小字を整理することにしますか。

郡(ｺｵﾘ・ｸｲ)

平田功　伊集院の郡(ｺｵﾘ)を、私たちは郡(ｸｲ)と言っていたのですが、今のひとたちは郡(ｸｲ)と言っても判りません。

西田　終戦までは郡(ｸｲ)ですね。

平田　鹿児島弁では郡(ｸｲ)とか郡山(ｸｲﾔﾏ)とか曽於郡(ｿｵﾉｸｲ)とか。

平田功　郡山はクイヤマとは言いません。

平田　コオリヤマですか。

平田功　今のひとたちは極めて標準語的になりました。

平田　はい、判りました。今日はこれで終わります。

鹿児島地名研究会員名簿

平成１３年９月２日現在

青柳　俊二
池田　　純
上野　堯史
打越　和郎
小川　秀直
小山田　稔
太田　照夫
納　　栄蔵
上赤　一豊
唐鎌　祐祥
川野　雄一
霧島　一浩
久米　雅章
小園　公雄
小原　親英
小山　　更
木場　武則
坂本　　誠
下野　敏見
築地　成郎
永井　啓介
永坂　芳彦
西田　春人
能勢　正之
長谷川順一
原口　　泉
繁昌　正幸
肥後　芳尚
肱岡修一郎
平田功美子
平田　信芳
福元　忠良
二見　剛史
本田　碩孝
松田　　誠
松浪　由安
三善喜一郎
村山　謙一
山崎　盛隆
吉原　林昭
米原　正晃

物故会員

小川亥三郎・片岡八郎・桐野利彦・郡山政雄・永田典男・浜崎盛雄・原口虎雄・鉾之原矢七・本田親虎・山田慶晴・

桜島の小字

平成１３年６月３日

平田信芳

（１）信仰地名　（７４）

赤水（９）・・・祈念崎・羽山・葉山平・葉山崎・川塚・高塚・宮内・山王山・輪掛

横山（10）・・・祈念崎（一・二）・羽山・山ノ神（一番・二番）・神原（一番・二番）・神ノ尻（一・二）・御嶽

小池（２）・・・宮元・山神

赤生原（２）・・尾立・宮元

武（３）・・・・本宮・下当原・立尾

西道（１）・・・本宮

松浦（１）・・・権現山

二俣（４）・・・丸塚・宮ノ上・宮ノ尾・御嶽（みたけ）

白浜（３）・・・寺城・立道・尾立

持木（３）・・・桜塚・川原塚・御嶽

野尻（７）・・・山宮（一番～六番）・春山

高免（１）・・・丸塚

東桜島（５）・・石神・石神二番、上石神・柴立・宮元

有村（９）・・・権現・柴立・柴立山・中塚・宮原・瀬ノ神・辰上・猿上・山神谷

黒神（12）・・・寺山・宮山・神ノ浦・笠立山・山ノ神・上山神・浜弓場・呼塚・花塚・権現平・本権現・赤生塚

古里（２）・・・山の神・建神

（２）城郭・集落地名　（１７）

赤水（３）・・・中里・山下・島村

横山（１）・・・城山

武（１）・・・・新村

西道（１）・・・堀内

二俣（１）・・・大堀

白浜（３）・・・宇ノ城・中城・屋敷平

野尻（１）・・・堀内

有村（２）・・・村ノ上・村中

黒神（２）・・・下船里・前船里

古里（２）・・・上神村・下野村

（３）土地区画地名　（１１）

赤水（５）・・・八町・八町二番・八町崎・拾町・中土手

赤生原（１）・・畦道

武（２）・・・・・上六反・下六反

有村（１）・・・長割

黒神（１）・・・十反

古里（１）・・・長割

（４）市・町・交通地名　（３６）

赤水（７）・・・毛戸口・石坂・宮坂・土ケ坂・峠・歳坂・渡瀬

横山（１）・・・中道

小池（１）・・・橋口

武（３）・・・・船付・街道口（一番・二番）

藤野（１）・・・小坂

松浦（１）・・・山道

二俣（２）・・・坂之下・橋尾

白浜（５）・・・乗越（一・二）・立道（一・二）・瀬戸通

持木（２）・・・荒坂・横道下

野尻（１）・・・横道

東桜島（５）・・石道・坂上・坂之上・坂下・志野木渡

黒神（７）・・・坂之上・中馬場・下馬場・浜道・上牛道・中筋・申渡

（５）水利地名　（１５）

赤水（２）・・・落ケ平・上ノ落

横山（３）・・・上仁入木（一番・二番）・下仁入木

小池（１）・・・出口

赤生原（１）・・出口

白浜（２）・・・落シ（一・二）

持木（２）・・・長落・水尾

野尻（１）・・・出口

東桜島（１）・・出口

黒神（２）・・・天狗落し・鉄砲落シ

（６）人名地名　（５）

赤水（１）・・・千代崎（瑞祥地名？）

藤野（１）・・・権田平

西道（１）・・・権太平

松浦（1）・・・初崎

野尻（1）・・・甚蔵岩

（7）開発地名　（9）

横山（1）・・・城山添

小池（1）・・・村山園

赤生原（1）・・喜入園

西道（1）・・・半分園

白浜（1）・・・高屋添

野尻（1）・・・燃添

東桜島（1）・・足添

有村（1）・・・燃添

黒神（1）・・・山添

（8）田畑地名　（7）

赤水（1）・・・内ノ田

赤生原（1）・・古畑

松浦（1）・・・蕎麦畑

東桜島（2）・・上ノ吉畑、吉畑

古里（2）・・・上ノ畑根、畑之根

（9）職業・産業地名　（13）

横山（2）・・・木場、下木場

西道（1）・・・猪差野

二俣（1）・・・志垣

白浜（2）・・・加治屋ノ上、猿懸

東桜島（5）・・馬野（一・二）、下木場、木場、中小場

黒神（2）・・・中牛迫、塩屋ノ元

（10）自然地名　（54）

赤水（20）・・・上崎、中崎、下崎、川崎、洲崎、高崎、浜崎、小野、中野、古中野、
大野原、久保原、中原、土ケ手、土ケ根、大迫、八谷、石山、岩山、嶽

横山（4）・・・高崎、大野（一・二）、平

小池（1）・・・大迫

赤生原（3）・・大迫、原、長谷

武（3）・・・・長谷、深谷、黒土平

松浦（1）・・・宗平（大平）

白浜（4）・・・宇平、釜土尾、小浜（一・二）

持木（2）・・・上宇都、尻無尾瀬

野尻（4）・・・磯崎、中宇都、下宇都、大久保

東桜島（6）・・磯、山崎、石原、長迫、夏迫、火谷

黒神（4）・・・長崎、永野、原、大谷

古里（2）・・・長平、大久保

（11）位置地名　（190）

赤水（19）・・・高崎頭、岩下、岩坂根、磯平根、磯山、尾上、平上、平下、平根、前平
北平、久保原頭、田尻、上中野、中召輪野、召輪野尻、前迫、後迫、北迫

横山（15）・・・中浜辺、下浜崎、中、北野、中野、上リ中野（一番・二番）、中原、
上ノ中原、北原、西平、中尾、中尾瀬、上ノ中道、門之口

小池（6）・・・小池原、中原、西原、中尾、西元、横峯

赤生原（3）・・中尾、西元、上床

武（9）・・・・栄ノ尾、中ノ尾、村ノ尾、村ノ上、中津野、中野山、門口、川原口、
長谷口

藤野（25）・・・中尾（一～五）、中津尾（一～五）、中原尾（一～五）
村尾（一～五）、東原（一～四）、松平尾

西道（4）・・・小中、西元、津田口、横平

松浦（12）・・・岩下、東高尾、西尾、下西尾、中尾山、横垣、中横垣、東横垣、
横グルス、上横グルス、東向、西向

二俣（8）・・・中尾、上中尾、下中尾、大野上、大野下、横垣（一～三）

白浜（24）・・・高尾、中尾山、園山、磯口、門口、中尾口、仁田口、先仁田口、花瀬原
上花瀬原、磯平、子牛ノ平、西平（一・二）、横平、古川、原ノ上、
下ノ小浜（一・二）、宇ノ上、上ノカロウド、中ノカロウド、西（一・二）

持木（9）・・・佐保頭、中尾頭、中尾瀬頭、平頭、平根、中野、土手ノ下、浜辺涯、
浜元

野尻（4）・・・磯元、磯崎涯、川原涯、中原

高免（2）・・・磯平、後平

東桜島（19）・・磯元、磯ノ上、下崎、岩ノ上、、木ノ下、柴立下、中尾、上ノ山、
国生久保、八久保頭、葛口、仁田口、中野上、中原、持木原（一・二）、前平
爰ノ上（一・二）

有村（17）・・・辰崎、中尾、中尾瀬、瀬ノ神上、瀬ノ元、根口、掘口、植野、三合平、
宮原上、村ノ上頭、竹山上、竹山下、上段、中段、下段、横畦

黒神（9）・・・磯脇、浜向、下池谷、中池谷、上池谷、鉄砲落シ上、焼野ノ上、
下山神下、小松本

古里（５）・・・赤生ノ上、国生久保、間野、後平、上後平

（12）形状地名　（４８）

赤水（５）・・・矢崎、矢崎二番、丸尾、鞍山、八久保

横山（１）・・・鞍山

小池（２）・・・枇杷石、横石

赤生原（４）・・梅石、横石、割石、丸尾

藤野（１）・・・高石

西道（１）・・・金床

松浦（３）・・・岩屋、高尾、杙ケ嶽

白浜（７）・・・割石、白岩、高岩（一・二）、ミト岩、丸尾、福良

持木（11）・・・赤石、平石、割石、赤岩（一・二番）、高治木岩、八丈（一番～二番）
摺鉢迫（一番・二番）、船ケ迫

東桜島（４）・・一久保、八久保、屏風平、八丈

有村（３）・・・赤石、段ノ平、笠松

黒神（５）・・・赤石、片平、下平、鍋山、平山

古里（１）・・・赤石

（13）目印地名　（６４）

赤水（６）・・・一本松、二本松、三本松、中高松、小松山、小松山二番

横山（２）・・・柿山、竹山

小池（２）・・・竹山、小松ノ尾

赤生原（７）・・一本松、二本松、松尾、松形瀬、横石平、宮迫、柳迫

武（８）・・・・上梶山、下梶山、小栗山、桜山、榎川、鹿馬迫、上鹿馬迫、草木迫

藤野（３）・・・カバノ尾、松尾（一・二）

西道（１）・・・水鳥

松浦（３）・・・栗尾、栗山、蕎麦山

二俣（４）・・・藤尾（一～三）、五本松

白浜（１）・・・平松

持木（３）・・・五本松（一番・二番）、小松

野尻（２）・・・カシノ木、茅野

東桜島（９）・・植松、五本松、竹松、飛松、駄竹、松平、小松山、井ケ迫、久保味

有村（３）・・・芋平、ヤンモチ平、摩虫山

黒神（９）・・・上黒木、下黒木、鹿児松、柏原、小松原、以良原、イラ迫、篠納ケ迫
栃木ケ谷

古里（１）・・・狐久保

（14）噴火地名　（３９）

赤水（３）・・・硫黄島、蝦夷島、中島

武（１）・・・・中島

西道（１）・・・中島

持木（５）・・・桜塚燃、中燃、横道下燃、燃涯（二番・四番）

野尻（７）・・・桜塚燃（一番～四番）、代八殿下燃、（畑添）、燃涯

高免（２）・・・燃出、湯之尾

東桜島（２）・・燃脇、湯崎

有村（６）・・・中島、（燃添）、大燃ノ上、焼野、湯之上、湯浜

黒神（９）・・・中島、浜島、大正燃、燃崎、下焼野、中焼野、湯之上、新湯北、湯之本

古里（３）・・・燃中、燃涯、湯之上

（15）川原・湿地地名　（３７）

赤水（４）・・・元川原、上仁田、北仁田、南仁田

横山（２）・・・川原、仁田

武（１）・・・・川原

二俣（１）・・・清

白浜（５）・・・川原、仁田川原（一・二）、ナメイ（一・二）

持木（10）・・・佐保川原（一番～三番）、川原坪（一番～四番）、先ノ川原、下川原、
下川原二番

野尻（４）・・・川原、川原一番、川原二番、赤川原

高免（１）・・・上川原

東桜島（１）・・水溜

有村（２）・・・川原、上川原

黒神（５）・・・上馬場川原、川原ウト、瀬戸川原、瀬戸ゴラ、仁田

古里（１）・・・川穴

（16）浸食・崩壊地名　（３）

東桜島（１）・・崩石

黒神（２）・・・洗出、上ノ洗出

（17）気象地名　（２）

赤生原（１）・・日影

武（１）・・・・日当尻

（18）意味不明　（６０）

赤水（７）・・・茂小山、山岸、尾発、朝ケ平、引平、召輪野、美輪久

横山（１）・・・迷目

小池（４）・・・尾明ケ元、猿口、方崎、松良宗

赤生原（４）・・揚（アゲガタイ）ケ谷、ウ子、コモツロ、八（ハゲ）ケ石

西道（４）・・・相目（アイノ）野、絵袋、山光（サンコウ）、中旨（ナカムネ）

二俣（２）・・・志之五（一・二）

白浜（４）・・・アコシ川、カロウド（一・二）、ムエノワキ

持木（５）・・・猿口（サルグチ）、保良園（一番～四番）

野尻（７）・・・一町星、ビロ、下ビロ、船ト、山揚、上山揚、下山揚

高免（２）・・・カロト、割狩

東桜島（４）・・足投、上空、日ダルト、行迫

黒神（16）・・・上句、牛根、上内千山、上内万、下内万、上ナゴラ、中ナゴラ、
下ナゴラ、上ヨコ八、コク浦、中イボ、ナメキ、原ボヒ、カカイ松、
ユイカ松、ヨマケンヘタ

桜島の小字（総数 695）

	赤水	横山	小池	赤生原	武	藤野	西道	松浦	二俣	白浜	持木	野尻	高免	東桜島	有村	黒神	古里	計
	92	43	20	29	34	33	26	24	24	50	54	38	9	66	47	86	20	695
																		%
信仰地名	9.8	23.4	10.0	6.9	8.8	0	3.8	4.2	16.7	6.0	5.6	18.4	11.1	7.6	19.2	13.9	10.0	10.6
城・集落	3.3	2.3	0	0	2.9	0	3.8	0	4.2	6.0	0	2.6	0	0	4.3	2.3	10.0	2.4
地・区画	5.4	2.3	0	0	5.9	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2.1	1.2	5.0	1.6
市・交通	7.6	2.3	5.0	0	8.8	3.0	0	4.2	8.3	10.0	3.7	2.6	0	7.6	0	8.1	0	5.2
水利地名	2.2	6.9	5.0	3.4	0	0	0	0	0	4.0	3.7	2.6	0	1.5	0	2.3	0	2.2
人名地名	1.1	0	0	0	0	3.0	3.8	4.2	0	0	0	2.6	0	0	0	0	0	0.7
開発地名	0	2.3	5.0	3.4	0	0	3.8	0	0	2.0	0	2.6	0	1.5	2.1	1.2	0	1.3
田畑地名	1.1	0	0	3.4	0	0	0	4.2	0	0	0	0	0	3.0	0	0	10.0	1.0
産業地名	0	4.7	0	0	0	0	3.8	0	4.2	4.0	0	0	0	7.6	0	2.3	0	1.9
自然地名	21.7	9.3	5.0	10.3	8.8	0	0	4.2	0	8.0	3.7	10.5	0	9.1	0	4.7	10.0	7.8
位置地名	20.7	34.9	30.0	10.3	26.5	75.8	15.4	50.0	33.3	48.0	16.7	10.5	22.2	28.8	36.2	10.5	25.0	27.3
形状地名	5.4	2.3	10.0	13.8	0	3.0	3.8	12.5	0	14.0	20.4	0	0	6.1	6.4	5.8	5.0	6.9
目印地名	6.5	4.7	10.0	24.1	23.5	9.1	3.8	12.5	16.7	2.0	5.6	5.3	0	13.6	6.4	10.5	5.0	9.2
噴火地名	3.3	2.3	0	0	0	0	3.8	0	0	0	9.3	18.4	22.2	3.1	12.8	10.5	15.0	5.6
湿地地名	4.3	4.7	0	0	2.9	0	0	0	4.2	10.0	18.5	10.5	11.1	1.5	4.3	5.8	5.0	5.2
意味不明	7.6	2.3	20.0	13.8	0	0	15.4	0	8.3	8.0	9.3	18.4	22.2	6.1	0	18.6	0	8.6

地名研究会報

第７４号　　平成１３年１２月２日
鹿児島地名研究会

Ⅰ.第74回例会　平成13年９月２日（日）　於教職員互助組合会館和室
（出会者）　上野堯史・納　栄蔵・小山田　稔・川野雄一・坂口達夫・坂本　誠・築地成郎・西田春人・繁昌正幸・平田信芳・福元忠良・松田　誠・松浪由安（計１３名）

Ⅱ.大日本地名辞書読会　P.1762～P.1763　穆佐・去川・高岡・八代・綾・三俣

Ⅲ.神話を地名から眺める
〔問題となった地名および事項〕　穆佐・高岡、山之口・八代、伊東氏の飫肥領有、征西戦記の記事、島津久豊の墓、薩摩街道、新しい歴史教科書問題、古代の日本と朝鮮半島、神武東征神話、イザナギ・イザナミ神話、スサノオノミコト、草薙剣、神話と歴史、クマソとハヤト、記紀の見直し荒田・新田、日本武尊、特攻機を見送る女学生、日本人の中国観と朝鮮観

穆佐・高岡は要衝の地

平田　一通り読んでみて、去川関・高岡郷・穆佐院、それから山之口・三俣駅は交通の要衝にあっただけに歴史的にも華やかな合戦が行われたことがよく判ります。先程地図で見たように宮崎のちょっと上流、山裾にかかった所ですが、こちらに行けば人吉に抜けますし、こっちに来れば小林・吉松を通って大隅国府に出て来ます。そういう重要な所になります。問題にしたいことがあったら何なりと出して下さい。此処は実際に歩いていません。小山田さんが歩いておられるので補足することがあったら出して下さい。

上野　この夏休み、都城から歩きました。宮崎に行くのは10号線を行くよりも鉄道沿いに歩いた方が早いのではないかと思います。鉄道（日豊本線）と10号線は離れておりますので。鉄道沿いの方が早いのじゃないかと思いますが、10号線が昔の道路ということで歩きました。憶えているのは去川・高岡・山之口という地名があったような気がするのですけど。

平田　山之口は清武の方に抜ける道ですよ。

上野　そうしたら別ですね。鉄道沿いにあるのですね。ちょっと地図が念頭にないものですから。

平田　山之口というのは此処ですよ。都城から清武に向かう所（地図を指さす）。

上野　そしたら鉄道沿いですね。10号線の方にはないですね。

平田　えっ？

上野　高岡まで歩いたのですが、10号線の方じゃないですね。10号線を歩くのはちょっと危ない。やっぱり歩かん方がいいですね（笑い）。歩道がないのです。

平田　もう車だけ。

上野　えゝ、車専用になっています。去川は小学校やらあっていろんな見る所もあります。此処からは歩道も一部あったりします。橋を渡ると10号線の旧道があります。偶然

入ったのが旧道でした。旧道は真っ暗ですけど、まあ安全です。都城を出たのが朝の８時すぎ、そして高岡に着いたのが夜の６時。

平田　夕方？

上野　もう真っ暗でした。記録もとっておるのですけど、ちょっと呼び出さねば判らないので（パソコン持参）。

平田　いつか話をして下さい。

上野　これを見るといくつかデーターが出て来るのですが。

平田　去川関は重要な所で、上井覚兼日記に頻繁に出て来ます。

山之口・八代

坂口　日豊本線に山之口という駅がありませんかね。

上野　ありますね。

坂口　あれじゃないでしょうか。

上野　あれのこととすれば、やっぱりＪＲですね。

小山田　青井岳・山之口と、駅がある。

平田　あっちを通るのですか、ＪＲは。

上野　はい、ＪＲと10号線は全然違う経路です。

平田　そうしたら途中で分かれるのでしょうね。どこから分かれるのですか。

小山田　都城を出てから、すぐですね。

上野　都城を出るとすぐです。

平田　出てすぐ分かれるのですか。

上野　３号線と鹿児島本線は大体並行していますが、10号線は都城から先は全然違うのです。歩いてみて、どうして昔の道じゃなくて新しい所に造ったのかなと不思議に思ったのですが。

平田　俊寛が流されて来た道は、清武から都城に出て来る道だったから。

上野　10号線の方はトンネルを相当掘らなきゃいかんとですよね。もしあすこを鉄道が通るとすれば。こっちの方はトンエルを沢山掘らずに済んだのかな、と思います。

小山田　ＪＲのトンネルは青井岳から清武に向かう所だけ。

上野　もし10号線沿いに沿って行くとすれば、トンネルを相当掘らねばいかんでしょうね。

平田　あゝ、国道10号線というのは山が多い？

上野　何回も山を登ったり下りたり、登ったり下りたりするのです。大変な道です。

平田　ＪＲの道は宮崎につながり、高岡への道は西都：日向国府の方につながる。

上野　はい。私が歩いているのは重年公が参勤交代から帰って来られた道の逆になると思うのです。高岡から宮崎に出るのじゃなくて、此処に出て来る。八代とか深年とか、こういう地名が出て来る所、国富町に出て来る道です。それからちょっと回り道になるのですけど、佐土原に多分行ったと思うのです。

平田　それは古い駅路になるのでしょう。日向国の駅路の場合は複数の道を考えていいのじゃないかな。16も駅があるわけだから。薩摩や大隅は駅の数が少ないから一本道が主でしょうね。

上野　以前の記憶とちょっと混乱しているので。

平田　上野さんには改めて日向街道の話をしてもらいましょう。他にありませんか。

西田　日向の八代のことを知らなかったものですから。熊本にも八代がありますね。八代は地名的に、語源的に何か関係があるのですか。島津義弘は八代領主だった時期がありますが、あれは肥後の八代でしょう。

平田　そうだと思いますけど。

西田　この辺：穆佐・高岡は義弘の旧領土内ですよね。この八代は何か関係があるのですか。

平田　やっぱり交通の要衝ですから与えられているのでしょう。

西田　肥後の八代、日向の八代？山之口というのは此処しかないのですね。

平田　山之口という地名？

西田　山之口姓の根源は此処にある。

平田　あゝ名字の話ですか。（編集者後記：議論噛み合わず。代ｼﾛ・ﾀﾞｲは、町・反・歩以前の土地面積の単位。２町＝1,000代、５歩＝１代となる。八代という地名が各地にあっても不思議ではない）。

伊東氏の飫肥領有

平田　伊東氏は島津氏に敗れて、救いを求めた大友氏と共にさらに破られるわけです。それが契機となり豊臣秀吉の島津征討に展開します。島津義久が降伏した時、伊東氏は以前領有していた穆佐・高岡あたりを支配したらと、交通の要所だからと、秀吉側近から意向打診があったらしいのですが、穆佐・高岡よりも飫肥をと申し出たとのことです。海に開けた所の方が実入りがよいと考えてのことだと思います。その結果、高岡は他の者に与えられた。それは兎も角としても穆佐・高岡は日向国の中では重要な地域だったと理解出来ます。

征西戦記の記事

平田　『征西戦記』から引用した西南之役の戦闘記事がよく出て来ますが、西南之役の頃までは昔以来の道を通って攻め上り、逃げる時もその道を通りますから、交通の要衝を官軍もねらったと言えます。したがって戦闘の記録も必ず顔を出すことになります。中世・近世の交通路を考える時には西南之役の戦場になった所を見直すのも一つの方法です。薩軍が攻め上る時も、出水筋とか大口筋それから加久藤越えと三つに分かれて行きます。逃げる時は人吉から山越えで宮崎に逃げたりしています。また、人吉・大口で勢力を蓄えて鹿児島奪回作戦をやるのが、５月初めから６月のかけてです。７月初めには総崩れとなって、いわゆる日向筋に薩軍は逃げて行くことになります。ですから、宮崎県の道路も西南之役の薩軍の退却路という視点で見ると意味がある読み物になります。何分この地域を歩いていませんので話が控えめにならざるを得ません。

島津久豊の墓

平田　久豊は穆佐を支配していたのですが兄元久（第７代）が死ぬと、伊集院頼久の子犬千代丸が穆佐を後を継ぐことになっていたのを、久豊が鹿児島に帰り犬千代丸を追い払って本家を継ぐことになります。久豊が穆佐・高岡を与えられていたということは此処が重要な拠点だったことを示していると思います。

小山田　久豊の墓はあすこにあるのじゃないですか。

平田　穆佐にあるのですか。

小山田　お墓はあすこにある。福昌寺のは他所から持ってきたのじゃないですか。

平田　そうですね。島津の殿様の墓は何カ所もありますからね。祀り墓それから埋め墓など。遺言の通りにどこに埋めろと言われるわけですから、久豊の場合は穆佐にあるはず

ですね。

小山田　はい。穆佐の小学校の裏山になります。また現在の小学校の裏には忠国が生まれた時に植えた杉というのがある。

平田　あゝ、残っているのですね。

小山田　小学校の裏山に今でも忠国が生まれた時に植えた杉ということで大事にされている。穆佐は高岡でも特別扱いにされている感じです。

平田　あゝ、古い場所ということで。

小山田　はい、古い場所として。小学校も別にあります。小さいですけどね。そういう史蹟が残っていることで、穆佐小学校の校長さんが案内して下さいました。高岡資料館が出来ていましてね、穆佐の時代のことならば電話をくだされば案内しますということでした。後で聞いたら小学校の校長さんでした。

薩摩街道

平田　一昨日の晩、『宮崎県の地名』（平凡社）で、この一帯の部分を読んだのですがこの辺りにはずらりと城が並びます。城の名前が数多く出て来ますから、城跡を地図の上に落として辿って行けば昔の道は自然と理解出来ると思いました。

上野　薩摩街道を都城の図書館で調べてみました。新しい『宮崎県史』を見たのですが末吉の通山から始まり都城を通って高城町を通り抜けて高岡に出る。高岡の入口に去川関がある。高岡の町から国富町の嵐田。そこから本庄を通って佐土原に向かう。本庄のある所が深年(ﾌｶﾄｼ)ですね。此処はまだ歩いていないので説明出来ません。

平田　深年のそばに伊佐生(ｲｻﾞｵ)もあるでしょう。

上野　この辺は歩こうと思っていますがまだ歩いていません。暑くない時期になったら歩くつもりです。

平田　期待しています。下調べをされる時に城跡を点で落とされると見当が付け易くなると思います。

上野　城跡を、ですね。はい。どうしても土地勘がないので、歩いてから後で判ることばかりです。

平田　他の県のことですから、これぐらいでお茶を濁しましょう。前半はこれで終わって、休憩にしましょう。

神話を地名から眺める

平田信芳

新しい歴史教科書問題

表題を「神話を地名から眺める」としましたが、事の発端は話題になっている『新しい歴史教科書』が神話を取り上げたからです。今、本屋に行きますと、平積みで賛成派・反対派両方の本がずらりと並んでいます。私は『国民の歴史』『新しい歴史教科書』、西尾幹二『歴史を裁く愚かさ』、勝岡寛次『韓国・中国の歴史教科書を徹底批判する』などを買って読みました。それともう一つ読んでおく必要があるなと思ったのは、三浦朱門（元文化庁長官）『歴史・公民全教科書を検証する』でした。彼は中立の立場と言っていますが、扶桑社側に近いようです。ただ、すべての教科書を読んで批判を加えているので注目に値します。現物を回しますから見てくださ

い。これらを読んでみて、大変だなと思いました。反対の本も沢山出ているのですが１冊だけ買いました。沢山買っていろんな知識を注入されるのも嫌ですから、岩波書店から出たものだけを買いました。

結果は報道された通り、採択率0.03%なんてことで安心していますが、各採択委員が５人ぐらいおって３対２で否決しているのが多いわけですから、0.03%でのんびり構えておったら４年後には大変なことになると思うのです。そこで扶桑社の歴史教科書がどんなものであるかを整理しておく必要があると思って、こういうもの『歴史教科書をめぐる諸問題』を作りました。

ﾍﾟｰｼﾞにしたがって説明します。１ﾍﾟｰｼﾞはどういう流れがあるかを説明したものです。これは家永裁判からず一っと続いている問題であることを示したものです。家永教科書裁判では「検定は合憲」としたけれども、南京虐殺・日本軍の残虐行為・草莽隊・七三一部隊の記述を削ったのは違法だと最高裁は判断を下したわけですから、喧嘩両成敗であったのです。

ところが家永裁判が国際的関心を呼び韓国の女性（元慰安婦）が告発したことによって問題が大きくなり、慰安婦問題を教科書に取り上げるようになります。岡山県議会が中学生段階でこんなことを教えるのはおかしいと問題にしてから各県議会に反対陳情採択が広まったのです。鹿児島県議会でもそういう陳情採択がなされました。

一方、女性の有志は国際戦犯法廷というものを開いて慰安婦問題は女性の人権無視と今でも息巻いております。それとは別に教科書に従軍慰安婦の記述があることを納得しないグループが「新しい歴史教科書を作る会」を組織し、西尾幹二という人物を中心にキャンペーンを繰り広げているのです。

西尾幹二は哲学者で、ニーチェを専攻したということです。研究するのは自由ですから何を専攻しようと構うことじゃないのですが世界史を学んだ者はそれだけでびっくりするのです。というのは、ニーチェの超人哲学はナチスに大きな影響を与えたとされるからです。ナチスの主張はドイツ民族の優秀性ということでした。

新しい歴史教科書を作る会の人々は今までの歴史教科書は自虐史観である。日本人の誇りを持てと、それをねらった教科書を作ろうとして、検定にまでこぎつけたのです。

４月、検定に合格すると、５月８日韓国政府が35ヵ所の修正要求をします。その後を追いかけて中国政府が８項目の修正を要求して来ました。

扶桑社の教科書と朝日新聞に出た両国の要求を見比べながら整理したのが２ﾍﾟｰｼﾞから10ﾍﾟｰｼﾞになります。新聞の切り抜きなどは紛失することが多いので、こういう形にしておけば利用出来ると考えたのです。

10ﾍﾟｰｼﾞの「韓国のコメントへの疑問」というのは私の率直な疑問をあげたものです。あちらこちらの成人学級に行ってざっくばらんに聞くと、教科書問題は内政干渉だとかんかんに怒っているお年寄りが多いのです。

韓国は何故外交問題として出して来たのかその理由が判らない。というか日本人が韓国・中国を理解していないのかも知れません。(2)は奇異に感じたことです。朝日修好条規とか韓日会談と韓国では表現します。日本はその逆を行くわけです。日朝修好条規・日韓

会談と。サッカーのワールドカップでも韓国では韓日共催という。日本で日韓共催と表現したらクレームがついた。結局世界サッカー連盟は韓日共催という形で指導した経緯があります。それはそれでよいのですが、コメントして来たものを見ると、日清戦争・日露戦争を清日戦争・露日戦争という表現を使っています。韓国は何故そういう表現をしなければならないのか、びっくりさせられる表現です。これは初めのうちだけ朝日新聞も出したのですが、そのうち全部伏せて出さないようにしています。

(3)は文化科学省が「○○ということは広く認められている。あるいは○○の説があるから決して誤りとは言えない」と繰り返し述べていることです。政治家はそういう解釈でよいかも知れませんが、歴史家は永久に食い違った見解とつき合わされるわけですから、日本の歴史家はたまりません。

11ﾍﾟｰｼﾞから18ﾍﾟｰｼﾞまでは、私がこれは変だと思ったことを、感想を述べたものです。その中で二つ問題にしたいことがあります。一つは魏志倭人伝を取り上げてけなしていることです。魏志倭人伝はいい加減な伝聞記事である。こんなものを日本の歴史家が信用して歴史教科書に取り上げているのはおかしいと。その代わりに古事記・日本書紀に出て来る神話を学んだ方がよいというふうに持ち出して来ているのです。

古代の日本と朝鮮半島

話が飛び飛びになりますが、韓国が持ち出したクレームの最初に、任那日本府問題があります。これは全面的に否定してよいのかと思ったのです。確かに日本府というのは日本書紀の表現です。日本書紀は信ずるに足りない、と来ます。それから「日本」という表現は当時ないのだから、任那日本府があったなんてことを日本の歴史教科書が書くのはおかしい、とのクレームです。しかも韓・日両国の研究者50年の研究の成果で、そういうものはなかったということが定説になっていると頭ごなしに来たのです。

確かに韓国の歴史家にとっては任那日本府があったということは、眼の上のたんこぶのような気持ちがするでしょう。日本の歴史家に同調する研究者がいることはいます。それに基づいてのことだろうと思うのです。しかし任那は加羅とか伽耶とも言い、これが滅ぶのは日本の高校歴史教科書の年表に562年のことと記されています。それ以前の532年に事実上新羅に併合されています。その1世紀後に百済が滅び、白村江の戦いに敗れて日本は朝鮮半島から手を引きます。そして水城を築き、大野城を築き、大宰府を造りあげて、朝鮮半島からの脅威に備えます。そういう脅威に対して国内を立て直すために律令体制が強化されることになります。白村江の戦いともつながって来る問題ですから、頭ごなしに任那日本府はなかったという説を突きつけられると、調べる気にならざるを得ません。そこでおかしいなと思いながら韓国の正史である『三国史記』を読み始めました。

『三国史記』を読んで整理したのが、19ﾍﾟｰｼﾞ以下になります。比較年表を作ってみました。20ﾍﾟｰｼﾞの下の方に大きく書いておきましたが、卑弥呼の使者が新羅に来ているのです。これはもうびっくりしました。古代史の本も相当読んでるのですが、卑弥呼の使者が新羅を訪れたなんてことは、今まで問題にされたこともないのです。

20ﾍﾟｰｼﾞから24ﾍﾟｰｼﾞまでが比較年表です。日本関係の記事が沢山出て来ます。枠からはみ出す場合もあり若干間引いてあります。もっとも『三国史記』は鎌倉時代：12世紀に出来た本ですから、それ以前の歴史は信用出来ないと一刀両断にする研究者があるかも知れませんが、古くから伝えた史料を寄せ集めたとも考えられますので、あながち捨てたもんじゃないとも思います。

比較年表を作りながら、ふと考えたことがあります。後漢書とか魏志倭人伝に出て来る事柄は歴史解釈の絶対的な年代・物差として動かないものと考えられています。たとえて言いますと、20ﾍﾟｰｼﾞの左側にある57年に倭奴国の使者が洛陽を訪れて、光武帝から倭国王への金印紫綬を授けられています。後に「漢委奴国王印」と刻んだ実物が志賀島から出土します。これはもう絶対に動かないものさしです。107年には倭国王師升が後漢に使者を遣わして生口（奴隷）160人を献上しています。この事実も動かない。238年に卑弥呼が使者を派遣したということも動かない。これらを日本の歴史家は誰も否定しないだろうと思うのです。

ところが考えてみると、朝鮮半島のことを見落としているわけです。中国に行くためには朝鮮半島との交流が頻繁になければ、道を知っていなければ行けないわけです。従って57年、107年、238年の背景に朝鮮半島との交流が頻繁にあったと考えるのが当然だ、と。そうすると『三国史記』に書いてある事柄というのは、あながち否定出来ない。今までの歴史解釈を検討し直せばよいと考えた次第です。今まで日本の歴史家は、中国ばかり見ていて朝鮮半島のことを全然顧みてもいなかったのです。

従来の日本史の常識は、卑弥呼の宗女壱与（台与）の使者が行った266年を最後に中国の史料から姿を消します。その次に現れるのが高句麗の好太王碑文に倭の大軍が攻め込んで来たと書かれている辛卯年：391年になります。そこで、266年から391年の間に日本は大和朝廷に統一されたのだろう、とみるのです。4世紀後半に統一した勢いを以って日本（倭）は朝鮮半島に攻め込んだと解釈して来たわけです。しかし『三国史記』をみると、倭の軍勢は1世紀から海を渡って行っているのです。そうすると、任那すなわち加羅・伽耶と呼ばれた所とは、頻繁に往来があったとみなければならない、と考えるのです。その観点で比較年表と古代の日本と朝鮮との関係を整理してみました。

神武東征説話

今日の主題、神話の話に移ります。まず神話では「神武天皇の東征」が持ち出されています。カムヤマトイワレヒコ。「イワレ」という所の出身を示すと言われています。地名との結び付きがあるのです。大和のイワレ村。これは通説になっています。イワレヒコが初代天皇：ハツクニシラススメラミコトとなって、神武天皇と呼ばれます。この天皇が45才の時、東征の決心をされる。大和を平定して神武天皇が即位された日を太陽暦に直したのが2月11日で、これが建国記念日であるとの説明なのです。建国記念日をこのように説明しているのですが、隠していることがあります。

古事記・日本書紀では、神武天皇の崩御が127才、開化天皇が115才、崇神天皇120才、垂仁天皇が140才で亡くなるとの記述があり

ますが、それは全然触れずに頬被りするわけです。このことに子供たちが気付いたら教師は説明が出来なくなると思います。

鹿児島県にはあちらこちらに神武天皇の石碑：住まいされた所とか立ち寄られて所などの石碑が建っています。大きいものをいうと隼人町にある「高千穂宮址」の碑、3ﾒｰﾄﾙを優に越します。彦火火出見尊の宮居址との説明があります。柏原には此処から東征されたという石碑、谷山には神武天皇が立ち寄られたとの石碑が建っています。加世田には笠沙宮址というものがあります。最近では金峰町のあちらこちらに神話の里を示す看板が立っています。

他の県では神話を取り扱うのに、神話だとすればそれで済むのですが、鹿児島県には実物として石碑があるのです。それに子供たちが気付いたら、親が気付いたら、どうやって説明するのか。これは寝た子を起こすよりもきびしい、と思うのです。

イザナギ・イザナミ神話

13ﾍﾟｰｼﾞの下の方「イザナキの命」。われわれは「イザナギノミコト」で憶えているのですが、この教科書は「イザナキ」と書いてあります。そしてカッコ書きで（イザナギ）としてある。何故「イザナキ」なのか。これは最近民族学者か神話学者がそのような表現を使い始めたためと思いますが、小さい時から何百回も聞かされた祝詞があるのです。「掛けまくもあやにかしこきイザナギノカミ筑紫の日向の橘の小戸の檍原に」は、祝詞の決まり文句です。末吉町に檍原があります。宮崎市にも檍原があります。身近な所に檍原があり、今でも「イザナギノカミ」はしょっちゅう聞かされています。

十数年前『歴史と旅』（秋田書店）に「伊座敷という地名」を書きました。昔の伊座敷の浜は実に綺麗な砂浜だったのです。座敷のような青松白砂そのものの浜でした。今は漁港になってセメントで固められ、おもかげはありません。その写真を見ながら、その時、ふと考えました。波が寄せて渚が出来る。波が静かになったら、ナギになるわけですからナギとナミは浜辺での思い付きだ、と。「いざ」にしても「いさ」にしても、誘う表現ですから、ナミに誘われてナギサが出来、ナギになっていく。そういう物語がイザナギ・イザナギの物語で、年寄りが浜辺で子供たちにそんな話をして聞かせたのだろう、と考えたのです。イザナギノミコト・イザナミノミコトが高皇産霊神・神皇産霊神たちの命令を受けて国づくりをする時、天浮橋から天逆鉾で油なす漂える海を掻き回して鉾を上げると、雫が落ちてオノコロ島が出来たという国生み神話が始まっていくのです。オノコロ島を分析すると、オノコ（男児）とロ（名詞語尾）になります。そうしたら男の子が二人の神様の結び付きによって生まれた、という話を子供たちにしたのであろう。それがイザナギ・イザナミ神話の始まりだ、と考えてよいのではないか。イザナギとイザナミの神話は浜辺で出来た物語である。

そこで延喜式神名帳に当たってみました。延喜式には三千いくらかの神様の名前があります。イザナギノミコトを祀った神社を拾いあげてみると八つぐらい出て来るのですが、ほとんどが淡路島周辺です。淡路島は古事記・日本書紀では別名オノコロ島とされます。オノコロ島と淡路島とイザナギノミコトはそこで結び付きます。

問題になるのは何故こちらの方に檍ケ原があるのか、ということ。イザナミノミコトが亡くなっていわゆる横穴古墳に葬られるわけです。イザナミノミコトが逢いに行ったらイザナミノミコトの死体に蛆がわいていた。見るなと言われていたものを見たとのことで黄泉の国の鬼に追いかけられます。逃げて来てミソギをするのが大淀川上流の檍ケ原になります。そのミソギの時に天照大神や素戔嗚命が生まれる物語になります。何故こちらに檍ケ原が登場するのか判りませんが、そこは神話としておきましょう。

素戔嗚命（ｽｻﾉｵﾉﾐｺﾄ）

天岩屋戸伝説とスサノオの命についてですが、この著者は随所に彫刻とか絵画を入れてその作者の名を書き入れています。堀江友声なんて名前や今までの教科書では出て来たこともないような作者の名前が出て来ます。この著者の趣味なんでしょうね。

それからニニギの命・スサノオの命などはこの教科書が初めて使った表現じゃないかと思います。今まで見たことがありますか。

上野　「の」まで片仮名で書くのであれば判りますね。

平田　「命・尊」はミコトと読むのですがニニギノミコト・スサノオノミコトとする方が理解し易い。「の命」という平仮名・漢字混じりの表現は新しい歴史教科書をつくる会が始めた初めての表現じゃないでしょうか。パソコン操作の問題ですから慣れてしまえばどうってことはないのでしょうが、今までとは違った表現です。

また、スサノオノミコトのスサというのも島根県に須佐という地名があります。（後記：須佐は山口県）。スサノオノミコトはそこに関係する人物だろうと思うのです。

草薙剣

その次「草薙の剣」という表現。草薙剣を三種神器として説明していますが、われわれが習って来たのは、八岐大蛇を退治した時に天叢雲剣が出て来る。これが後に三種神器になった、と。ニニギノミコトが高千穂に天降る時に授けられる三種神器も天叢雲剣と習った。日本武尊が駿河の焼津で囲まれて火を付けられた時に周囲を薙ぎ払って危機を脱したということで草薙剣と名前が変わった、と。この三つの関係を無視して草薙剣が最初から三種神器であったような表現をするのは歴史の教科書としてはちょっとおかしいのじゃないかとの指摘です。先週、新撰姓氏録を見ていましたら、天叢雲命という人物もいるのです。びっくりしました。（後記：古事記・日本書紀をみると、扶桑社の教科書のように八岐大蛇退治の時も天孫降臨の際の三種神器も草薙剣になっている。一書に曰く、天叢雲剣とあり、古事記・日本書紀自体の記述なり写本に問題があることを示していると考えられる。これまたびっくり）。

神話と歴史

日本神話の取り扱いですが、鹿児島県には可愛山陵：ニニギノミコトの陵があり、ヒコホホデミノミコトの高屋山陵、ウガヤフキアエズノミコトの吾平山陵もあります。いわゆる三山陵です。神話が歴史の教科書に登場して来ると、否応なしに高千穂をいつも見ているわけですし三山陵もあるわけですから、これらと天皇とのつながりの説明を迫られることになります。そうしたら神武天皇の東征も歴史的に正しいと説明しなければならなくなります。神話ではそうだが歴史では異なる

との説明は出来なくなるのです。そうなって来ると、昭和14年に出来た『鹿児島県史』は作り直さなくてよいことになる。極言するとですね（笑い）。

さて、ニニギノミコトが高天原から高千穂峰に降って来る天孫降臨の話を、高千穂峰を仰ぎながら聞かされることになるわけですが今の子供たちは宇宙から見た地球を知っているわけですから、天から降って来るなんてことを信ずる者はいません。「天」と「海」とはつながって見えるわけですから、海から渡って来たと考えざるを得なくなります。天孫族の出発点はどこになるのかということを親から入れ智恵されたら、江南か朝鮮半島かと考えざるを得なくなります。昔はこんなのは不敬罪として頭ごなしに抑えつけられたのですが、今後はそういうわけにはいかないと思います。

クマソとハヤト

これは以前から言っていることですが(14)クマソとハヤトのところ。ヤマトタケル・イズモタケル・クマソタケル・カワカミタケルなどが古事記・日本書紀に出て来ますが、ヤマト・イズモ・カワカミはすべて地名です。クマソだけが何故民族や種族名になるのでしょうか。この教科書は「九州南部にはクマソまたはハヤトとよばれた人たちがいて、古くから大和朝廷に反抗した」と書いているのですが、隼人が抵抗するのは７～８世紀です。８世紀の初めで最後になります。７～８世紀頃、クマソという表現はないわけで、クマソとハヤトをごっちゃにしているのは認識不足も甚だしいと言わざるを得ません。

古事記・日本書紀の見直し

この教科書問題が起きてから『三国史記』を読み直し、古事記・日本書紀を見直さざるを得なくなりました。日本書紀を見ると、これが日本の正史かと思うぐらい朝鮮半島のことばっかり書いてあります。

古事記・日本書紀は、戦後皇国史観が否定されて日本の歴史家は全然顧みもしなかったのです。それを見る研究者もほとんどいなかったと思うのです。朝鮮半島の歴史を研究する人だけに限られていたでしょう。この50年間、日本の歴史家は古事記・日本書紀を見なかったわけです。韓国の歴史家は三国史記だけでなく、日本書紀からも相当情報を得て分析しているわけです。その差は大きいのです。

古事記・日本書紀を改めて読み直してみると、日本書紀は中国の正史を手本として採用したわけですから、天皇が即位するまでの経過とか、即位後は年月順に起きた事件が書いてあります。これは歴史の本ですから仕方のないことです。

一方、古事記はこんなのまで否定してよいのかなというような書き方なんです。まず、その天皇の宮廷の所在地があげてある。どこで国を治めたかということです。その次にお妃の名前。この妃との間の王子は何人、この妃との間の王子はこれこれと。これらの王子の子孫の苗字。そして何才で亡くなり、どこそこに葬った。いわゆる、天皇の系譜が書いてあるだけなんです。そして特別な記事があるものについては説明が加わっている。おかしいのは先程述べた百何歳まで生きたということです。紀年がおかしいでけであって後はこれだけのものを創作したのだろうかと思われる内容なんです。創作なんてのはそんなに加わっていないのじゃないか。

古事記が出来たのが712年です。日本書紀は720年です。今まで見もしなかった新撰姓氏録を見ると、これは815年に出来ているのですが、天皇の子孫とか、古くから日本に渡って来ていた人たち、古くから住んでいた人たち、新しく帰化して来た人たちなどに分けています。その昔、皇国史観の時代、国史というのを習いましたが、その最初に皇別・神別・蕃別というのを習いました。蕃別とは帰化人ですが、優秀な人たちが多かったと思います。神別は古くから日本に居た人たちです。

新撰姓氏録を見ると、神別には天神と地祇があるのです。天神・地祇となって来ると、これは天ツ神と国ツ神の分類とも結び付きます。現在はパソコンの時代になりましたのでパソコンを使って整理すれば、新しいことが出て来るだろうと思います。この苗字は日本書紀にあるとか、ないとか、そういうことを詳しく書いてあります。

新撰姓氏録の特徴は苗字を系統別・地域別に類別していることです。左京にいる人たち右京の人たち、それから山城国・大和国・摂津国・河内国・和泉国、いわゆる五畿内に住んでいるいろいろな苗字をあげて、誰の子孫だと詳しく書いてあります。その中の一つにホスセリノミコトの子孫というのがありました。これは畿内に移住した隼人の子孫になります。これは疑えない事実です。新撰姓氏録はうそは書いていないなと思いました。古事記にせよ、日本書紀にせよ、新撰姓氏録にせよ、奈良時代から平安時代の初めにかけて史官たちが組織的に作りあげた歴史書や家族の系譜などを整理したものでしょうから綿密に作られています。従来、日本では新撰姓氏録の研究者が、その細かい部分を調べて来たにすぎないのではないか。ＩＴ時代になったので全部をインプットして整理すれば何か把めるのではないか、と思います。

問題は紀年だけです。二千六百年説。これが作りあげたものであることは、那珂通世説以来変わらないわけです。骨組みは出来ているが細かいところの追求がなされていない。パソコンを駆使して苗字などを整理し分布図を作っていけば、古代日本の歴史ははっきりして来るのではないかと思います。

神話を地名から見る、という題を掲げましたが、実際は歴史教科書をめぐってこんな問題があるということを話したかったのです。歴史教科書をめぐる諸問題をテーマとするとうるさくなって来るだろうと思って題を変えました。羊頭狗肉を掲げたようですが、そういうことです。

二・三説明しておきます。例えば17ﾍﾟｰｼﾞの(7)大仙古墳のところ。仁徳天皇陵は非常に大きいことだけを宣伝しているのですが、私が指摘したいのはこういう形です。（銅鐸形を板書）。２月、韓国を旅行した時、集落のはずれに墓地があるのに気付きましたが、墓域がすべてこういう形なんです。これを見て思いました。この形：仁徳天皇陵周濠の形は朝鮮半島から渡って来たものだ、と。そうすると天神は古くから日本列島に住んでいた人たちでなくて、古い時代に日本列島に渡って来た人たちだ、ということになる。もう一つ「天孫」というのがあるのです。天神と地祇の間に天孫というのがあります。これはニニギノミコトとともに渡って来た人たちです。地祇は土着民。そして新しい時代：４世紀以降日本に渡って来た人たちが帰化

人とよばれ、蛮別になります。

そうすると、日本の文化を造りあげた人たちは大陸から渡って来た人たちがほとんどだということになるのです。韓国の人たちは喜ぶかも知れませんが、古事記・日本書紀・新撰姓氏録を見ていくと段々憂鬱になるような状況が出てくるのじゃないでしょうか。

日本人の血の中には、中国や韓国の血が相当入っています。しかも、それらの人たちが日本列島の支配階級として続いて来たということの方が事実のようです。残りの20分ほど質疑応答の時間に当てたいと思います。その方が新しい視点での話題が出て来るのではないかと思います。

〔質疑応答〕

大陸渡来の文化

坂口　朝鮮半島とか中国南部あたりで反乱が起こり人々が東の島に追っ払われたというか、流れて来る。

平田　避難して来る。

坂口　避難して来るとか移り住んだりします。それが度重なってこの列島に人が住み着いただろうと私も思います。

平田　渡って来た人たちは優秀ですからね

坂口　その人たちが治める立場になる。

平田　それは事実だと思います。

坂口　近くは仏像にしても学問にしてもほとんどが大陸の方からやって来ているものだし、昔の服装を見ても聖徳太子の時代の親子何人かで並んでいる服装なんかも朝鮮半島や中国民族の服装に見えますもんね。

荒田と新田

納　鹿児島の場合の荒田八幡。現在は荒田と書きます。それと鹿大の裏に「神田」という電車停留所があります。新田やろかい、神田やろかいと思うのですが、荒田八幡のアラタも荒田というよりは新田：アラタ：新しい田圃ではないかいな、と考えたことがあるのですが。

平田　荒れた所を新しく開いたら荒田ですね。シンデンは御神田から「御」がとれたら「神様の田」でしょうね。江戸時代に開いた新田であったら○○新田という名前が周囲にいくつかあるはずです。それがなければ御神田の「御」が脱けたと理解した方がいいのじゃないでしょうか。

納　荒田八幡の場合、東西南北に随神があるのですね。鹿大の裏の神田は西随神の中に入っておるのですね。それでこの辺は荒田八幡の田圃だったのだなと思ったことがあります。

それから昔の神様の名前は土地との結びつきなどで解釈出来ないかなと考えることがあります。

平田　天皇の名前もほとんどがそうです。例えば、シキ……という天皇の名前。これは磯城という地名に結び付きますから、大和盆地の地名を見付けて結び付きを考えるのが先決でしょうね。『日本の歴史』（中央公論社）は相当詳しく整理してあります。

素戔嗚命・日本武尊

納　先程のイザナギ・イザナミノミコトの名前から考えたのですが、天照大神の弟になるスサノオノミコト。難しい漢字を書いてありますね。スサノオというのは荒っぽい・すさんだ男の神様じゃないかな、と。やっていることを見ると、荒っぽいことをやっていますからね。荒っぽい男の神様じゃなかったろうか、と思ったことがあります。

平田　それは事実でしょうね。

納　それから日本武尊：オウスノミコトこの人は双子の兄弟だったらしいですね。日本書紀だったか古事記だったか憶えていませんが（後記：古事記）、弟の方が荒か男だった、と。兄が見えないものだから朝の食事に兄は何故出て来ないかと利いたら、弟が兄をつまみ殺したというふうに書いてあります。そういうことをしたので家に置いておくと悪いということで、あちらこちらに、ツクバ征伐やらクマソ征伐に出されたのじゃなかろうか、とも考えました。

平田　あゝ、荒っぽいから遠くにやろうと思って。しかし、遠征に明け暮れて能褒野で亡くなります。能褒野陵を築くと日本武尊の霊が白鳥となって飛び立ったということで、白鳥伝説が日本各地に拡がります。鹿児島県では白鳥岳（宮崎県）に、白鳥神社が出来ています。シラトリ：ハクチョウが飛んで来たことに結び付くのでしょうが、日本武尊の伝説は霧島にもあります。

上野　日本の神話が出来たのが7世紀だとすると、それまでに伝えられて来た日本独自のものが文章化されたとかんがえるのが本筋でしょうが、600年代には既にキリスト教の話が日本には伝わっているのです。だから、そういう外国の話も微妙に入ってきているはずです。

平田　いろんな比較神話学も必要でしょうけどね。

上野　兄弟が争うなんてのはエデンの園の話とダブりますよね。だからそこら辺はどうなんだろう。

西田　イザナギノミコト・イザナキノミコト。濁音と清音、濁らない表現は民俗学者の系統で最近「イザナキ」というのですか。

平田　イザナキが正しいのだとの表現、民俗学か神道の人たちだと思います。何かの本で見たことがあります。

西田　歴史教科書はイザナキと言っているのですか。

平田　いや。

西田　今度の教科書は？

平田　新しい歴史教科書はイザナキとしている。そしてカッコして（イザナギ）としている。

西田　スサノオノミコトやヤマトタケルノミコトは「スサノオの命」としているのですか。

平田　そうです。「スサノオの命」の表現は首をひねるのだけど。

上野　これの英文はないのですか。

平田　いや、まだ見たことがない。

上野　昔私が読んだ本には、平清盛はKiyomori of Taira でした。今はTairano Kiyomori とそのまま書くようです。

平田　なるほど。

上野　だから、これでいくと「の」というのは of を使うのか、どうか。そうすると、おかしな表現になりますね。

平田　うん。

上野　全部が名前だと思っているのだけどこれで見ると何か尊称みたいな感じになる。

平田　尊称にしてあるわけですね。

納　スサノオノミコトの話の中に、高天原を追い出されて雨にぞっぷり濡れて家に帰って行ったら追い出された、と。いや、他の神様の所から追い出されたというのかな。古事記（後記：日本書紀の一書に曰く）に書いてあります。雨に濡れたというのが、昔の遊郭にこういうしきたりがあった。雨の降る

日に傘を差して張り店：玄関口に入って来るのをとっても嫌った、と。それでスサノオノミコトの話と遊郭のそれが何かつながるものか。

平田　さあ、それはどうだろう。

上野　スサノオで「の」をとってしまえばまだ判らんでもない。それは読み方の違いで片づく。

西田　スサノオミコトでね。

上野　わざわざ平仮名の「の」にしてあるのが、何か意味があるのでしょうね。

平田　さあ？

納　その「の」というのは上の言葉と下の言葉をつなぐ「の」じゃないですか。

平田　その「の」です。だからミコトの前の「の」は全部平仮名の「の」にしてあるのです。

松田　天孫とはニニギノミコトでしょう。

坂口　天神と地祇の間に書いてあった天孫は皇別とは違うのですか。

平田　皇別とは別系統です。

特攻機を見送る女学生

平田　これだけもの知りが揃っているので聞きたいのですが、この知覧から特攻機が飛び立つ場面。知覧から飛び立つのはゼロ戦ですか。

松浪　いや、知覧は陸軍ですからね。

平田　ゼロ戦は海軍か。隼は一式戦ですか

松浪　一式戦には限らんでしょうけど。数が少ないから。

平田　知覧から飛び立ったのはほとんどが九七戦と聞いているのですが。

松浪　でしょうね。

平田　九七戦は脚が引っ込まない型ですよね。この写真のものは脚が引っ込む型です。

松浪　引っ込むのは一式戦だけでしょうね

平田　一式戦ですね。知覧から一式戦が飛び立ったのかを確かめることが一つ。それから一式戦ならば機関銃が翼に付いているはずですよね。

松浪　それは、はずしたらしいです。

平田　突っ込む時ですか？

松浪　突っ込むだけの装備だけで、邀撃交戦はもう念頭になかったのじゃないですか、上層部は。

平田　これは、はずしてあります。最初の頃、ゼロ戦・一式戦の頃までは機関銃を付けて飛び弾丸を千発持たしたという話を聞くのですが。そして爆弾も持たした、と。

松浪　あゝ最初の頃ですね。

平田　最初の頃であったら機関銃が翼に付いていなければならない、と思う。これも疑問の一つです。それともう一つ。知覧高女の生徒が何故飛行場にいたか、ということです。動員で行ったのですか。知覧高女の人たちに聞きたいと思っているのです。

西田　そうですね。

平田　特攻が出撃するのにもんぺをはいた女学生が桜の枝を振る。それほど日本の軍部はもの判りがよかったのか、と思う。

松浪　知覧高女の生徒たちは特攻兵士の身辺の手伝い、洗濯やら、いろいろやっているようです。

平田　動員で行ったのですか。兵舎の中にいて、特攻機が出撃する時は知っていたから桜の枝を振って見送ったということになるのですか。

松浪　その時は、急遽トラックに乗って後を追いかけて走ったとか、いろいろしているようです。当時の知覧高女の人たちの回想記

を読んだりしてみますと。

平田　知覧高女は特別だったのかなと思ったりするのです。というのは、満州では飛行場の側を通る時、列車は全部ブラインドを降ろさせられたのです。鉄条網が周囲に張り巡らされて一般人が立ち入るような状態ではなかったのです。

松浪　この時期になりますと、だいぶそう言った規制はやわらかくなって来ていたような感じを受けます。

平田　それはいつ頃からですか。昭和20年4月ですか。

松浪　4月までは、まだですね。沖縄が。

平田　陥ちて。

松浪　陥ちた、その後ですね。新聞に大本営発表の戦果が、本当のことが出て来るのもその頃からでした。

平田　そしてね、一番端っこの女の子は下駄履きなんですよ。死出の旅に飛び立つ特攻機を女の子が手を振って、桜の枝を振って見送った。これは4月の初めですよ。沖縄が陥ちる以前です。その頃なら一式戦も残っていただろうと思います。その頃から機関銃をはずしたのか。

松浪　特攻の数が最も多いのは5月です。

平田　それは一式戦ですか？

松浪　沖縄に着くまでの燃料で。

平田　桜の枝を振るのは本居宣長の歌にもとづいたと思うのですが、どうも不自然な気がするもんですからね。この写真は。

上野　効果をあげるには機関銃なんかない絵の方が国民的効果はありますね。いかにも特攻らしくて。修正したということは考えられんのですか。発表の段階で。

平田　これは発表してないでしょう。発表してるのかな。戦時中にこんなものは発表されますか。絶対発表されないはずです。

西田　戦時中にはそんなものは発表されない。最後の特攻機が出る頃には、僕なんかは南薩線に乗っておって、P-38の機銃掃射を受けて、から芋畑に頭を突っ込んで逃げ回ったことがあります。その後、最後の特攻機が大量に100機ぐらい飛び立ったことは憶えています。飛行場の中にはわれわれは近寄れなかったです。動員で山の中にずーっといましたから。

平田　女の子が特攻機を見送るなんて、そういうのんきなことを日本の軍部は認めたのかなぁと思って。

坂口　知覧周辺の人たちは全然疑いませんよ。この写真を見てね。

平田　あゝそうですか。

坂口　女学生は繕い物を縫うたりね、いろいろ世話をしたりした。

松浪　知覧高女は特別だったのでしょう。

西田　戦時中は青戸におったから。

平田　青戸からは飛び立っていない。

小山田　鹿屋とか串良ではそういう話とか写真というのは全然ないですね。海軍の方は

平田　海軍の特攻は官報に出るのです、先に。二階級特進ということを官報に出して、特攻に飛び立つことを覚悟させられるわけです。官報に出ないうちに飛び立ったのは特攻と認められていないのです。例えば伊集院の有馬正文大佐が突っ込んでいるのですが、上部との連絡をとってなかったとのことで特攻とは認められていないのです。陸軍と比べると海軍はきびしかったようです。この特攻出撃の写真は、知覧高女の人たちを特別に入れて見送らせた。動員先でたまたま知っていて

手を振ったとの解釈なら出来るでしょうが。知覧の町から駆けつけたというのは、どうかな？

納　何か演習をさせられて写真を撮ったことがありますよ。北支の山西省で。

平田　これは、やらせですか？（笑い）

坂口　それは違います。それは事実です。立ち会った女性がいるのですから。手伝いに行って近くに居ったから、そういうことが出来たのです。経験した人たちが、まだ生存しています。

平田　経験した人たちの話が聞きたいなと思って。

坂口　なるほどね。知覧の飛行場はそんなに・・・・

小山田　下駄履きは当時としては事実だろうと思います。

坂口　あの頃は下駄を履いて行きましたからね、学校へ。そして今日は飛行場の当番だということで二・三十人、トラックが連れに来たでしょう、恐らく。飛行場に行って三角兵舎でいろんな手伝いをした。

平田　あゝ加勢をした。

坂口　出発だから整列せよということだったのでしょう。それならば桜の枝でもと持って整列したはずです。

平田　それならば判ります。そうでなければ不思議な写真だなと思ってですね。

坂口　飛行機なんかも車輪が付いたのでないと、とても飛び立てる飛行場じゃなかったから。

平田　これは引っ込み脚ですよ。

坂本　確か、新聞にも載りましたよ、その頃。私は憶えております。知覧としては載らなかったけど。

上野　あゝ、場所をですね。

坂本　知覧としては載らなかったけど、鹿児島県からというのは載りました。それで私は鴨池だと思っておったのです。

平田　あゝ、そうですか。

坂本　二高女という感じだったと憶えています。

平田　これがですか？

坂本　この形ではなくて、特攻に飛び立つのを離れた所にいる女学生、確か二高女と書いてあったようです。その写真は新聞に載りましたよ。

平田　あゝ、そうですか。古い新聞を見れば判りますね。

上野　そうすると、鴨池の可能性もあるわけですね。

平田　これは知覧でないかも知れんね。

坂本　蛇足ですけど、砲丸投げの児島フミさんが見送ったというのを憶えております。体操の先生でしたからね。教育学部に行った時聞いた話だったか、それ以前だったかは憶えていませんが。確か新聞に載りました。

平田　岩波のこの本には、特攻隊が女学生に見送られたことを「チアガールに見送られると、元気が出る」というような表現をしてあります。それも変な話なので確かめたかったのです。

日本人の対中国観と朝鮮人観

上野　教科書問題もだけど、根底にあるのはやはり日本人の朝鮮の方を嫌う、中国人を嫌う、蔑視する感覚だ、と私は思うのです。それがいつ頃から出たのか。私は日清戦争後だと思うのです。それまではなかったはずです。日清戦争の時に向こうから談判に来ましたよね。

平田　ああ、春帆楼事件？

上野　李鴻章が確か卵をぶつけられる事件があるのです。その時ぶつけたことに対する非難が全国的に起きます。何故そんなことをするのか、と。だから、その頃までは軽蔑はしていない。その後の日本の教育がそういうことにしたと思う。失礼だけど、平田先生方の年代までは徹底してそういう教育をされて来た。われわれは戦後全く空白の時期に成長していますので、全然歴史観が違うことになります。そういうふうに違って来たのですが、まだ今は戦争を反省して悪かったと思った世代が生きておられるのだけど、次の世代：僕らの世代は戦争を知らないのです。全然昔を知らない者ばかりになると、いつか戦争になるのかなと思うのですが、私一人の考えでしょうかね。次に戦争する時、日本に味方してくれる国はどこもないでしょう。

平田　ないね。

上野　皆、寄ってたかっていじめるのじゃないでしょうか。侵略して来るのではないかと、むしろそんな気がします。来る３月私は定年退職です。喜んでいるのは、この教科書で授業せよと言われんで済む（笑い）。その意味ではうまく逃げられてよかったと思っています。後の教師たちは大変ですよ。４年後には採用されて来ますからね。

平田　４年後をね、考えなければならないので、それまでの間に勉強会が必要。勉強を続けなければ大変だと思います。ところで上野さん、12月は話をしてもらえる。今日は米原さんが来ていないので。

上野　姶良町の地名をパソコンで打ち込んだけど、まだ分析が出来ません。打ち込んだのを松田先生にあげますので、分析してもらえば助かります。

平田　12月は松田さんにお願いします。繁昌君、野田町は？

繁昌　まだ。

平田　まだ。その次あたり、頼みます。

〔編集時に後記〕

県立図書館で昭和20年４月から７月の新聞コピー（鹿児島日報：南日本新聞の全身）及び写真集『カミカゼ』カミカゼ編纂委員会、平成８年刊・知覧高女なでしこ会『知覧特攻基地』文和書房、昭和54年、を見た。『カミカゼ』には発進基地・日時・搭乗員・機種などが整理された一覧表がある。

①４月16日以降、特攻出撃の写真・記事が継続的に続く。４月中の写真はゼロ戦が大半、見送るのは基地要員。５月頃は「神鷲」の表現になる。神風を期待したのであろう、特攻攻撃は当然との書きっぷり。「還らぬ特攻隊と選手、鉢巻に砲丸の闘魂、神鷲励ます児島さん」（４月23日）。５月になるとパイロットをクローズアップした写真や花束を渡す情景になり特攻機の機種が判らくなる。６月に入ると出撃前夜の特攻隊員のくつろいだ様子を示すのが主流となり、６月17日（鹿児島空襲）以後は特攻記事は掲載されていない。以後写真なしの記事になる。７月はすべて写真なし。８月分は残っていない。

②『知覧特攻基地』のグラビアに問題の写真があり「出撃を見送る知覧高女三年生」（毎日新聞社提供）とあり、女学生はすべて下駄履き。女学生の日記に「４月12日・・・泣きながら桜の小枝をうち振って見送った。・・眼前を通るのは穴沢機。彼女たちの背後から写真を撮ったのは映画の人たち（毎日新聞報道班？）」などが判った。

③４月12日の出撃時刻は12:00と12:20。第二十振武隊穴沢利夫少尉、一式戦と判明（『カミカゼ』による）。地上に映った機影も太陽が真上にあることを示している。

桜の枝を振った女学生問題はこれにて一件落着。しかし、このような写真が撮られたのは知覧基地だけの現象とみられる。知覧基地に動員で駆り出された知覧高女生の回想によると、彼女たちは私服の憲兵からいろいろと尋問され、憲兵に調べられたことは口外するなと口止めされたらしい。グラマンの機銃掃射を受け、特攻隊員が女学生をかばって松林に逃げたら、後で呼びとめられ、松林で何をしておったかとしつこく尋ねられたとのことである。

彼女たちはやがて靖国に祀られる生きた神様と考えて接したらしい。新聞が「神鷲」と毎日のように紹介するので、女学生が靖国に祀られる神様と考えたのは当然だろう。

歴史教科書をめぐる諸問題

平　田　信　芳

平成十三年（A.D.2001）八月

目　　次

経緯の概要 …… P. 1
歴史教科書への修正要求と文科省の検討結果 …… P. 2
中国の要求分 …… P. 8
韓国のコメントへの疑問 …… P. 10
「新しい歴史教科書」についての疑問と感想 …… P. 11
「三国史記」に見える卑弥呼 …… P. 19
日韓比較年表（古代） …… P. 20
古代の日本と朝鮮 …… P. 25
あとがき …… P. 26

歴史教科書をめぐる諸問題

平田信芳

経緯の概要

（1）家永訴訟裁判(1965～1997)

1962.　高校用教科書「日本史」検定申請、不合格→教科書検定制度をめぐる訴訟

1982.　日中戦争の記述をめぐり外交問題に発展→検定基準に「近隣諸国への配慮」が加味

1993.　「検定制度は合憲」の最高裁判決

1997.　「裁量権逸脱４ヵ所」を最高裁認定

南京虐殺・日本軍の残虐行為・草莽隊・七三一部隊、の記述削除を求めた処分を違法とす。

（2）慰安婦問題（1991～　　）

1991.8　韓国女性（元慰安婦）が日本軍の罪状を告発

1992.7　宮沢内閣、慰安婦問題で当時の日本政府の関与を認める

1993.　高校日本史教科書(1994年度）に「従軍慰安婦」が登場・・・検定審議委員反対

1996.12 中学教科書(1997年度）の「従軍慰安婦の記述」削除の陳情を岡山県議会が採択→各県議会に拡がる　（橋本首相、削除を考えないと国会で表明）

2000.12 「慰安婦制度は国際法違反」とす（女性国際戦犯法廷）

（3）新しい歴史教科書問題(2001～　　）

1996.12 従軍慰安婦記述の削除を求める学者らが「新しい歴史教科書を作る会」を結成

1999.10 『国民の歴史』刊行

2001.3.6　「新しい歴史教科書」137ヵ所に検定意見

2001.3.7　中国外相が不合格要求

2001.4.4　「新しい歴史教科書」検定合格

2001.5.8　韓国政府が「35ヵ所再修正要求」：８社対象、「新しい歴史教科書」25ヵ所

2001.5.18 中国政府も「８項目修正要求」

2001.7.10 日本政府は「誤りは２ヵ所、他は学説状況に照らして明白な誤りとは言えない」と回答。

（手元にある新聞スクラップをもとに作成した。洩れた事項があるかも知れないが、大体の流れは把握できると考える。）

歴史教科書への修正要求と文科省の検討結果

扶桑社『新しい歴史教科書』（市販本）と「朝日新聞2001年５月９日および７月10日」によって作成した。　東書＝東京書籍、日書＝日本書籍、大書＝大阪書籍、教出＝教育出版、清水＝清水書院、　日文＝日本文化出版、帝国＝帝国書院の省略。

（１）古代、日韓関係

①漢の影響を受けて――小国を統一した高句麗がおこりました。（東書、大書、教出、清水、日文）

②漢は――朝鮮西北部を征服して楽浪郡などをおいた。（日書、東書、大書、教出、清水、日文）

《要求》①古朝鮮の存在を見過ごした半島の初の統一国家を高句麗と記述

②半島全体が漢の支配を受けたと誤解する余地がある。

【検討結果】①高句麗の成立については、漢の何らかの影響を受けていたとするのが広く認められており、明白な誤りとは言えない。②誤解の余地はない。

（２）任那日本府説

①大和朝廷は海を渡って朝鮮に出兵――任那（加羅）という地に拠点を築いたと考えられる

②大和朝廷の軍勢は、百済や新羅を助けて、高句麗と――と戦った（①・②は扶桑社）

③朝鮮半島では、６世紀に百済や新羅が勢力を強め、このため、大和国家は朝鮮半島での勢力を失いました。（東書、日書、大書、清水、帝国、日文）

《要求》①③「任那日本府」の存在は韓日の研究結果、認められない説

②明白な誤り――　新羅の支援要請で高句麗軍が倭軍を撃退

【検討結果】①③「任那日本府」の存在は支持されていないが、伽耶諸国は倭の何らかの影響力があったことは広く認められている。記述は「任那日本府」を明記しておらず、明白な誤りとは言えない。②広開土王碑文には、新羅が倭に救援を求めたことは記されておらず、逆に新羅が高句麗王に帰すると明記しているところである。記述は誤りであると考えられ、訂正する必要がある。（自主訂正申請中）

（３）４世紀後半の三国関係

高句麗は半島南部の新羅や百済を圧迫していた。（扶桑社、p. 37）

《要求》事実の誤り――　４世紀後半は高句麗が新羅を支援する関係

【検討結果】新羅が高句麗に服属していたとすることは広く認められており、明白な誤りとは言えない。

（４）６世紀の三国及び国際関係

①高句麗が衰退し始め、支援国の北魏も凋落に向かった（扶桑社、p. 40）

②新羅・高句麗が連合して、百済をおびやかしていた（扶桑社、p. 40）

《要求》①根拠がない。②明白な誤り。

【検討結果】①北魏を高句麗の宗主国とすることは広く認められており、明白な誤りとは言えない。②４世紀中ごろから６世紀初めにかけての東アジアの関係を、北朝――高句麗――新羅　南朝――百済――倭　という図式でとらえる説は広く認められており、大枠としては明白な誤りとは言えない。

（５）三国の朝貢（扶桑社、p. 40）

高句麗が突然、大和朝廷に接近し――新羅と百済が日本に朝貢した。

《要求》『日本書紀』だけを根拠とした記述

【検討結果】日本書紀や中国史料などにより、実質的に朝貢的なあり方としてとらえることが広く認められている。明白な誤りとは言えない。

（６）倭寇（わこう）

①貿易に従事する日本人を中心にした集団――ときによっては貿易を強要したり物を奪ったりした――。（教科書会社未確認）

②倭寇は済洲島や北九州の島々を拠点に――。（教科書会社未確認）

③朝鮮人や中国人もまじって合流。（教科書会社未確認）

日本人のほかに朝鮮人も多く含まれていた。（扶桑社、p. 97）

《要求》①倭寇の海賊行為を主に貿易に従事していたが時々おかした略奪行為として歪曲・美化。②済洲島を拠点と説明。③倭寇＝日本人との既存の歴史認識を払拭させようとしている。

【検討結果】③前期倭寇に朝鮮人も含まれていたことは広く認められており、明白な誤りとは言えない。

（７）朝鮮の国号

高麗を倒し、李氏朝鮮を建国（扶桑社、p. 107）

《要求》「朝鮮」という国号の代わりに日帝の強制的な占有期に使用されて不適切な用語である「李氏朝鮮」を使用。

【検討結果】近年、「朝鮮王朝」を用いる傾向もあるが、明白な誤りとは言えない。

（８）壬辰倭乱（じんしんわらん）

①秀吉は、さらに中国の明を征服し――インドまでも支配しようという巨大な夢にとりつかれ――大軍を朝鮮に送った。（扶桑社、p. 121）

②出兵の結果、朝鮮の国土や人々の生活は著しく荒れ果てた。（扶桑社、p. 121）

③秀吉は、朝鮮に日本への服従と日本軍の明への通行許可要求しました。それが拒否されると――大軍を朝鮮に送りました。（大書、教出、清水）

《要求》①壬辰倭乱の原因を明の征服、秀吉の個人的妄想とだけ記述。②日本軍によりほしいままにされた人的・物的被害の様子を縮小。③戦争勃発の責任を朝鮮側に転嫁。

【検討結果】①豊臣秀吉が東アジアを征服する構想を持っていたことは広く認められており、明白な誤りとは言えない。②については新聞に記載されていない。③軍を送った経緯が記されているのであり、戦争責任が朝鮮側にあるとは記述されていない。明白な誤りとは言えない。

（9）**朝鮮通信使**

①幕府は――朝鮮との国交を回復（扶桑社、p. 131）

②釜山には宗氏の倭館が設置され――（扶桑社、p. 131）

《要求》①家康の国交回復努力に対する説明なしに事実だけを記述。②朝鮮が釜山に倭館を設置した事実を隠蔽、日本が外国で用意した行政機関のように記述。

【検討結果】新聞は説明を省略

（10）**朝鮮の西欧列強に対する認識と国際的地位**

（中国は）欧米列強の武力脅威を十分に認識できていなかった。中国の服属国であった朝鮮も同様。（扶桑社、p. 185）

《要求》朝鮮の対応を日本の方式と比較して低く評価。「服属国」と表現したものは削除が必要。

【検討結果】朝鮮も対応としては中国と同様の夷狄（いてき）観を背景に欧米の進出に対応したことは広く認められており、明白な誤りとは言えない。（「服属国」の表現については自主訂正申請中）

（11）**前近代東アジア国際秩序と朝鮮**

①朝鮮やベトナムは、すっぽりその（中華秩序の）内部におさまって、中国の歴代王朝に服属

②むかしから中華秩序のうすかった日本は――自由に行動できた。（扶桑社、p. 198）

《要求》①国際関係を歪曲した記述（当時、冊封と朝貢は儀礼的な外交形態にすぎなかった）

②日本も17世紀までは中華秩序の中に存在した事実は未記述。

【検討結果】①（自主訂正申請中）②江戸時代には冊封・朝貢関係になかったことは広く認められており、明白な誤りとは言えない。

（12）**日本＝武家社会、朝鮮＝文官社会論**

中国・朝鮮両国は文官が支配する国家だったので、列強の脅威に対し、十分な対応ができなかったという考え方もある。（扶桑社、p. 185）

《要求》論理的な根拠なしで武家社会である日本が文官社会である朝鮮よりも優越するという先入観を注入する表現。

【検討結果】新聞では省略。

（13）**征韓論**

①1873年、日本の開国のすすめを拒絶してきた朝鮮の態度を無礼だと――征韓論がわきおこった。（扶桑社、p. 202）　②（西郷隆盛は）自分が朝鮮に行き、殺害されれば、それを名目に日本が出兵し――。（ibid. p. 203）

③日本政府は、朝鮮に国交の開始を求めたが、朝鮮が応ぜず、国内で征韓論が持ち上がった。

④中国の属国として位置づけられていた朝鮮は――日本との国交も絶った。：会社名未確認

《要求》①朝鮮の条約締結の拒否理由を説明せず、日本の立場から偏って記述。

②朝鮮が西郷を殺害する可能性があったかのように仮定。

③征韓論発生の原因を朝鮮側に転嫁。④当時の朝貢関係について説明がない。

【検討結果】①明治維新政府と朝鮮との交渉決裂の理由は、新政府の送付した文書の受理を朝鮮側が拒否したということは広く認められている。明白な誤りとは言えない。（他は省略）

（14）**江華島事件**

①日本軍艦が朝鮮の江華島で測量するなど示威行動をとったため、朝鮮の軍隊と交戦した事件（扶桑社、p. 200）

②日本の軍隊が江華島で攻撃される事件が発生（会社未確認）

③（日朝修好条規では）朝鮮は独立国とされたが、清は朝鮮を属国とみなしていた（教出）。

《要求》①朝鮮の発砲を誘導した計画的な作戦であった事実など挑発の主体、目的、経緯を隠蔽。②江華島事件の原因を朝鮮側に転嫁。③「朝鮮は独立国」の条項は、清を牽制するものであったことにつき説明していない。

【検討結果】①すでに日本軍艦が「示威行動」をとったため朝鮮の軍隊と交戦したと記述されている。江華島事件の目的などについて記述するよう求めることはできない。

③条項の背景や意図について、記述するよう求めることはできない。

（15）**朝鮮半島脅威説**

日本に向けて、大陸から１本の腕のように朝鮮半島が突き出ている。朝鮮半島が日本に敵対する大国の支配下に入れば、日本を攻撃する格好の基地となり――（扶桑社、p. 216）

《要求》朝鮮半島脅威説を強調し、日本の防衛の名目で韓国侵略・支配を合理化する論理――清日・露日戦争を自衛戦争として合理化。

【検討結果】当時、欧米列強が朝鮮半島に強固な地歩を築いた場合、日本は独立を脅かされかねないという認識があったことは広く認められている。明白な誤りとは言えない。

（16）**日本政府の朝鮮中立化案**

日本政府の中には――朝鮮を中立国とする条約を各国に結ばせ、中立の保障のため日本の軍備を増強しなければならないという考えもあった。（扶桑社、p. 216）

《要求》日本政府の一角で若干論議されたことを日本の朝鮮弾圧政策を薄める意図で記述。日本の軍備増強が朝鮮中立のためと歪曲。

【検討結果】朝鮮半島中立化案が、日本の対朝鮮政策の基調の一つとして存在していたことは広く認められている。明白な誤りとは言えない。

（17）**朝鮮の近代化と日本の関係**

朝鮮の開国後、その近代化を助けるべく軍制改革を援助した。朝鮮が外国の支配に服さない自衛力のある近代国家になることは、日本の安全にとっても重要だった。（扶桑社、p. 217）

《要求》朝鮮に対する日本の影響力を植え付けようとした目的を隠し、軍事援助で朝鮮の独立に寄与したかのように叙述。

【検討結果】当時、朝鮮半島がほかの勢力下に入ることが日本にとって脅威となるという認識があったことは広く認められており、明白な誤りとは言えない。

(18) **朝鮮を巡る清・日の対立**

清は、最後の有力な朝貢国である朝鮮だけは失うまいとし、日本を仮想敵国とするようになった。（扶桑社、p.217）

《要求》朝鮮を巡る清と日本の対立を一面的に説明し、日本が清を仮想敵国にした事実を歪曲

【検討結果】天津条約締結以降の日本では、清と事を構えるのは好ましくないという態度を打ち出してきていたことは広く認められており、明白な誤りとは言えない。

(19) **東学農民運動と日清戦争**

①日本も甲申事変後の清との申しあわせに従い、軍隊を派遣し、日清両軍が衝突して日清戦争が始まった。（扶桑社、p.218）

②清の出兵を察知した日本は、軍隊を派遣し――戦争を開始した。（会社未確認）

《要求》①日本が日清戦争を誘発する目的で計画的に派兵した事実を隠蔽。

②日本軍の派兵を清軍の派兵に対する単なる対応措置と記述。

【検討結果】日本軍の朝鮮出兵と清国軍との開戦について、計画的派兵であったとする説と、そうではなかったとする説などがある。明白な誤りとは言えない。

(20) **日露戦争**

①ロシアは――朝鮮の北部に軍事基地を建設した。（扶桑社、p.222）

②ロシアの極東における軍事力は日本が到底、太刀打ちできないほど増強されるのは明らか――（日本）政府は手遅れになることをおそれて、ロシアとの戦争を始める決意を固めた。（ibid, p.222）

《要求》①伐木場を軍事基地と誤って解釈。②日本が先に始めた戦争を、日本の安全が脅かされたことで勃発したと記述。

【検討結果】①新聞に記載なし。②ロシアは義和団事件後、満州を支配下におき、更に朝鮮半島に対して勢力の拡大を目指していたこと、そうした状況に日本が脅威を感じて開戦に及んだことは広く認められている。明白な誤りとは言えない。

(21) **韓国強制併合**

①日本政府は、韓国の併合が、日本の安全と満州の権益を防衛するために必要であると考えたイギリス、アメリカ、ロシアの３国は――これに異議を唱えなかった。（扶桑社、p.240）

②安重根が、初代総監の伊藤博文を――暗殺した。そこで、日本は――韓国を日本の領土に併合し（韓国併合）――植民地として支配した（日文の検定申請時の記述）。

《要求》①併合の過程で侵略行為と強制性を隠蔽し、国際的に認められたものとして記述。

②韓国強制併合の原因を安重根の伊藤射殺から始まったと記述し、計画性を隠蔽。

【検討結果】①日英同盟などにより、３国が「異議を唱えなかった」ことは広く認められている。また、韓国併合について検定を受けて「韓国内の反対を、武力を背景におさえて併合を断行した」という記述がなおされていることを踏まえると、明白な誤りとは言えない。

②対象記述のうち、「そこで、」という（伊藤博文暗殺が韓国併合の）直接的原因であるかの

ような文言は検定で削除されている。

(22) **植民地朝鮮開発論**

日本は植民地にした朝鮮で鉄道・灌漑の施設を整えるなどの開発を行い（扶桑社, p.240）

《要求》植民地近代化論の観点から「開発」がまるで朝鮮住民のためのように歪曲

【検討結果】韓国併合後、耕地整理や灌漑施設の新設などの土地改良が各地でなされ、鉄道が敷設されたことは事実である。また、「開発」が日本による植民地政策の一環であることなどが記述されており、明白な誤りとは言えない。

(23) **関東大震災と朝鮮人**

朝鮮人や社会主義者の間に不穏なくわだてがあるとの噂が広まり、住民の自警団などが社会主義者や朝鮮人・中国人を殺害する事件がおきた。（扶桑社、p.256）

《要求》官憲（軍警）による殺害事実隠蔽――殺害対象も朝鮮人が大部分（約７千人）であったにもかかわらず、社会主義者、朝鮮人、中国人と並列、事件の本質に該当する朝鮮人の被害を縮小して記述

【検討結果】関東大震災の際に、多数の朝鮮人と、中国人、労働運動家らが自警団や官憲によって殺害されてことは広く認められている。歴史事象をどのように記述するかは、執筆者の判断にゆだねられており、明白な誤りとは言えない。

(24) **強制動員と皇民化政策**

①徴用や徴兵などは、植民地でも行われ――朝鮮や台湾では、日本人に同化させる皇民化政策が強められ――。（扶桑社、p.284）

②「天皇の民」にふさわしい、皇国の臣民になるように同化を強要された。（日文）

《要求》①朝鮮における収奪に関する記述がなく、朝鮮人を日本国民の一部とみなし、日本の植民地政策の本質を隠蔽。②具体的な記述が不十分、神社参拝や日本語教育強制などが必要。

【検討結果】①すでに朝鮮における日本語教育・創氏改名や、アジア諸国における日本語教育・神社参拝の強要などの皇民化政策が記述されている。また、「強制連行」についても記述されている。どのような内容を記述するかは、執筆者の判断にゆだねられており、さらに記述を求めることはできない。

②同ページに創氏改名などの具体的な記述がなされている。どのような記述をするかは執筆者の判断にゆだねられており、さらに記述を求めることはできない。

(25) **軍隊（従軍）慰安婦**

関連内容の記述なし。（扶桑、東書、大書、教出、日文）

《要求》過酷な行為の象徴である慰安婦問題を故意に脱落させ、残酷な行為の実態を隠蔽。日本政府も93年の官房長官談話で、総体的に本人らの意志に反して行われてことを認定。

【検討結果】学習指導要領の範囲内で、具体的にどのような歴史的事象を取り上げ、どのように記述するかは、執筆者の判断にゆだねられている。このため「慰安婦」について、記述するよう求めることはできない。

(26) **韓国戦争**（朝鮮戦争）

マッカーサーが指揮するアメリカ軍主体の国連軍が反撃――中国が北朝鮮の側に参戦（扶桑社、p.298）

《要求》国連軍と中国・北朝鮮軍の戦争と描写することで韓国軍の実態を無視。

【検討結果】朝鮮戦争において主として戦争を遂行したのは、初期を除けば、米軍を中心とした国連軍と中国人民志願軍（義勇軍）・北朝鮮軍であったことは広く認められており、明白な誤りとは言えない。

中国の要求分（すべて扶桑社）

（1）排日運動（扶桑社、p.263）

中国の国内統一が進行する中で――外国勢力を排撃する動きが高まった。――暴力によって革命を実現したソ連の共産主義思想の影響を受けていたので、過激な性格を帯びるようになった。――日本商品をボイコットし、日本人を襲撃する排日運動が活発になった。

《要求》「排日運動」と称し、「暴力革命を実現したソ連共産思想の影響」を強調することは日本の侵食（侵略？）が中国人民を反抗に追いやった主な原因であるという事実を隠蔽する。

【検討結果】中国の「反帝国主義運動」がソ連の共産主義思想の影響を受けたことは広く認められている。20年代の「反日・排日貨」運動が「激化」したことも一般に言われている。それを「排日運動」と表現することも否定されていない。明白な誤りとは言えない。

（2）満州国（ibid.p.268）

満州国は、五族協和、王道楽土建設をスローガンに、日本の重工業の進出などにより経済成長を遂げ、中国人などの著しい人口の流入があった。

《要求》日本は略奪を働いた。大量の移民を行い、土地を強制的に占領した。日本軍は細菌戦を研究する試験基地を造り、731部隊は生体実験を行い無数の中国民衆を殺害した。これらの事実を隠し、「繁栄」を美化しようとしている。

【検討結果】満州国は関東軍が建国を宣言し、実権は関東軍がにぎっていたことから、傀儡国家があった事実が記述されている。明白な誤りとは言えない。731部隊について記述するよう求めることはできない。

（3）南京事件（ibid.p.270）

日本軍は――南京を占領した（このとき、日本軍によって民衆にも多数の死傷者が出た。南京事件）

東京裁判では、日本軍が――南京を占領したとき、多数の中国人民を殺害したと認定した――実態については資料の上で疑問点も出され――論争が続いている。

《要求》日本軍が一般人と捕虜に対して計画的に大規模な虐殺を行った事実をを隠している。

極めて少数の異論を普遍性をもった議論として誇張、東京裁判の結論を疑うように誘導する意図がある。

【検討結果】我が国では、犠牲者数などは様々な議論がある。明白な誤りとは言えない。

（4）日中戦争の長期化（ibid.p.271）

国民党と手を結んだ中国共産党は、政権をうばう戦略として、日本との戦争の長期戦化を方針としていた。日本も戦争目的を見失い――際限のない戦争に入っていった。

《要求》中国共産党が抗戦を堅持したのは国家、民族の滅亡を救い生存を図るため。日本軍国主義が発動した対中侵略戦争の本質を隠している。

【検討結果】新聞に記述なし。

（5）日中戦争の契機（ibid.p.270）

北京郊外の盧溝橋で、演習していた日本軍に向けて何者かが発砲する事件がおこった。翌朝には、中国の国民党軍との間でで戦闘状態になった。

上海で、２人の日本人将兵が射殺される事件がおこり――日中間の全面戦争が始まった。

《要求》日本は30年代初頭より全面的な軍事侵略を計画的に準備し始めていた。全面戦争開始の契機を偶発的事件だと記述する意図は、その事実を隠すことにある。

【検討結果】記述の前に関東軍の一部将校が全満州を軍事占領する計画を練り始めていたことなど、日中戦争に至る経緯が記述されている。盧溝橋事件自体は、偶発的なものであったとすることは広く認められている。明白な誤りとは言えない。

（6）大東亜会議（ibid.p.280）

日本はこれらアジア各地域に戦争への協力を求め――地域の代表を東京に集めて大東亜会議を開催した。会議では、各国の自主独立――をうたう大東亜共同宣言が発せられ、日本の戦争理念が明らかにされた。

《要求》「大東亜会議」出席者は主に日本侵略軍が支えていた傀儡政権で、アジアを代表することは不可能。各国人民の支持を得ていたという印象を与える。

【検討結果】会議の開催や宣言の採択などは事実であり、明白な誤りがあるわけではない。大東亜共栄圏については、日本の占領統治の実態などが記述され、また敗戦後になって「日本の戦争やアジアの占領を正当化するためにかかげられた」との記述もなされている。明白な誤りとは言えない。

（7）大東亜共栄圏（ibid.p.281）

大東亜共栄圏のもとでは日本語教育や神社参拝が強要されたので現地の人の反発が強まった

《要求》日本の暴行は日本語教育や神社参拝強要などにとどまらない。

【検討結果】すでに日本がアジア諸国の人々に多大な苦しみや損害を与えたことは記述されている。特に中国の兵士や民衆に日本軍の進攻によりおびただしい犠牲が出たことなどが記述されている。歴史事象をどのように記述するかは、執筆者の判断にゆだねられている。

（8）**極東軍事裁判**（東京裁判）

この裁判は、日本が９カ国条約や不戦条約に違反したということを根拠としていたが――それに違反した国家の指導者を、このような形で裁判にかけることができるという定めはなかった。――弁護側の申請する証拠調べは却下されることが多かった。

《要求》日本の戦犯を扱う国際裁判は、欧州国際軍事法廷憲章、極東国際軍事法廷憲章などに準拠して原則を定めた。日本はサンフランシスコ平和条約で判決を受諾することを認めた。史実を歪曲するやり方で戦犯の無実を訴えている。

【検討結果】日本政府がサンフランシスコ平和条約により、極東国際軍事裁判の判決を受諾しているのは事実であるが、我が国では様々な評価がなされている。明白な誤りとは言えない。

韓国のコメントへの疑問

（1）「教科書問題で何故韓国は騒ぐのだろう」と憤慨する日本人は多い。騒がれれば騒がれるほど日本は右傾化して行く。歴史認識の違いを外交問題に持って行くことで、両国の人心が離れ離れになるのはやりきれない。外交問題とする真の狙いは何なのか、よく判らない。

（2）韓国側が「朝日修好条規」「韓日会談」などと表現することについては、日本でも「日朝修好条規」「日韓会談」と表現するので、特に違和感を感じない。ところが「日清戦争」「日露戦争」を韓国側が「清日戦争」「露日戦争」と表現する感覚は、何に基づくのか理解に苦しむ。韓国は日本の兄貴分との意識があるのか。

飛鳥文化は朝鮮の影響で栄えたとの誇りが、35年間の日帝支配の屈辱で屈折した感情にねじ曲げられるからなのか。歴史的・文化的に日本は朝鮮の恩恵を受けているのに、その恩を仇で返す存在と見ているのか。何か事あるたびに文句をつけられているような感じがする。今まで日本の歴史家が韓国の歴史に無関心であったつけを突きつけられているのかも知れない。

（3）「――ということは広く認められている。あるいは、――の説がある。明白な誤りとは言えない。」としたものが非常に多い。これらは日韓両国の歴史家にとって解決しなければならない問題として残されたことを意味する。これら大小のトゲを一つ一つ抜いて行く作業は大変なことだと思う。歴史家であれば、「民族や立場によって歴史の見方も違う」とは言えない。

「新しい歴史教科書」についての疑問と感想

韓国・中国からのクレームは別として、気付いた事項を書き上げてみた。

（1）**グラビアの説明**

「将軍万福作、阿修羅像」「国中連公麻呂作、鑑真和上像」「東洲斎写楽作、大谷鬼次の奴江戸兵衛」など、あまりに詳細な作者名・作品名を掲示してある。著者の個人的趣味が露骨に出ている。日本文化のルネッサンス・再認識を標榜する意図かも知れぬが。

（2）**歴史主義の強調**（p.6）

「歴史を学ぶのは、過去の事実について、過去の人がどう考えていたかを学ぶことなのである」

歴史はその時々の時代の解釈とか著者の考えで記述される場合が多く、すべてが客観的に判っているわけではない。そのために歴史家は新しい切り口を探し、真実を求めようと努力する。歴史主義的解釈が正しいとは限らない。

「過去の事実、過去の人の考え」を強調しながら、南北朝時代の全国的な対立には立ち入ろうとしていない。

（3）**歴史のものさし**（p.8）

「フランス・ドイツ・イタリアが歴史にはっきり姿をあらわすのは12～13世紀で、日本でいえば鎌倉時代である。」

１世紀を１cmのものさしで示す方法はユニークである。しかし、何故フランス・ドイツ・イタリアの順なのか。長幼の序からいうと逆の順になる。９世紀のフランク王国の分裂で三国の基礎ができたことはよく知られたことである。

（4）**古代住居の復元**（p.25）

古代住居の復元には、最大限の想定をもとに復元するやり方と想定は最小のものとする考え方の二通りがある。教科書に掲載される挿し絵は最大の想定をもとに作られたものが多い。果たしてそれでよいのか。将来、イメージダウンを余儀なくされた場合、歴史教育に対するマイナス要因となる。

（5）**秦と法家思想**（p.27）

「始皇帝がいちばん参考にしたのは――韓非子が代表する法家の思想だった。人間の性質はもともと悪であるから、強い刑罰をもって秩序を守らなければならないととした彼の思想に基づいて、始皇帝はきびしい政治を行った。」

「韓非子が代表する法家の思想」は初歩的なミス。性悪説は荀子の説。韓非はその弟子とされる。『韓非子』は韓非の著書をいう。韓非は秦に使者として赴き、毒殺された。始皇帝に大きな影響を与えた法家は、李斯である。

（6）**魏志倭人伝**（p.33）

「魏志倭人伝を書いた歴史家は、日本列島にきていない。それより約40年前に日本を訪

れた使者が聞いたことを、歴史家が記していると想像されているにすぎない。また、その使者にしても、列島の玄関口にあたる福岡県のある地点にとどまり、邪馬台国を訪れてもいないし、日本列島を旅してもいない。記事は必ずしも正確とはいえず、邪馬台国が日本のどこにあったのかはっきりしていない。」

伝聞記事であっても、3世紀前半の日本に関する記事であることは否定できない。考古学の発達で、将来3世紀の社会・文化の分析が進んだ時には、やはり無視出来ない史料となる。「日本よい国的思考」のもとで、魏志倭人伝をしりぞけようとする姿勢は視野が狭すぎる。殊更に魏志倭人伝のマイナス論評をする必要はない。また、8世紀に書かれた古事記・日本書紀で、3世紀の歴史に迫ることは現段階では不可能に近い。

（7）大仙古墳（p. 35）

「日本最大の大仙古墳（仁徳天皇陵）の底辺部は、エジプトでも最大のクフ王のピラミッドや秦の始皇帝の墳墓の底辺部よりも大きかった。」

大土木事業によって政治力・経済力を考えさせるのに格好の資料と思う。今一つ銅鐸形の周濠と仮に表現しよう。これは韓国南部の村落周辺の随所で見られる墓域の形そのものである。日本から朝鮮半島に伝わったものでなく、朝鮮半島から日本に伝わったものと考えざるを得ない。このことを今まで日韓両国の学者が問題にしなかったのが不思議だ。

（8）神武天皇の東征伝承（p. 36）

「神日本磐余彦尊（のちに神武天皇とよばれる）は、45歳のとき、（以下意訳）東征の決心をされた。神武天皇が即位された日を太陽暦になおしたものが、2月11日の建国記念日である。」

神武天皇が127歳で崩御されたこと、開化天皇が115歳、崇神天皇が120歳、垂仁天皇が140歳で亡くなられたことが『日本書紀』に記されている。このことを教師はどのように説明するのか。建国伝承の説明は至難の業である。建国伝承は説明して、崩御年齢は頬被りせよというのだろうか。

鹿児島県には神武天皇ゆかりの地と称する所がいくつかあり、皇紀二千六百年記念に建てられた大きな石碑がいくつかある。神武天皇の伝承と密接なつながりのない所では「伝承」で軽く説明出来るが、昭和15年に建てられた石碑がある所ではその歴史的説明に迫られることになる。寝た子を起こすよりきびしい。

（9）聖徳太子の外交（p. 45）

「煬帝は激怒したが、高句麗との抗争中なので忍耐した。わが国は、中国から謙虚に文明を学びはするが、決して服属はしない――これが、その後もずっと変わらない、古代日本の基本姿勢となった。」

煬帝は「蛮夷の書、無礼なるものあり。以後、聞するなかれ（蛮夷の手紙には無礼なところがある。以後、俺の耳に入れるな」と臣下を叱ったという。

小野妹子が隋に遣わされたのは607年・608年。隋の高句麗遠征は612～614年であり、

抗争中だったので忍耐したというのは思いこみの記述である。

「文明を学ぶ」という表現はおかしい。「文物または文化」と表現すべきだろう。

隋の国書紛失事件（盗難か虚偽の報告か不明）でも小野妹子は処罰されていないことや聖徳太子の子孫が蘇我氏に攻められて絶える事件など、不思議なことを考えさせる方が日本の国威発揚の歴史と解釈するよりも内容的に面白い。

（10）白村江の戦い（p. 51）

「663年――日本の軍船40隻は燃えあがり、天と海を炎でまっ赤に焼いた。こうして百済は滅亡した。」

百済の滅亡は660年。百済再興のため赴いた日本水軍が白村江で大敗するのが663年である。著者は文学的表現に酔いすぎている。

（11）皇室系図（p. 52）

皇極・孝徳・斉明、三代の天皇を系図からはずしたのは、何故？

（12）大宝律令と年号（p. 54）

「新羅は唐の年号の使用を強制され、これを受け入れた。日本における律令と年号の独自性は、わが国が中国に服属することを拒否して、自立した国家として歩もうとした意志を内外に示すものであった。」

書く必要もないこと。

（13）2官8省（p. 55）

「2官8省」の表現はおかしい。「二官八省」は熟語的表現であり、算用数字の混用は国語の乱れにつながる。1気、5分5分などの表記が認められるのか。

（14）熊襲と隼人（p. 57）

「九州南部には熊襲または隼人とよばれる人々がいて、古くから大和朝廷に服従しなかった。」

7～8世紀の頃、熊襲は存在していない。また、神武天皇の東征伝承が日向（南九州）からだとするとと、神武天皇と熊襲・隼人との関係はどうなるのか？

ヤマトタケル・イズモタケル・クマソタケル・カワカミタケルと列記したとき、これらはすべて同格の表記になる。ヤマト・イズモ・カワカミはすべて地名であるのに、クマソだけが民族的あるいは種族的な呼称と考えられて来たのは何故なのか。

南九州の住民の多くは隼人の子孫である。蝦夷と熊襲を同様にみなしていた財界人がいたが、「熊襲または隼人」という表現はそれとあまり変わらない。

（15）イザナキの命（p. 60）

何故「イザナキ」なのか。イザナキ（イザナギ）と二通りの表現をして逃げ道は作ってあるが、小さい時から聞き慣れたのは「イザナギノカミ」である。「掛けまくも、あやに畏きイザナギノカミ、筑紫の日向(ヒムカ)の橘の小戸(オト)の檍ケ原」の祝詞を聞いて育ち、「日向」「檍ケ原」は南九州に地名が残っている。

「ナギ・ナミ」：波が砂浜をなぎはらって素足で歩きたくなる浜辺。それが「ナギサ」である。「イザ」は、ゆったりと波がいざなう（誘う）表現にふさわしい。寄せては返す波（女神）によって、ナギ（男神）が育つ。浜辺で年老いた漁師が子供たちに語って聞かせたのが、イザナギ・イザナミの物語。二神の間でまずオノコロ島が生まれる。これはオノコ（男児）・ロ（名詞語尾）に分析出来る。ごく自然な昔話になる、と解釈出来る。

延喜式神名帳で調べるとイザナギ・イザナミを祀った神社は淡路島周辺に限定される。淡路島周辺で発生した物語であろう。

（16）天の岩屋戸とスサノオの命　（p. 62）

挿し絵に「堀江友声」という聞いたこともない作者の名前を記載しているが、その必要があるのか。この教科書は絵画・彫刻については、煩わしいほど作者名を記している。著者の性格なのだろう。著作権に留意せよとの配慮に基づくものなのか。

「ニニギの命」「スサノオの命」などの表記は、初めて出現した表記のように思う。「命・尊」などは「ミコト」と表記して、ニニギノミコト・スサノオノミコトとする方が操作し易い。パソコンやワープロでは「ニニギ」「の」「命(イノチ)」とインプットしなければならない。

（17）草薙の剣　（p. 63）

八岐の大蛇退治の時に出現するのが「天叢雲の剣」、天孫降臨の時にニニギノミコトがたずさえるの三種の神器の一つが「天叢雲の剣」である。それが「草薙の剣」になるのはヤマトタケルノミコトが焼津で草を薙ぎはらったことによって命名される。歴史的経緯を無視する表現は、歴史性の否定であり、歴史の教科書としてはおかしい。

（18）日本の神話　（p. 63）

鹿児島県には可愛山陵（ニニギノミコト）・高屋山陵（ヒコホホデミノミコト：山幸）・吾平山陵（ウガヤフキゼズノミコト）のいわゆる神代三山陵が存在し、霧島神宮はニニギノミコトを、鹿児島神宮はヒコホホデミノミコトを祭神とする。また高千穂峰を多くの場所で仰ぎ見ることが出来る。否応なしに神話と歴史の接点の説明を強要される。

「神話ではそうだが、歴史は異なる」というわけにはいかなくなる。観光宣伝に、ニニギノミコト・ヒコホホデミノミコトを祭った神社だと神話だけを楯にとって宣伝するわけにはいくまい。歴史的事実はと問われて、教師は眼を白黒させねばならなくなる。神話と歴史を混同したのが皇国史観の最大の欠点であった。『鹿児島県史』は皇国史観のもとで昭和14年に書かれた状態のままである。

ニニギノミコトが高天原から高千穂峰に降って来る話、それが天孫降臨の神話である。宇宙飛行士から宇宙から見た地球を聞かされている現代の子供たちがそれを信じると考えるのだろうか。大人の知恵が加わって天空に連なる海上を渡って来たと考えた場合、日向上陸の前にどこを出発点としたかを考えることになるが、その答えを教師は与えられるのか。江南か朝鮮半島だろう、まだ判っていないと答える教師がいるだろうか。昔ならば、

そういうことを聞くのは不敬罪になると怒鳴りつけて誤魔化したが、今後はそういうわけにはいくまい。日本の歴史に誇りもたせると主張する人々は、これをどのように説明されるのか。

（19）新田　（p. 70）

「10世紀に入り、人口が増え、新田(しんでん)が不足したために――」

10世紀に新田（しんでん）の表現はないと思う。にひだ（にいだ）・にうた（にゅうた）と表現したであろう。「水田が不足したために」と説明するのが妥当。

（20）元寇と神風　（p. 88）

「文永の役(1274)――弘安の役(1281)――２度にわたる元軍の襲来を元寇という。――２度にわたる暴風雨は、日本を勝利に導き、その後も、神の力による神風と信じられた。」

その後、1333年のことになるが、ほうき星（彗星）の出現に「もくり（モンゴル）・こくり（高麗）が襲来する前兆」と大騒ぎして、諸国の社寺・仏閣に「敵国降伏」を祈願させている（薩摩国分寺文書）。元寇は恐ろしい民族的体験であり、半世紀経っても大騒ぎする状態で、勝利という感覚とは少々異なっている。

その後も「神風」が信じられ、「神風特別攻撃隊」という作戦が浮上したのも歴史的事実である。「送るも征くも今生の　別れと知れど微笑みて　爆音高く基地を蹴る　神風特別攻撃隊」との歌を忘れてはいない。「神風」感覚が残した歴史的影響は大きい。

「石塁」を築くのにも、所有する土地の面積に応じて、九州諸国の荘園・神社・寺院に負担させており（石築地配布）、大隅国の分は史料が残っている。

（21）綿の栽培　（p. 98）

「16世紀になると、朝鮮から伝わった綿の栽培が始まった。」

16世紀の初め、朝鮮のものが移植されて全国に木綿栽培が拡がったことは事実であり、その表現にとやかくいうつもりはないが、テーマ学習の素材として面白いのではと思う。

13世紀の日宋貿易の貴重な輸入品であり、15世紀に朝鮮から大量に輸入されるようになり、さらに日明貿易の発展によって輸入量が増えて「唐木綿」として珍重された。用途は、鉄砲の火縄・軍衣・帆布など、戦国時代の生活必需品であった。豊臣秀吉が日吉丸とよばれた頃、尾張国中村から出る時実母から若干の金子を渡される。それを元手に木綿針を仕入れて諸国を売り歩き、そのために彼は諸国の情報を知っていたという。矢作橋の上で野盗蜂須賀小六の一団に叩き起こされた時、日吉丸が枕にしていたのが木綿針の包みであり、これが太閤秀吉の出世物語のはじまりであった。

江戸時代になってから、河内木綿・大和木綿・三河木綿などの名がひろまり、久留米絣・薩摩絣などが知られるようになった。上野公園の西郷隆盛銅像の絣姿は、そのような歴史的背景がある。

日清戦争は日清両国の「朝鮮をめぐる木綿市場の争奪戦」という性格もあり、ランニン

グシャツ・丸首シャツなどの下着は、第２次世界大戦勃発によって海外に売れなくなったシャツを国内向けに売り出して、子供でも下着を着用する風習が根付いたことを老人たちは記憶している。

現在、綿花栽培は日本から姿を消しているが、日本における木綿の歴史をテーマ学習として探らせるのもよいのではないか。

また、木綿の歴史は世界史とも大きく結びついている。原産地はインド。インダス文明の遺跡で綿花の栽培があったことが知られている。時代は下るが、18世紀後半、イギリスで始まった産業革命は、初めは木綿工業部門の機械の発明からであった。次いで蒸気機関中心の動力部門、鉄道・汽船などの交通部門へと進み、近代資本主義社会を成立させた。

機械によって大量生産されるようになった綿布はアフリカの黒人奴隷狩りに利用され、インドでは伝統産業であった綿業を衰退させた。このようにヨーロッパ諸列強によるアジア・アフリカの植民地化と密接に結びついている。

その他、鉄・銀・陶磁器・茶・砂糖・石油など、人々の歴史とどのようにかかわったかをテーマ学習とすれば、多角的なものの見方を体得させることが出来る。欧米諸国のアジア進出と近代日本のかかわりに触れた部分では「新しい歴史教科書」は日本の記述に重点をおいており、世界的視野での分析が若干不足していると思う。それをカバーするためにテーマ学習の素材を提供してみた。

(22) イスラム世界の取り扱い (p.110)

世界地図に「十字軍の遠征」が記してあるが、イスラム世界は全くの空白。セルジュクトルコ、ファティマ朝またはカイロなどを記入すべきではないか。p.112では「当時、イスラム勢力は学問・芸術においても、軍事力においても、中世ヨーロパを圧倒していた」と説明がある。

(23) 教育立国 (p.209)

「特別のエリート学校をつくらなかったことが、日本が現在のような平等な社会になった原因である。」

戦前の旧制高校、帝国大学、陸幼・陸士・海兵などエリート育成コースがあった。旧制高校に代わるものが東大・京大を二極とする受験地獄に姿を変えている。

(24) 教育勅語 (p.215)

教育勅語・御真影は奉安殿に納められ、空襲の時これを守るために死んだ教師の話は多く伝えられている。敗戦後、教育勅語・御真影の処理がどのようになされたかの説明が欠落している。歴史主義を主張しながら、戦後の事実の記述が洩れているのは何故だ。説くところの歴史主義は、ご都合主義なのか。

(25) 北一輝 (p.251)

北一輝は、p.215・p.265と、二回にわたって登場させなければならないほど、日本史上重要な人物なのか。著者が「北一輝」崇拝者であることを問わず語りに示している。

(26) 満州国皇帝 (p.267)

長春には満州国皇帝（溥儀）の宮廷（調度品など）も残されている。また、関東軍司令部の建物も残っており、日本の侵略を忘れることがないようにしてある。文化大革命で古い文物は破壊したと聞いていたが、役に立ちそうなものは残されている。

(27) 二・二六事件 (p.269)

昭和天皇の姿勢によって、二・二六事件が目指した昭和維新はつぶされた。これに参加して死刑となった将校たちの遺族の思いは複雑だろう。下士官や兵は危険な前線に転属させられ、その後どうなったかは不明。抑えられた側の歴史はどう説明するのか。

(28) 大政翼賛会 (p.271)

「ドイツやソ連のような国家体制」

ドイツ（ヒトラーのナチズム）とソ連（スターリンの一国社会主義）を一まとめに出来るのか。少々乱暴な論理と思われる。

(29) 東南アジアの人々 (p.277)

「日本の緒戦の勝利は、東南アジアやインドの人々に独立への夢と勇気を育んだ。」

そのような東南アジアの人々が、やがて日本に背を向けたのは何故か。シンガポールは東南アジアの中で政治・経済・文化の面で最もレベルが高い国だが、国立博物館に展示されているジオラマは日本軍の横暴・残虐ぶりを示すものがほとんどである。その象徴が日の丸である。東南アジアの独立に日本が貢献したなどと、とても言えるものでない。

(30) 出撃する特攻隊 (p.278)

「女学生の見送りを受け飛び立つ戦闘機」

女学生が何故飛行場にいるのか。女学生が桜の枝を振った意味を解説出来る教師がいるのか。もっとも指導書に説明されるとは思うが。

250㌔爆弾を抱えた戦闘機が沖縄までの500㌔を２時間半で飛ぶことも至難の技だった。時速200㌔の特攻機に対して、時速600㌔のグラマンが待ちうけ襲いかかったことも教える側は心得ておくべきだろう。特攻機がやっと飛びあがった時、上空にはグラマンが来ていたという。８機編隊で向かったが、種子島上空に着いた時は４機になっていたとか、１機だったと生き残りの特攻隊員は語るが、何故そうなるのかを語らない。離陸してほどなくグラマンに落とされたとは口が裂けても言えなかったと思われる。ようやく敵艦隊上空にたどり着いた特攻機が体当たりを敢行し、命中率13%（特攻機総数に対して）でも敵に損害・心理的打撃を与えたことは事実。しかし、人命無視の無謀な作戦だった。

(31) 大東亜会議 (p.280)

大東亜会議は、第一義的には、日本中心の大東亜共栄圏確立のためアジアの人々を利用したにすぎない。写真の中央に坐る東条英機を、アジアの解放に大きく貢献した存在として評価するつもりなのか。「生きて虜囚の辱めを受くることなかれ」との戦陣訓で国民に呼びかけ、無謀な戦争に引きずり込んだことと天秤にかけるとどうなるのか。Ａ級戦犯の

の最初に来る人物も死んだら神として靖国神社に祀られる。国のために死んだ方々に感謝の気持ちを捧げるのは当然だと、総理大臣小泉純一郎は2001年８月15日の参拝強行を主張している。

会津の白虎隊、西郷隆盛をはじめとする薩軍将兵は靖国神社に祭られていない。理由は賊軍だったから。しかし、許されて正三位をもらい、上野に銅像も建っている。乃木大将は明治天皇に殉じたが戦死でないから、東郷元帥も戦死でないから、靖国神社に祭られていないとのことである。西郷隆盛・乃木大将・東郷元帥が近代日本のために果たした貢献の度合いは、戦犯となった東条英機より低いのだろうか。西郷隆盛・乃木大将・東郷元帥は別に神社があるから、よりどころのない東条英機は靖国神社に祭らざるを得ないとするのだろうか。

国のために死んだ人々を徹底的に調べることも必要だが、敵対国だけでなく戦争に巻き込まれて死んだ国々の人々もこと細かに調べて冥福を祈ることも必要と思う。それをなし得て第二次世界大戦の後始末が終わることになると考える。戦後の処置はそのままにして戦死した人々の冥福を祈るというのは口先だけの美辞麗句にすぎない。処理不可能の深海のものならば仕方がないが、南太平洋の島々には軍艦・船舶の残骸だけでなく戦死者の遺骨も野ざらしのままになっているものが多いと思う。「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」と割り切っているのだろう。

(32) 戦争犯罪 (p.295)

ＢＣ級戦犯について各市町村郷土誌は一切ふれることはない。プライバシイの保護を考えているのだろうか。また、戦死者について氏名だけでお茶を濁すものがほとんどで、氏名・階級・戦死年月日・戦死地など、基本的な事項を記述した郷土誌は指折り数えるほどである。その意味では戦後の歴史的処理は済んでいない。

「誰が、いつ、どこで、どうした」は歴史理解の基本である。郷土出身の若者の死場所について客観的な事実と記録が望まれる。○○は昭和20年３月17日硫黄島で戦死○○才などの記録があれば将来役に立つこともあるだろう。

(33) 昭和天皇讃美 (p.307)

明治大帝:Meiji the Greatと世界史的に評価されていることは認めるが、多くの国民を死なせた昭和天皇がHirohito the Greatと評価されるとはとても思えない。戦中世代は表面には出せないうらみが数々あり、昭和天皇讃美の文章を見て、ただ驚くだけである。日本よい国を言うために天皇を利用しているとしか考えられない。

『三国史記』に見える卑弥呼

平凡社の東洋文庫はいつまで続くのだろう。刊行され始めてから40年ぐらい経ったと思う。その間ずーっと購入して来たのだから、毎月２冊（最近は１乃至２冊にペースダウン）の本はすでに800冊を超えている。それを一々眼を通したわけでない。しかしある事柄を知りたいと思い立った時は役に立つ。今年はどうしたことか、韓国と縁が深かった。２月初め、済洲島・木浦・光州・全州などへ旅行したことと「新しい歴史教科書」問題で、いろいろ調べる必要に迫られたからである。東洋文庫に朝鮮関係のものも多く、通信使の紀行、外国人の旅行記など結構に楽しめた。なかでも面白く読めたのは、李舜臣『乱中日記』と『三国史記』だった。

『乱中日記』では、有名な「沙也可」のことは出ては来ないが、数多くの降倭が存在していたことを知って驚いた。また、17回を数える海戦ではほとんどが日本水軍の敗北であったことを知り、都合の悪いことは知らされないのが歴史なんだなと思った。島津家の記録である『征韓録』と比べると、同一の戦闘の記録がどちらも勝ったと記していることも知った。戦闘の記録はえてしてそういうことになるのだろう。歴史の解釈は双方の歴史家による照合が必要ということを知った。

2001年４月「新しい歴史教科書」の検定をめぐる新聞報道が賑やかになった。５月になると外交ルートを通じて、韓国から多くの修正要求が出された。とくに「任那日本府」の取り消しを最初に求めていることで、これは原点に立ち返って整理する必要があると考えた。それまで本棚に飾ってあったにすぎない『三国史記』を取り出して読み始めて驚いた。今まで古代史関係の本も多数見てきたが「卑弥呼の使者が新羅を訪れた」ことなど聞いたこともなかったからだ。倭と新羅間の出来事が数多くあることを知り、年表的整理が必要であると感じた。同時に『日本書紀』を拾い読みすると、朝鮮半島関係の記事がやたらと多いことに気付いた。敗戦により皇国史観はしりぞけられ、古事記や日本書紀を顧みる歴史家は日本では皆無に近い状態になっていたとみてよい。韓国の研究者は日本書紀は信ずるに値いしないとけなしながらも、日本書紀を足がかりとして「任那日本府」問題の分析を続けて来ていた。もっとも民族主義的なフィルターがかかっているが。20世紀後半、日本の歴史家は振り向きもせず、韓国の歴史家は営々と調べて来た。その差は大きい。対等に議論するためには勉強せざるを得なくなった。

李承晩ラインは昔の話になったが、「竹島」帰属問題は有耶無耶な状態。李承晩ラインで漁船が拿捕されると、「海上保安部・海上自衛隊は何をしている、武力がないと馬鹿にされる」との風呂屋談義を昔はよく耳にした。竹島（韓国で独島とよぶ）の帰属を双方が騒ぎ始めるとどちらも熱しやすい国民性だから厄介だと思う。ただ古来の領土だと新聞は説明するだけで、具体的に史料を示しての分析を示されたことはない。韓国側の言い分がどんなものであるかも知らされたことはない。今回の教科書問題もそのような延長なのだろうか。

35年間抑圧された韓民族の恨みを日本人が理解しないための「いらだち」が、事あるたびに吹き出すのだろうか。

日 韓 比 較 年 表 （韓国の分は主として三国史記による）

倭 （ 日 本 ）	韓 （ 百済・加耶・新羅 ）
	B.C.50 倭人が出兵、新羅の辺境に侵入 B.C.20 倭人瓠公、新羅に仕える
57 倭奴国の使者、洛陽に至り、光武帝より印綬を受ける（後漢書）	14 倭人が兵船百余隻で新羅の民家を略奪 59 倭と国交を結び使節を交換 64 百済出兵、新羅を攻める 70 百済が新羅に侵入 73 倭人が木出島に侵入 74 百済が新羅に侵入 85 百済が新羅に侵入 94 加耶軍が新羅に侵入
107 倭国王帥升ら後漢に生口百六十人を献上（後漢書）	105 百済が新羅に使節を派遣、国交を求む 115 加耶が新羅の南部辺境に侵入 121 倭人が新羅の東部辺境に侵入 123 新羅、倭国と講和 158 倭人来訪 167 百済軍新羅に侵入。西部二城を破り、住民一千人を連れ去る 170 百済の兵、新羅の辺境を犯す 173 **倭の女王卑弥呼の使者来訪**
C.147～C.188（一説178～183） 倭国大乱、女王卑弥呼を共立 （魏志倭人伝）	188 新羅、百済の侵入を撃退 190 百済軍の侵入を追撃して、新羅敗る 199 百済、新羅の国境を犯す
	208 倭人、新羅の国境を犯す 212 加耶、新羅に王子を人質として送る 214 新羅軍、百済を討つ 218 百済軍、新羅に侵入、撃退さる 222 百済軍、牛頭鎮に侵入、新羅軍大敗

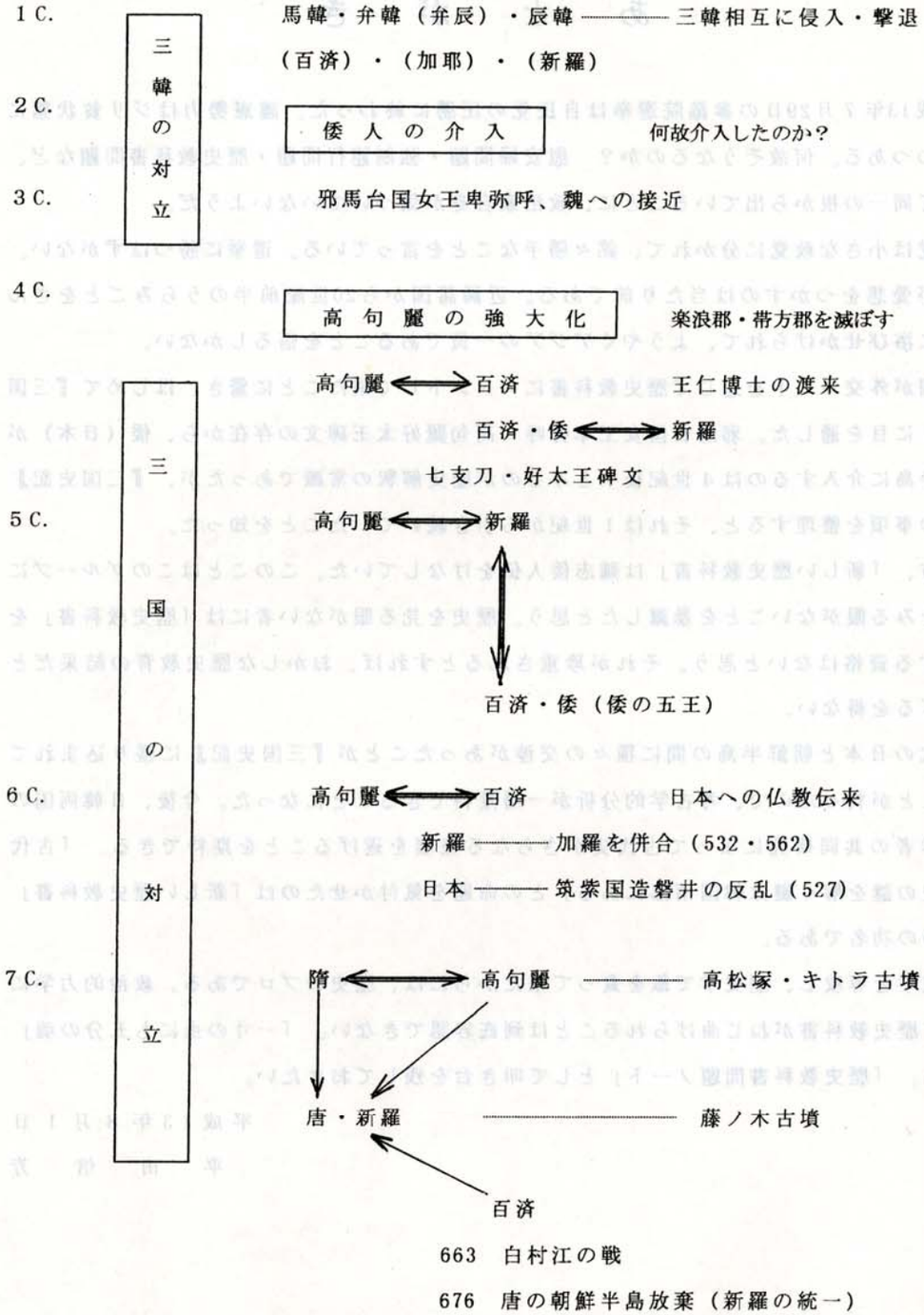
倭 （ 日 本 ）	韓 （ 百済・加耶・新羅 ）
	224 百済、烽山の麓で新羅と戦い、敗る 232 倭人が侵入、金城を包囲。新羅王自ら城を出て戦い、賊を撃退。騎馬隊が追撃して一千余人を殺し、捕らえた。 240 百済軍、新羅西部に侵入 245 高句麗軍、新羅の北部辺境を犯す 248 新羅が高句麗に使者を派遣
239 卑弥呼、魏に遣使。親魏倭王の称号を受ける（魏志倭人伝）	249 倭人が舒弗邯の干老を殺す
248 卑弥呼歿、壱与が女王となる	266 百済軍、烽山城を攻めるも撃退さる 272 百済軍、新羅国境を侵犯 278 百済軍、槐谷城を攻めるも撃退さる 287 倭人が侵入、一千人もの人々を連れ去る 292 倭兵が沙道城を攻めるも失敗 294 倭兵が侵入、長峯城を攻めたが勝てず 300 新羅、倭国と国使を交換
266 倭女王（壱与？）西晋に朝貢 （～413年まで、倭国の消息、中国文献になし）	
王仁・阿知使主・弓月君ら渡来 （応神記）	312 倭国王が使者を派遣、王子の花嫁を求む 313 高句麗、楽浪郡を滅ぼす 314 高句麗、帯方郡に侵入 337 新羅、百済に使節を派遣 345 倭王が新羅に国書を送り、国交断絶 346 倭軍、新羅の辺境地帯を掠犯 364 倭兵大挙して新羅に侵入、倭軍大敗 368 百済、新羅に使者を派遣 369 高句麗王、二万の軍を率いて南進。百済と戦うも敗る 371 百済王、三万の軍勢で平壌城を攻撃 375 高句麗、百済の水谷城を攻撃 376 高句麗、百済の北辺侵略 377 百済王、平壌城攻撃。高句麗王反撃 386 高句麗王、百済を討つ 390 百済軍、高句麗の都押城を攻略
369 百済・倭国連合軍、新羅を破る 372 百済王、倭王に七支刀を献上	

倭　（日本）	三国　（百済・高句麗・新羅）
391　倭国出兵、高句麗と戦う（好太王碑） 397　百済、倭国と国交を結び、太子を人質とす。 400　高句麗、五万の兵で新羅救援。倭軍退く（好太王碑）	392　高句麗、新羅に使者を派遣。新羅王は甥を人質として派遣。 393　倭軍侵入、金城を包囲：倭軍大敗 392～395　高句麗、百済軍を撃破
404　倭軍、帯方郡に侵入、高句麗と戦い敗北（好太王碑） 413　倭王讃、東晋に朝貢（晋書） 438　讃歿、弟珍が宋に朝貢（宋書） 安東将軍倭国王の号を受く（宋書） 443　倭王済、宋に朝貢（宋書） 六国諸軍事を加授 451　済歿、世子興を安東将軍倭国王とす 478　倭王武、宋に上表 安東大将軍の号を受く（宋書） 479　鎮東大将軍の号を受く（南斉書） 502　征東大将軍の号を受く（梁書）	402　新羅、倭国王と国交を結び、未斯斤を人質とす 405　倭兵が新羅に侵入、明活城を攻めた 407　倭人、新羅東部辺境に侵入 409　倭国が百済に使者を派遣、夜明珠を献上 415　倭人と風島で戦う、新羅が勝つ 418　百済、倭国に使者を派遣、白綿十匹献上 424　新羅、高句麗に使者を派遣 428　倭国の使者百済に来朝、従者五十人 431　倭兵、新羅の東部辺境を犯す 433　百済が使者を新羅に派遣、和親を求む 440　倭人が新羅南部辺境を犯し、住民を掠取 454　高句麗が出兵、新羅の北部辺境侵略 455　高句麗が百済に侵入、新羅は百済を救援 459　倭人が兵船百余艘で新羅東海岸を襲撃 462　倭人襲来、活開城を陥れ一千人を掠取 468　高句麗王、新羅の悉直州城を攻略 469　百済、高句麗の南部辺境を犯す 474　高句麗長寿王、百済の王都を攻略 475　百済、熊津遷都 476　倭人が新羅の東部国境地帯を犯す 将軍徳智、倭兵二百余人を殺し・捕える 482　倭人が新羅辺境を犯す 484　高句麗軍、新羅国境を侵犯。百済と協力して、高句麗軍を撃退

倭　（日本）	三国　（百済・高句麗・新羅）
	486　倭人が新羅の国境地帯を犯す 489　高句麗軍、新羅に侵入 493　倭賊に備えて臨海・長嶺の二鎮設置 494　高句麗が新羅を破り、犬牙城を包囲 百済軍が新羅を援助、高句麗軍撤退 495　高句麗が百済の雉壌城を包囲、新羅軍が百済の援助、高句麗軍撤退 496　高句麗軍、新羅の牛山城攻撃失敗 497　高句麗が出兵、牛山城を攻略 497　倭人が新羅辺境を犯す 500　倭人が長嶺鎮を攻め落とす
507　大伴金村、男大迹王を越前より迎え、天皇の位につける（継体天皇） 512　百済の要請により、大伴金村は加羅の4県を割譲 513　百済より五経博士来朝 527　筑紫国造磐井の反乱 加羅復興に向かう近江臣毛野軍を阻む 528　物部麁鹿火が磐井の乱鎮定 532　加羅（任那）の金官国、新羅に服属 538　百済の聖明王、仏像・経典を伝える（仏教の伝来） 554　聖明王、加耶と連合して管山城を攻撃 新羅軍の反撃で大敗。聖明王戦死 562　任那（加羅）が新羅に滅ぼさる 585　物部守屋、仏殿を焼く 587　蘇我馬子、物部守屋を滅ぼす 588　飛鳥寺建立着手 593　聖徳太子、推古天皇の摂政となる 四天王寺建立	503　百済軍が高句麗の水谷城を攻略 507　高句麗軍、百済の漢城を攻めるも失敗 512　高句麗軍、百済に侵入 522　加耶国王が新羅に使者を派遣 523　高句麗、百済に出兵 524　加耶国王が新羅に来て会盟 525　百済、新羅と国交を結ぶ 529　高句麗王、百済軍を五合の戦で破る 532　加羅の金官国王が新羅に降伏 540　百済軍が牛山城を包囲、高句麗は5千の騎馬隊を派遣して撃退 541　百済、新羅に使者を派遣、講和を求む 548　高句麗、百済の独山城を攻撃したが、新羅軍が百済救援に来たので退却 550　高句麗が百済を攻めている間に、新羅が高句麗の二城を奪う 554　高句麗、百済の熊川城を攻めるも失敗 562　百済軍の侵入、新羅王が出兵、撃退。加耶の反乱、異斯夫の討伐で加耶降伏 577　百済軍の新羅侵入、撃退さる

倭 （ 日本 ）	三国 （ 百済・高句麗・新羅 ）
607　小野妹子を隋に派遣	605　新羅、百済の東部辺境を犯す
	608　高句麗軍新羅に侵入、８千人を捕虜。百済にも侵入、３千人を捕虜とす
	611　百済、新羅の仮岑城を攻略
	612～614　隋の高句麗遠征（失敗）
	616　百済、新羅の母山城を攻撃
	618　新羅、仮岑城を奪回
	623　百済、新羅の勒努県に侵入
	624　百済、新羅に侵入、六城を奪取
	626　百済、新羅の王在城攻略
	627　百済、新羅西部国境の二城を攻略
	628　百済、仮岑城を攻撃、失敗
630　犬上御田鍬らを唐に派遣（遣唐使）	629　新羅、高句麗の娘臂城を攻略
	633　百済、新羅の西谷城を攻略
	636　百済、新羅の独山城を攻撃、失敗
	642　百済王親征、新羅の四十余城を下す
	643　百済、新羅の党項城を奪取
	644～645　唐の太宗、高句麗遠征
	（643　新羅、唐に援を乞う）
	644　新羅の金庾信、百済の七城を奪う
645　大化の改新	645　百済、七城を奪い返す
	647　金庾信、百済軍を大破す
	648　百済軍、十余城を奪うも、金庾信の反撃で大敗
	649　百済軍、新羅の七城を攻めたが、敗北
	653　百済、倭国と国交を結ぶ
	655　百済王は高句麗とともに新羅の三十余城を攻め破る。新羅王、唐に使者を派遣、百済・高句麗の侵略を訴える
663　白村江の戦	660　唐・新羅の連合軍、百済を滅ぼす
664　防人・烽設置、水城の築城	668　唐・新羅の連合軍、高句麗を滅ぼす
667　大津遷都	676　新羅、朝鮮半島を統一

古代の日本と朝鮮



663　白村江の戦

676　唐の朝鮮半島放棄（新羅の統一）

あ と が き

平成13年７月29日の参議院選挙は自民党の圧勝に終わった。護憲勢力はジリ貧状態になりつつある。何故そうなるのか？　慰安婦問題・強制連行問題・歴史教科書問題など、すべて同一の根から出ていることに、政治家自身が気づいていないようだ。

野党は小さな政党に分かれて、銘々勝手なことを言っている。選挙に勝つはずがない。国民が愛想をつかすのは当たり前である。近隣諸国から20世紀前半のうらみごとをさんざんに浴びせかけられて、ようやくアジアの一員であることを悟るしかない。

韓国が外交ルートを通じて歴史教科書にコメントして来たことに驚き、はじめて『三国史記』に目を通した。邪馬台国女王卑弥呼・高句麗好太王碑文の存在から、倭（日本）が朝鮮半島に介入するのは４世紀後半とみるのが歴史解釈の常識であったが、『三国史記』記載の事項を整理すると、それは１世紀から引き続いていたことを知った。

一方、「新しい歴史教科書」は魏志倭人伝をけなしていた。このことはこのグループに歴史をみる眼がないことを暴露したと思う。歴史を見る眼がない者には「歴史教科書」を編集する資格はないと思う。それが珍重されるとすれば、おかしな歴史教育の結果だと言わざるを得ない。

古代の日本と朝鮮半島の間に種々の交渉があったことが『三国史記』に盛り込まれていることが判ったので、考古学的分析が一層期待できることになった。今後、日韓両国の考古学者の共同研究によって古代史がさらなる発展を遂げることを期待できる。「古代日本史の謎を解く鍵は韓国南部にある」との命題を気付かせたのは「新しい歴史教科書」のけがの功名である。

歴史学を専攻し、歴史学で飯を食って来たからには、歴史のプロである。政治的力学によって歴史教科書がねじ曲げられることは到底容認できない。「一寸の虫にも五分の魂」という。「歴史教科書問題ノート」として叩き台を残しておきたい。

平成１３年８月１日

平　田　信　芳

地名研究会報

第７５号　　平成１４年３月３日
鹿児島地名研究会

Ⅰ.第７４回例会　　平成１３年１２月２日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　青柳俊二・上野堯史・大田照夫・納　栄蔵・小山田　稔・小山　更・河野陽太郎・坂本　誠・築地成郎・永坂芳彦・西田春人・繁昌正幸・肱岡修一郎・平田信芳・松田　誠・三善喜一郎（計１６名）

Ⅱ.大日本地名辞書読会　　P.1764～ P.1765　山之口・高城・野野美谷・郡元・都城・北郷

Ⅲ.問題提起　　松田　誠「福山町の地名」

Ⅳ.会報第74号についての感想

〔問題になった地名および事項〕　野野美谷・田中頼庸・重野安繹・八幡神社・野久美田鳩脇・地名の発生・薩摩迫・葛例郷と佳例川・福山牧・比曽木野・狩猟地名・地名と詩人的感覚・意味不明の地名・牧と苙・パソコンでの悩み・クルス・宮浦神社・迫・国師・堂ケ尾・イラ谷・牧神と惣陣が丘・直線的な字境・川の名前大水溜・飛地・灰塚・車田・福山麓・供養元・銭瓶

野野美谷

平田　今日読んだところは都城周辺の山之口・安永・安久などです。『宮崎県の地名』（平凡社）は野野美谷に(ノノミダニ)と振り仮名を振っていますが、川内市に野々宮(ノノミヤ)という名字の人がいますから「ノノミヤ」の読みでいいのじゃないかと思うのですが、現在は「ノノミダニ」と読んでいるのですかね。地名と名字は結び付いているので、ノノミヤだと思うのですが。

田中頼庸

平田　一番下の段、「安永」の真ん中辺に田中頼庸という人物があげてあります。三島通庸はご存知だとおもいますが、田中頼庸は廃仏毀釈の重要な人物なんです。『国史大辞典』（吉川弘文館）にはちゃんと立項されていますが、『鹿児島大百科事典』とか『鹿児島県姓氏家系大辞典』とか、鹿児島県を取り扱った辞典では何故か見落としているようです。廃仏毀釈の中心になったのは西郷さんと一緒に城山で亡くなった島津家の家老桂久武ですが、その下にあって田中頼庸が神社奉行として廃仏毀釈を進めて行った中心的存在ですから鹿児島県の歴史では注目しなければならない人物です。しかし何故か知りませんが『鹿児島大百科事典』とか『鹿児島姓氏家系大辞典』からは洩れています。明治になってからは神祇省に入り、鹿児島にはいなかったと思います。それで知られていないのかも知れません。

重野安繹

平田　「都城」の項の真ん中辺に重野氏とありますが、これは重野安繹（しげのやすつぐ）のことです。西郷さんが沖永良部に流された時重野安繹が先に流されていて、西郷さんは安繹の所に行って漢詩を初めいろいろと習っています。のちに東大教授になります。重野安繹と西郷さんの違いは、西郷さんは島妻愛加

那と二人の子供まで設けますが、子供は引き取って育てられ愛加那は淋しく独りで死んだのです。重野安繹は生活が安定してから金を持って島妻を迎えに行きますが既に別の男性と結婚していたので、あきらめて金は島妻に与えて帰って来ます。島妻に対する処遇としては、人間的にみて、重野安繹の方に軍配をあげざるを得ません。

東大教授ですから重野安繹が書いた碑文が沢山あります。とくに出水に残っています。出水小学校の道路向かいに護国神社があり、そこに大きな石碑が三つあります。その中の一つに河添白水という人物の碑があります。この人は造士館で学んで、江戸にも行ってるようですが、34歳で亡くなっています。凄い秀才ということで、重野安繹が19歳の時に都城から紫尾山を越えて出水まで河添白水に逢いに来ています。そのことを重野安繹は河添白水の碑文に書いています。

江平望氏が島津忠久の研究をされて『島津忠久とその周辺』という本を出しておられますが、その中で島津氏が拠点とした野田の木牟礼城と島津荘を結ぶ道があったに違いないとの仮説を立てられたのです。島津荘から菱刈を通って紫尾山を越えて木牟礼城に出て来るルートです。島津荘：都城盆地で出来た米などを木牟礼城の所まで運んで、そこから八代海・有明海を経て筑後川をある程度遡り大宰府まで届けるルートがあったのだろうとの仮説です。重野安繹の碑文によって、そういうルートがあったことが裏付けられます。

出水麓は最近、特別史蹟になったので道路一つ一つに標識が立てられ名前が記されています。その中の一つに菱刈街道という名前が記されています。菱刈街道の存在は島津氏の拠点であった木牟礼城と島津荘を結ぶ重要な道路であったことを示すもので、重野安繹の碑文と符号します。

重野安繹が書いたいろんな碑文がありますが、その中の一つに薩軍のことを「賊軍」と書いたものがあります。彼は西南之役に対しては、きびしい眼で見ていたようです。

私が感じたことは以上です。何か問題にしたいことがあれば出して下さい。

八幡神社

坂本　都城には八幡系統の神社は、あるのですかね。八幡神社はないようだけど。都城で一番大きい神社は神柱宮とかいう。

平田　神柱神社があります。

坂本　今読んでいる大日本地名辞書には出て来ません。そうすると、神柱神社は特別に造られた神社ということになりますね。

平田　その辺のことは知りません。

坂本　さっき出て来た稲荷神社なんかは判るのですけど、島津荘で稲荷神社を尊重したということも判りますけど、一番大きいのが神柱神社ですね。

平田　そうです。神柱神社です。

坂本　八幡神社でもないのですね。神柱神社は。

平田　そうですね。

坂本　別にありゃせんだろうかと思って。

平田　それは三国名勝図会で拾っていけば判りますけどね。（後記：山之口町に的野八幡がある）。ただこういうことは言えます。薩摩国では大きな郡・郷に八幡社が置かれています。これは古代・中世以来、大きな郷に官設の神社として設けられたとみられます。南薩の方は八幡神社が入っていません。何故かと言えば、開聞神社の勢力圏になるからです。全国的に見ると、「国分八幡」と言って国分寺の鎮守神として設置されていますから郡とか郷単位で八幡が入り込んで来る可能性が強いのです。ただ大隅国の場合、薩摩国と比較すると、昔から土着信仰が根強くて外来の神はあまり入っていません。薩摩の方は新しいものをどんどん取り入れています。それが大隅国と薩摩国の違いです。今の質問はそれである程度理解出来るのではないでしょうか。

野久美田・鳩脇

上野　ちょっと書かないと判りにくいので（黒板の前に来る）、樺山氏が隼人に来たということは、隼人に「野久美田」というのがありますね。今出て来たのは「野々美谷」ですね。「久」と「々」は昔の文字で比べるとよく似ています。似ていることと樺山氏の根拠地ということを考えると、野々美谷も野久美田も樺山氏の根拠地になったのだから何か関連があるのでは。

平田　さぁ？

上野　野久美田は谷はなく、地元では「ヌクンダ」と言っていますね。

平田　喜入の南にある生見(ヌクミ)は「暖かい水」を意味するし、野久美田もそれに近いと思うけど。

上野　どっちも樺山氏ということでおやっと思ったのです。

平田　確かに野久美田の生別府(オイノビュウ)城は樺山氏の拠点になります。樺山氏があすこに拠点を構えたことによって清水(キヨミズ)城は攻め落とされ国分地方が平定されます。生別府城は国分攻略のための橋頭堡で、樺山氏はそれに張り付けられて存在だった。生別府城は鹿児島湾の中では突出した場所で戦略的に重要な所になるのです。そして生別府城の麓に「鳩脇」という所があり、鳩脇からその昔俊寛たちが硫黄島に流されて行ったのです。

以前から鳩脇（破止脇）を見直そうというのだけど、鹿児島県の人たちはなかなか長門本平家物語を評価しません。俊寛一行が流されて行き、成経たちが帰って来るルートが示されている歴史的に重要な場所なんだけども一向に日の目を見ません。

今の上野さんの提案は面白い着想だけど、野久美田はヌクミダでしょうね。

地名の発生

河野　一般的なことですが、地名はどのようにして発生するのですか。

平田　地名ですか。昔の人たちが生活する上で場所を示す言葉として自然発生的に生まれて来るのです。誰々がどこへ行った、昨日行った山とか、何々に似た山。誰々が住んでいた山とか、そんなふうにして地名出来たと思います。

どうやって生まれたかというのはなかなか難しいのですが、例えば南の島のジャングルの中、地名なんか付くような所じゃないわけです。その中に入って行った時、誰かが転んだとすると、誰々が滑って転んだ所ということが共通の認識となって、誰々が転んだ所という表現：地名になって行く、というようなことです。

河野　例えば、鹿児島というのは鹿がいた島ですか。

平田　私はそう思うのですが。

河野　昔は島だったのですか？

平田　はぁ？

河野　鹿児島の「島」というのは？

平田　鹿児島神社というのが鹿児島県には3カ所あるのです。隼人の鹿児島神宮、垂水の下之宮、鹿児島市草牟田の宇治瀬神社。この三つを直線で結ぶと、真ん中に桜島がすっぽり入ります。鹿児島神社というのはこの島を御神体にした、と判断出来ます。

河野　判りました。

平田　南九州の場合、山を御神体とする一之宮が多いのです。薩摩国一之宮の枚聞神社は開聞岳を御神体とします。肥後国の一之宮は阿蘇山を御神体とします。そうすると大隅国は桜島を御神体としたと思ってよい。それに鹿児島と名付けたと考えられます。鹿児島の名が何故対岸に移ったのか。噴火などによって人々がこちらに移って来たに違いない。それで鹿児島という地名がこちらに付いてしまった。そういうことだと思っています。他にもいろいろと説がありますけどね。

河野　鹿児島市内に小さな地名がいろいろあります。例えば、平之町とか。これはどんなにして生まれたのですか。

平田　「平」は地形地名だと思います。

河野　地形から。例えば、鴨池町というのは鴨がいたのですか。

平田　はい、そうです。

河野　はぁー。原因になるのは、動物とかいろんなのがあるのですね。

平田　植物が生えていたり、動物がおったり、いろいろです。鴨池というのは、あすこに島津の殿様の別荘があって、そこで鴨猟をやったのです。そんなことで鴨池という地名が自然に生まれたのです。

薩摩迫

坂本　終りの方の「志摩戸荘」の話。「其時の治所を薩摩迫と云ふ」となっていますが薩摩から移って来たために薩摩迫というようになったのでしょうね。

平田　それは違うでしょう。

坂本　あゝ、違うのですか。谷山や田上に薩摩迫という所がありますが、あれとは違うのかなと思って。

平田　同じですよ。これは亡くなった小川先生が「サツマ」の分析をされています。薩摩迫はどんな所かというと、いわゆる迫が山から平地に出て来る狭い湿地帯になる。そこに弓矢を持って待ち構える狩に都合のよい場所。そう言った所から出て来た地名だろうと分析されています。それが「サツマ」の語源だということです。この志摩戸の薩摩迫はそういう場所じゃないでしょうか。

河野　「大隅」は何ですか。

平田　「隅っこ」でしょうね。

河野　そんなふうに名付ける。

平田　普通は「隅っこ」と名付けるか、海がきれいに澄んでいるとか、そう言ったことでしょうね。

河野　底が澄んでいるから？

平田　きれいに透き通って見えたとか、そう言ったことでしょうが、大隅・薩摩の地名の付け方から見ると、大いなる隅っこ、端っこという意味でしょうね。何でも疑問に思うことが出発点ですから、どんどん出して下さい。

河野　平凡な質問で済みません。

平田　いえ、いえ。他にありませんか。これで前半は終わりにして休憩にしましょう。

福山町の地名

松田　誠

資料はレジュメと福山町の字総図、それに福山時代に生徒と一緒に調べたものの抜刷です。松田　誠「福山高校商業科の体験学習：福山酢づくり」鹿児島民具14号抜刷、これを差し上げます。

葛例郷と佳例川

福山町に3年おりましたので、その間駆け廻って調べたものです。やっぱり地名は難しいですね。気軽に手をつけるもんじゃない。（笑い）。取り付き易いのですが、いざ何かやるとなるとなかなか、新たな何かを地名から考え出そうというのはとてもじゃない。われわれには出来ないとつくづく思います。

地名については、レジュメの最後の方、10ﾍﾟｰｼﾞから最後までは前田義人さんのものをコピーしました。先日、11月25日の南日本新聞に載った人です。佳例川の飯富神社の神官さんです。この方が佳例川地区を中心とした地名をまとめられました。前田さんとつき合っているもんですから、佳例川の地名については前田さんが書かれたものを借りることにしました。ほぼ地元の認識にもとづいて説明がしてありますので、補足を付け加える程度にします。

1ﾍﾟｰｼﾞから順番に説明します。福山に3年いたわけですが、あすこはやはり山の上で、生活圏は都城圏です。かねての生活はどうしても都城の方が近い。どちらかというと、薩摩よりは都城スタイルです。

佳例川を語るとなると、今までこの地名研究会で何回も出て来ているようですが、和名抄の郷名「葛例」を避けて通れない、と思うのです。どういうふうに考えたらいいのか教えて頂きたい。隼人町にも嘉例川があり川辺郡にも葛例というのがあったみたいですね。（編集者後記：川辺の方は勝目を比定地とする）。それが枯れた川：枯川なのかどうなのか。ここに地図がありますが、佳例川というのは川の名前なんでしょうか。「川」としたら現在の佳例川にはたいした川はありませんよ。菱田川というのがあります。それと今日の資料（大日本地名辞書）に横市川というのが出て来ました。「葛例」というのが川の何なのか。

時代的には12世紀末から13世紀のあたりですが、廻(ﾒｸﾞﾘ)というものも出て来ます。葛例はそれ以前の問題で、時代的には区別されています。古くは葛例郷、12・13世紀以降は「廻」と、下場の方が主になります。今は同じ福山町なんですが、昔は別の自治体・行政区域、そんな感じがします。文化圏は全然違うんじゃないかな、と。13世紀以降は下場中心の歴史で、武士の時代になって廻・廻城が出て来ます。

福山牧

佳例川では慶長年間に「北田」という地名が登場します。時代は新しいのでしょうが、佳例川の真ん中辺にあります。慶長6年8月25日に島津氏から今の松下病院の先祖が貰ったという土地になります。「北田」ですから田圃もあったんだなと思います。一般的には福山は地名の上からいうと「牧」が中心じゃないかと思います。それで「牧」に関する地名で福山の特徴を表したいと思っています。

昔から田圃もあったことになりますが、畑よりはむしろ田圃と、そんなふうに感じたりします。

プリント１枚目中程に「福山牧は天正８年義久が鹿屋の高牧から合戦野へ移して開牧した」とあります。この頃から牧之原(ﾏｯﾉﾊｲ)の歴史が始まるようです。それまでは今の狐が丘とかゴルフ場とかある福地・福沢あたりは前人未踏の原野だったでしょうが、天正８年の頃から「牧」が出来て人間が住むようになったと思います。ただし例外的に「国師」という地名があります。全くの山の中です。それが在庁官人：昔の国司とどう関わって来るのか、結び付けたい気がするんですが、何故あんな山の中に国司が来なければならんのかと思う地名があります。

一般的には牧之原は牧場で始まると考えられます。福地・福沢という地名も18世紀頃登場する地名だと、郷土史などを見るとそのような説明がしてあります。福地・福沢・福山、皆「福」が付いております。

それから、桜島の噴火がその歴史を形作っているようです。牧が全滅になったと書かれています。郷土史には「牧」は九州一の規模だと書いてあります。馬が千頭とか二千頭とか、放牧馬の頭数からいくのか広さからいくのか判りませんが、規模としては九州最大のものだと書いてあります。

この地図（字総図）は、前田さんから以前貰ったものですが、見にくくなっていたので書き直しました。福地・福沢というのはこの下の方です。この地名が果たして天正８年以降に出来た地名なのか、ちょっと引っかかっています。それ以前は何もなかったというとらえ方で来ているわけですが、案外それ以前の中世あるいはそれ以前の地名が此処にありそうな気がするわけです。お気づきでしたら教えて頂きたいと思います。

此処は飛び地があちこちにあります。地図の真ん中ぐらいのところに小さな輪があります。一番下が福地です。その周囲は福沢。此処の辺は下場の福山の飛び地です。そして端っこの此処の辺が福沢の飛び地です。このように飛び地があるのも珍しいのですが、単純に考えると開拓者の根拠地によって飛び地が出来たみたいです。開拓者のグループが出来た結果、飛び地が出来たということのようです。

レジュメの真ん中辺に「牧之原」が書いてありますが、天明２年（1792)頃橋口家が住み着いたと郷土誌には書いてあります。牧之原はそんなに古く開拓された地域ではないようです。いわゆる福山の歴史というのは、下場の歴史です。下場は式内社の宮浦神社をはじめとしてかなり以前からいろいろな歴史があるわけですが、上の方は新しい地区だと言えます。

「大水溜」というのがあります。「オオミッタマイ」というのは、小字総図でいうと此処です。今は「狐ケ丘」の所で、展望台やいろんな遊具などがあります。此処は苙(ｵﾛ)が近くにあり、その湧水地だと書いてあったり天水の池だと書いてあったりで、はっきりしませんが、地形的にへっこんだ所があるのでしょうか。馬の飲み水に適している地域になったようです。周囲には「牧神」とか「厩段」とか「牛牧」とか、牧に関する地名が多いようです。

比曽木野

比曽木野は佳例川の奥の方です。此処全部

が大字佳例川ですが奥の方を比曽木野と言います。「ヒソッノ」、前田義人さんの話では昔は曽津野ケ原と呼んでいたとのことです。私は今「曽」を念頭に置いているのです。曽というのは囎唹郡のソ、比曽木野のソもそうですが、まぁ言えば木がないというわけです。

それから鍋田・外戸口・御前水(ｺﾞｾﾞﾐｯ)・堀の頭・池水・総津越(ｿｳﾂｺﾞｴ)、というのがあります。総津越・総津丘の谷とか、これも古い地名です。牧神は初めは大水溜にあったそうですが、此処から転々と３カ所移動しています。お祭りとか何かにつけて不便だ、というのでしょうかね。２回・３回と移転して最近は自衛隊の演習場の近くに牧神さぁが移転しています。２回目に移転した所が曽津越になります。曽津は、私が思うに、小川先生の寒水(ｿｳｽﾞ)・沢津だと思います。寒水は湧水のことで小川先生が昔述べられました。このことは地名研究会報（16号）にも書いてあります。寒水から曽津丘とか曽津越という地名が出て来たんじゃないかなと感じています。

狩猟地名

「牧」があると、猪・狼などが出て来る。そのために狩猟が盛んになると思います。だから狩猟関係の地名も牧の周囲にあるはずです。狩猟が牧場に関係なくあることを示す地名があるのでしょうか。県内の四角目とか狩倉とか馬込など狩猟に関わる地名を集めると、それらは牧の周囲にあるような気がします。例外もあるでしょうが、「牧」に関する地名は「狩猟の地名」を伴っていると申しあげたい。

地名と詩人的感覚

これは、昨日12月１日、新聞に載った岡田哲也の表現ですが、「迫」のことについていろいろ書いております。迫をサコンタロ：水車と結び付けたり、あるいは関東に少ないとか、シラスの浸食谷のせいだろうか。そして結論として黒潮の香りがする、と。詩人の発想なんですが、私がこれを持って来たのは私なんかは発想が足りないのですね。今まで地名を沢山見ているのですが「迫ん太郎」というようなインスピレーションがないのですね。そういうのがないと地名研究はおぼつかない。博識でないと、ただ地名だけをずーっと眺めていては進まんなぁと今つくづく感じているところです。岡田さんなんかは他の物とぱっと結び付ける。迫を黒潮と結び付けたり、迫ん太郎に結び付けたりですね、地名研究にはそういう能力が必要じゃないかなと思ったりしているところです。（編集時後記：磯公園のサコンタロに「迫一番の働き者」と説明書きがある）。

意味不明の地名

2ﾍﾟｰｼﾞ以下に福山の地名をパソコンで一応分類しました。地形地名・目印地名・信仰地名などに福山町の小字を分類したのを大字ごとに一列に並べてみました。3ﾍﾟｰｼﾞの３行目に意味不明というのがあります。掛葉野・黒岩・黒巣・釣掛・東部・長磯・野付・野津代・大尾・金碇段・サリゴ・サリゴ谷・噌津越・曽原・七桁・長割・持手木・防戸ノ上・イツク島・カラミ・クチワ。こういうのを意味不明として分類しました。後でいろいろと御指導下さい・

牧と苙

6ﾍﾟｰｼﾞは県内の「牧」という文字を含むのを全部ピックアップしました。県内の「牧」

という地名を含むものを市町村ごとにあげてあります。

欠点は文字が小さくて見にくい。最近私は虫眼鏡で見るわけですが、紙がもったいなくなりましてね、学校も見直しなんです。経費節減、余計な紙は使うな、両面を使いなさいと締め付けが来ております。だからどんどん小さくなってしまいます。本当は大いに使いたいのですが倹約すると文字が小さくなってしまいます。それが良いのか悪いのか。どうも読みづらくなりました。牧・苙をまとめたのが5ﾍﾟｰｼﾞです。

右側のソートは多い順番に並べ変えたものです。鹿屋が65で一番多かったです。中種子・高山・大隅・知覧・根占・西之表・鹿児島・垂水、こういう順番になります。一番下は日置郡の松元・金峰。薩摩郡はそれよりも多い。薩摩・鶴田・樋脇・桜島、こういう所がありません。

なお「曽」というのに気を付けると、国分市に「曽小川」があります。これは「噌吸」が訛ったのだと聞いております。「小川院」は福山になります。福山町に曽津原とか曽原頭とか「曽」の付く地名があります。文字というのは当て字ですからとるに足りないかも知れませんけれども、「曽」という文字を含む地名を無視していいかどうか、今、気にしているところです。

パソコンでの悩み

私はパソコンで地名を整理します。例えば「オロ」という表現ですが、「萇」もオロと読む。「苙」もオロ、「芫」もオロ。私の場合は苙(ｵﾛ)としてパソコンに読まして持ち上げたのがこの資料です。人間の目だったらオロと言ったら、いろんなのをピックアップするのですが、パソコンは決められた型しか読みません。パソコンは難字を読む読んでくれないという欠点があります。

それから「ホキ」、土へんに穴、クサカンムリに堀という文字。あれもパソコンはなかなか読んでくれないのです。パソコンを駆使してデーターを作りたいのですが、そういう欠点もあります。一概に正確だとは言えません。見落とす欠点もあるようです。

以上簡単でしたが御指導をお願いします。

〔質疑応答〕

クルス

河野　福山にはこんなに沢山地名があるのですか。これは地名ですか。

平田　そうです。これは小字です。

河野　こんなにありますか。

平田　どの市町村でもこれくらいはあります。現在各市町村は20年・30年かけて小字を整理しつつあります。

河野　さっき、クルスと言われましたが。

平田　クルス？

河野　はい、意味不明。都城にクルス橋というのがあります。

平田　何号前だったかな、自然現象に由来する地名の中で、シラスに対する反対語がクロス・クルスであることを書いておきました

宮浦神社

三善　この地図で宮浦神社のある小字名はどの辺ですか。

松田　宮浦？宮之下というのがありますね

平田　海岸の方に。

松田　どこか、この辺ですよ。

平田　福山町の入り口。

松田　その上に宮田というのがありますね

上野　此処ですよ。宮の下は。

河野　福山は昔は下の方から発達して、上の方は後で付け足したという感じですか。

松田　そうだと思います。

平田　しかし佳例川の方は違うでしょう。比曽木野あたりは山奥だけど、むしろ大隅大川原の方から・・・・

松田　大隅大川原の方が近いですね。

平田　あちら（都城盆地）の川の上流域が比曽木野になる。

三善　福山の宮浦神社が、平成16年頃には「宮浦神宮」になる。普通の説では神武天皇の御東征は宮崎の美々津から出られたというのだけど、哲学者の梅原猛の説では御東征の出発点は宮浦だ、と。神武天皇を祀ってありますし、大きなイチョウもありますからね。あすこから最近「延喜式内社宮浦宮」と書いた石碑が出たそうです。それで神社から宮に申請して宮内庁（神社庁？）の許可も受け、東京の三州人会からも寄付金を募って２億円ぐらい資金も出来て、平成16年頃には宮浦宮としての祭典も行われる。奉賛会長が鹿児島県遺族会の土瀬戸という人です。その人が中心になって、だいたいの資金の見通し、神社を宮にする許可を受けたということで、平成16年頃には達成すると、新聞に大きく出ておりました（平成12年10月４日南日本新聞）。そして神武天皇の美々津から御東征というのは歴史は変わるという題で、宮浦神社から出発されたのだということを梅原猛さんが書いておられました。新聞で１ﾍﾟｰｼﾞぐらい出ておりました（掲載新聞名未確認）。宮崎あたりでも、それについての反論は出ておりません。

松田　社格があがるということですか。

平田　鹿児島神宮・霧島神宮並みにする？

迫(ｻｺ)

平田　「迫」について先程は岡田哲也のコラムを引用して説明されましたが、関東から東北にかけては同じ文字を書いて「ハザマ」と読むのです。桶狭間の「ハザマ」と同じような地形です。こちらでは「サコ」と読むけれども、同じ文字も持っていったら向こうの人は「ハザマ」と読む。

上野　「迫」という文字を「ハザマ」と読むのですか。

平田　そうです。あの文字を。地形は同じものを言っているわけです。どうしてこういうことになったのか判りません。迫(ｻｺ)の範囲を地図の上で追求はしていませんが、かなり地域的な呼称です。

大廻・小廻

河野　大廻とか小廻とありますね。廻(ﾒｸﾞﾘ)というのは、廻氏あるいはぐるっと廻って行くから？

松田　大廻というのは垂水寄りです。（地図を拡げて説明）此処が狐ケ丘です。この山の中腹にずーっと山道があるのですよ。この茶屋まで、山道がある。

平田　大きな道が廻っているのだね。

松田　はい、廻っている。大きくですね。まぁ言えば長い道です。小廻は小さな道がか。

参勤交代路の杉並木

上野　私は都城まで歩く時に福山の麓から参勤交代の道があるというのを書いたのがありましたから、廻らずに真っ直ぐ行って、例のあの忠将ですかね。

平田　島津忠将。

上野　忠将の墓の所からずーっと上に行くように道が出来ているわけです。だけど今は

藪で通れない。

松田　あれが参勤交代の道ですか。

上野　参勤交代の道だろうと思います。

平田　上の方には杉並木が残っています。

上野　残っているのですか。だけど前には進めませんでした。

平田　台地の上には昔の道が部分的に残っています。

上野　昔の道は曲がっていませんね。真っ直ぐ通っている。その方が近いから。どうせダルったって一緒（疲れるのだから同じ）ということで真っ直ぐに造ったんかなという気がせんでもない。

平田　古代・中世の道は案外真っ直ぐです

小山　参勤交代って、一体誰が通る道ですか？

上野　えっ。

小山　その参勤交代は、誰が？

上野　島津の殿様が通ったルートが現在のいわゆる３号線と10号線。

小山　どう行ったのですか。

上野　それは、まぁ自分で撰んで。

平田　殿様の選択ですよ。

上野　幕府に届け出た道しか歩けめせんので、今度は此処を歩くとなればその道を行くことになるわけです。

小山　当然歩き易い道になりますね。

上野　ぐる一っと廻ると時間がかかりますからね。疲れてもいいから、真っ直ぐな道にしたのかな。福山を歩いて初めて道は真っ直ぐにするのかな、と思いました。

小山　団体ですからね。二・三人で歩くわけではありませんからね。

上野　何か、真っ直ぐにしなければならん理由がありますかね。襲われた時とか何か、そんな理由はないのですか。

平田　昔の道は意外な面がある。例えば、尾根を通のが敵にも襲われないし、川を渡る手間も省けるから、古い時代は尾根道を通るのが多いのです。古代統一国家になって来ると世の中は静かになていますから、国家権力によって直線道路を造らせている場合もあります。その方が軍隊を移動させるのに早くて便利です。

大人足跡

納　ちょうど此処、曲がり角のところに大人足跡とありますが、何と読むのですか。

平田　オオヒトアシアトです。巨人伝説があるのです。大人足跡、文字通りの解釈です

納　大人足跡というのは確か柳田国男の「ダイダラボッチ」という題。あの辺に何カ所か、大きな・・・。あれは岩川か。

平田　弥五郎どん？

納　あぁいう大きな人が歩いた跡だ、そこは窪地になっているんだ、と。その辺の地名を「大人足跡」と。

平田　巨人伝説、ダイダラボッチの伝説はあっちこっちにあるのです。

納　それと似たのが以前電話帳を見ていたところが隼人町に「大人」だったかな、そういう名字がありました。

平田　えゝ、あります。大人(オオヒト)。

納　それから川辺郡の笠沙か小浦どこかあの辺の神社に、大きなワラジを奉納する祭りがありますね。大きな人がいるから厄よけになるのだという伝説があります。大人足跡から、そういうことを考えつきました。

三善　串木野にも大人跡(ウシトアト)という地名があります。そこは今も話があったように足跡のように窪んだ田圃があります。一方の

足跡は甑島に行く海の中にある。そしてもう一つは甑島の里にあるという話です。串木野高校の近くに老人の家とか海の家というのがある森の中です。そこから相当な遺物が出たということです。

段

上野　この地図で「段」に印を付けていたら、この辺に「段」が多いようですけど。

平田　地形地名ですよ。段状になった。

上野　そういう所が多いということ？

平田　そういうことでしょうね。

上野　他の地図でも「段」の付く所はあるのだけど、こんなに集中的に「段」が付くのはあまりないような気がする。

河野　肝属郡に上段・下段とか、いっぱいありますよね。

松田　藤兵衛段という所があるでしょう。ほんの端っこ。此処で縄文の遺跡が発掘されました。

平田　藤兵衛さんが開墾した所だから、藤兵衛段になったのだろうね。

青柳　「段」で所有者を表しているのではないでしょうかね。所有関係を示すものとは違うのですか。

平田　「迫」でもね、甚兵衛迫とか、人の名前が付くものは多い。開拓する時には他の人はあまり邪魔をしない。加勢はするだろうけど。開拓に中心的な人物の名前が地名として付けられるわけです。江戸時代の開発地名と考えたらよいでしょう。そこから縄文が出土したら、昔から人が住んでいた場所ということでしょうね。

国師

西田　さっき聞き洩らしたのですが、コクシ。これはどういうことになるのですか。

平田　大隅国の官僚でしょう。

西田　国司に関係がありますか。

平田　あるでしょうね。

西田　それと関連しますけど、図師という名字がありますね。あれはどういう由来になりますか。

平田　図を描く技術者でしょう。

西田　単なる技術的な職能的な名前ということですね。

西田　この国師はそれじゃなくて官僚の国司ですね。

平田　官僚の国司の場合もあるし、僧侶の国師の場合もあります。

堂ケ尾

平田　このくびれた部分には宗教的な地名・信仰地名がかたまっているね。花建・御建場・大人足跡・星塚。そして堂ケ尾もある。

松田　此の堂ケ尾。此処には・・・。

平田　何か寺があるの？

松田　愛宕神社があります。

平田　現在は愛宕神社になっている。

松田　たしか、あすこです。

平田　江戸時代は神社と寺は裏表ですからね。廃仏毀釈で寺の名前は消えて、神社の名前が表面に出て来るわけですから、歴史的には堂ケ尾が先行するでしょう。

イラ谷

河野　時々、片仮名で書いた地名がありますが、元々は漢字だったのですか。

平田　何ですか？あゝ、このイラの谷。これはイラ草とかイラという虫に因む地名。これは普通、片仮名です。

河野　あゝ。

平田　そのままの表現です。イラが刺したと言いますね。それが棲んでいる谷のこと。

牧神と惣陣が丘

上野　以前調査したことがあるのですが、牧神の所に祠があるのですよ。

平田　牧之原の？

上野　はい。惣陣が丘の上にあったような気がするのだけど。惣陣が丘から見ると、全部見渡せるのです。良い場所だから多分此処に置いたのだろうと思います。この前行ってみようと思ったら、道が判らなくなっているのです。

松田　大きな石がありますよ。

上野　そんなに大きくはない。誰か個人が造ったような小さな鳥居があって、それを真っ直ぐ行くと丘の上に「牧神之碑」、そんなのがあったのです。

松田　山の上でしょう。

上野　はい。

松田　あすこまで行かれたの？

上野　今は山の位置も判らない。道も全然判らない。どう行ったらいいのか尋ねようもないのです。上之茶屋を通ってずーっと上にあがって来ます。それから鹿屋の方に引き返しますよね。この図は現在の地図と大体合っているのですか。

松田　山田屋敷というのがあるでしょう。山田屋敷は現在の牧之原の町場になります。上之茶屋から山田屋敷の辺に来て、花建原・大人足跡の辺を国道が通っています。それからちょっと上の方に、昔の道があったみたいです。それでずーっと並行して行って池田という所が端っこにあります。そして早山道。今、早馬神社があります。此処までの道が昔の街道というのですが、西南戦争の時の話も伝えられているようです。山田屋敷・花建原・大人足跡そして渡り。早山・柴建、意味がありそうな地名が並びます。

直線的な字境

平田　あゝ、今話題になった地名をこの地図で見ると、こういうふうに真っ直ぐにつながる字境がありますね。これは大体、昔の道になります。

上野　あゝ。

松田　どれですか。

平田　こういう字総図で、いくつもの小字の境界が直線状になっている所は道路と見てよい。それが字総図を見る時の着眼点になります。

川の名前

平田　今思いついたことだけど、佳例川を「枯れた川」と簡単に片づけていましたが、川の名前は普通河口にある町名をとる場合が多いのです。川の名前は河口にどういう集落・町があるかによります。例えば川内の町が河口にあれば「川内川」と名付けられるのです。「葛例」という集落が関係すると考えると「葛例郷」の川ということになる。そうすると「葛例」は瑞祥地名として名付けられた集落地名だと考えることも出来る。水が枯れる場合もあるかも知れないけど。

河野　地名は人名とつながっているのですか。名字も地名から来たと先程言われた。

平田　名字ですか。名字は大体９割は地名からとっています。

河野　９割。

平田　地名を調べると名字のルーツが大体判るのです。そのように理解されるとよいと思います。

大水溜

青柳　先程出てきた大水溜。

平田　水溜(ミッタマイ)。

青柳　南の方に「境町」とありますね。以前、タマリ・トマリを調べたことがありますが、それは境界地名というようなものじゃないかなとの気がしているのですが。

上野　「境」と関係がある？

平田　水溜はミッタマイでしょう。

青柳　だけど、場所を見ると、地図なんかでタマリという所を見て、トマリという所を見て気が付くのは、大きな「境界」があるなということです。大阪の堺とか島根の境とかそうなってるなと経験しているのです。

平田　考え方の違いになるけど、水溜があるとすると、周囲の人々にとってはどっちも重要な水源になるから、そこを境にすることになる。

青柳　どっちにしても、私がさっき言ったのは岡田さんの随筆のように自由に解釈すれば、ということです。発想を引っ張って来ればということです。

平田　しかし地名の考え方としては水溜という地名は多いのです。そこが境界になっておればその水溜を周囲の人々が利用したからそこに自然と境界が出来るようになる。

青柳　私が言いたいことは「トマリ」ということで、これは「なんとかのトマリ」だと「とどまる所だ」という意味での昔の言葉。昔の言葉で「トマリ」が境界を表すものではないかなというのを勉強したいと思います。

平田　「竿止(サオトメ)」というのは、言われます。測って行って終わる所。「トマリ」は海岸の泊りでしょう。船が泊る所。

青柳　はい、宿泊というのも泊り。

河野　大水溜があれば、小水溜もありますか、地名として。

平田　水溜は多いですよ。

河野　大水溜と書いてあるから反対に小さな小水溜があればと思って。（編集時後記：「水溜」地名42のうち、大水溜１、小水溜はなし」）。

飛地

三善　福山には飛地が多いとの話がありましたが、もう一度教えて下さい。

松田　どこですか？

三善　飛地があるのはどういう事ですか。

平田　出かけて行って開拓したわけでしょう。そこを自分たちの集落のものと登録すれば飛地になる。

西田　門の人たちが出かけて行って開拓したら飛地になる場合がありますね。

上野　こんなのはないですか。開拓した人たちが自分たちの所有地だと思っていた。ところがその途中の所を誰かが開拓すれば、飛地になってしまうわけです。

平田　離れた形で残ってしまうわけですね

上野　現在の宅地開発でも同じような現象があり得る。家・屋敷を継いだつもりだったけど、真ん中に別の団地が出来てしま、飛地のようになる。それと同じことになるのじゃないでしょうか。

三善　飛地は差別されたようなところはないのですか。

灰塚

松田　差別はないでしょうけど、此処に灰塚というのがあります。この飛び地に。此処は「ヘッガ丘」というのです。此処に馬頭観音があるようです、山の上に。近くの人は来なくて遠い所の人がお参りに来て、馬頭観音のお祭りをするようです。

平田　灰塚なんてのは普通はある人を火葬にした場所でしょう。そこに馬頭観音を祀っ

たわけで、何か歴史的に意味がありそうな地名だね。昔は火葬するというのはよっぽどの身分の人でしょうからね。下々の者を焼くとは考えられんでしょうから。普通は土葬ですから、灰塚は相当偉い人物を焼いた場所になるはずです。

三善　福山町に被差別部落がありますか？

平田　それは知りません。同和問題については、奈良時代からの奴隷：奴婢の流れもあるでしょうし、倭寇によって拉致されて来た人たちもあるでしょう。また南北朝時代に敗けた南朝側に付いた人たちが差別されている例が多いと見ることも出来ます。歴史的には被差別部落の方が古い。卑下する必要はないと思うのだけど、現実は極端に差別されている。そういう点は歴史家が明らかにしてやらねば、いつまで経っても被差別問題は再生産されると思います。

車田

肱岡　車田(ｸﾙﾏﾀﾞ)と読むのでしょうか。これは昔の国府とか郡衙だったとかいうような所ですか？

平田　車田という地名は沢山あります。そういうことじゃなくて、四角な田圃の真ん中からまるく輪状に稲を植えていくのです。田植を一番最初に行うのが車田になります。稲刈も車田から始めます。そういう田植え・稲刈の儀礼が行われる所です。

小山　読みを教えて下さい。車田から少し右の所の、金碇段。

松田　金碇段(ｷﾝﾁﾀﾞﾝ)と読んだのですが。

河野　この名前の付いた各地区に、大体人はどれくらい住んでいるのですか？

平田　これ全部に人が住んでいたわけではないのです。人が住んでいるのは、いわゆる地形地図で集落がある所です。

河野　住んでいない所がある。昔は人が住んでおったのですか？

平田　そうじゃなくて、耕すためにこの土地は誰のものだという所有権を示すために地名を付けたのです。これの全部に人が住んでいたわけではないのです。耕作に来る場所とか柴をとる場所とか、場所を判り易くするために地名が付けられたのです。

河野　判りました。

福山麓

西田　此処の麓ですね。これはいわゆる麓集落の麓ですか。

松田　そうだと思います。

西田　こんなに小さいのですか。

松田　宮ノ下の上のあたりを「麓」と言っています。

西田　麓集落としては、福山麓はそんなに大きくないわけですね。

上野　集落の麓は、別じゃないですか。

西田　これは地籍図上の地名ということ？私はいわゆる麓集落なのかと聞いているのです。

上野　ここらあたり全体を麓というのですね。

西田　大郷福山としては「麓」が小さいなと思って見ていたのですが。

上野　「麓」という小字じゃないですか。

平田　「麓」という小字だろうね。

上野　小字のようです。理屈を言えば見易いように役場で書っきゃったとでしょう。

松田　そこら辺が麓集落です。

上野　全体がですね。

松田　ここら辺を「麓」と言っています。酢を造る集落がこの辺にあります。

平田　此処に「旧城山」とか「古城」とあるから、その城山の麓だろうね。

青柳　城山があるから。

平田　旧城山の下だろう。

供養元

松田　1ﾍﾟｰｼﾞをちょっと開いて下さい。前田義人さんにいろいろお世話になっているもんだから彼の地名考をコピーしておきました。6番目のところに「岩戸」「供養元」というのがあります。この字総図で言えば比曽木野の真ん中辺です。私なんかは誰かを供養したんだろうと思うのですが、前田さんは「崩(ｸｴ)之元」と地形の上から書いておられます。それが前田さんの違ったところ。私なんかはすぐ供養の跡よと思うのですが、ここの辺はさすがだなと思っているところです。

平田　それは以前江之口氏もそう言うとったよ。しかし「供養」というのを全部引っ張り出して見なくてはね。そしてそれが崩壊地名と結び付くか、全部確かめる必要がある。供養は何かを供養した所だとみるのが普通だろうけどね。

上野　十文字線上に書いてあるから何か供養した所にも思えるし、どっちとは決められない。

平田　平重盛の供養ですか？

松田　平家の落人集落もあるみたいです。

平田　此処に？

編集時後記：供養元は堂田とか武津具田；仏供田あるいは仏具田に隣接しているので本来的な供養の意味だろう。大隅町の小字に崩下(ｸﾖｼﾀ)・崩元(ｸﾖﾓﾄ)・崩ノ元(ｸﾖﾉﾓﾄ)・崩ノ宇都(ｸﾖﾉｳﾄ)・崩ノ谷(ｸﾖﾉﾀﾆ)・崩ケ宇都(ｸﾖｶﾞｳﾄ)・大崩(ｵｵｸﾖ)、輝北町にクヨノ下(ｸﾖﾉｼﾀ)などがある。この地方の方言だろう。

銭瓶

小山　この辺にある銭○、何ですか？

平田　どれですか。これは銭瓶(ｾﾞﾆｶﾞﾒ)です。「ゼンガメ」とも言います。此処を掘ったら銭が入った瓶が出て来たとか言います。銭神とか銭瓶などは信仰地名になります。

小山　これなんかちょっと読めませんね。

平田　読めない地名は多いですよ。他にありませんか。3月は繁昌君に野田町の地名を説明してもらいます。今日出て来る時に米原さんから電話があって、高山町の小字一覧が入手出来たから、その次にやりますとのことでした。

IV. 会報第75号の感想

前略　お元気でご活躍のことと存じます。先日は地名研資料ありがとうございました。早速拝読。面白いです。

特攻隊に桜の枝を振る少女達は、私の小学校時代の同級生たちです。ゲタは、あの頃、ふつうの姿でした。くつなど、なかなかの入手難でした。川辺中学生（旧制）の小生も下駄ばきで通学したものです。

女学生達の桜の枝を持って見送りの写真は少ないので、度々あったことではないでしょう。屋根の上から見送る写真もありますね。あの頃は、ほんとに特攻隊の人たちは生き神みたいでした。知覧に私も当時住み、川辺中学に通ったのですが、写真のあの頃は学校では授業はなく、薩南各地にいた兵隊たちとヨコ穴掘りをしていました。しかし昭和二十年の初夏の頃から、空襲がたびたびあって、陣地つくりにも行けないことがありました。そんな頃危ないけれども私は友人と二人、知覧飛行場の飛行機や施設のない（危くない）隅のヤブにひそんで、特攻機の出発を眺めて

いたものです。同級の女学生たちは、その頃特攻隊の世話をし、見送ったわけです。当時は地域を挙げ、国を挙げての戦争に必死という感じでしたので、現在の空気とは大へん違います。沖縄のそこまで迫りつつあるアメリカをなんとしてもやっつけて、くい止めねばならない、と子供心に思い、皆思ったものです。それで憲兵はスパイや軍規を乱すことにはきびしかったけれども、女学生たちの桜の花を持って見送るくらいのことは、許容できることであって、相互に十分信頼したふんいきの中でのことだと思われます。

桜の枝を持ってゲタばきで見送る女学生の写真は、当時の本当の姿であり、知覧周辺の人々の皆の気持でもあり、当時の大方の日本人の気持でもあったようです。基地の人たち（軍人）も知覧の人々（民衆）も一丸となってしたせっぱつまった、なんとかして勝ちたい、切実な気持があったようです。

明日は出撃の夜、その夕方、数人位ずつ特攻隊員たちが歌いながら、軍服をきていても少しだらしない足どりで歩いてくるのは、どうも今考えると学徒動員の人たちだったようです。少年兵出身の方々はきびきびしていました。学徒動員の方々は、教養のせいもあって胸中複雑でもあったでしょう。そして時々は「富屋食堂」や「月見」「喜久屋」などの料亭に出かけて、どんちゃんさわぎもしたものです。住民たちは可哀いそうな方々だ（国の為に命捧げる人々だ）といって、十分に納得許容したものです。

軍側としましては、せめてもの思いやりで女学生たちの身辺の世話や見送りをさせたのだと思います。もうそこには軍の機密がもれる気持は軍にもなくて、住民の十分な信頼の上で、女学生たちの見送りを許容したのだと考えられます。

知覧飛行場の片隅のヤブの中から土煙りをあげて飛び立つ特攻機を（その日によって機種や数が違うのですが）、数えながら見送り（機は上空を回って隊をつくっていくのですが）、開聞岳の方に全機消えていくと、私と友人は急いで家に帰り（家まで1.5キロほど）ラジオにかぶりついたものです。しかし、その戦果は何時間かあと、夕方の大本営発表で嘯々たる戦果が発表されたものです。それでも、飛び立った飛行機の数にくらべて撃沈した敵艦の数はごく僅かな数でした。時には、発表のないこともありました。

その後、沖縄がおちてから、知覧飛行場への空襲が烈しく、あるときは二百機ぐらいの艦載機グラマンが次々に襲って機銃掃射し、私は石垣の下にかがんでじっと見ていたこともありました。ヤクキョウが周辺に沢山おちてきました。アメリカ兵の顔も見える低空でやってきていました。防風メガネをかけたアメリカ兵のカオはまさに「鬼畜米英」といった感じでした。（のち、終戦でまっさきに知覧飛行場は占領され、アメリカ兵がやってきましたが、その人たちは皆新品の軍服を着、髪は上品に刈り上げ、くつもピカピカ、笑顔でやさしく、すばらしい人たちに見えました。

それだけに、特攻隊で死んだ若い方々、特に一見だらしない学徒兵の姿がいっそう想われてならないものでした。

地名研の特攻隊の話を読んでの感想です。ではお元気に。

平成十三年十二月二十七日

下野敏見

福山の地名について　　平成１３年１２月２日（日）　　松田　誠

福山町は都城が近いので、生活圏になっている。

葛例･･･和銅年間（708 ～ 714）。和名抄。

隼人町の嘉例川･･･建治２年８月（1276）大隅国在庁石築地役配符　「加礼川七段･･･」

川辺町の葛礼郷･･･和名抄「阿多郡・鷹屋・田水・阿多・葛例」

廻　　･･･　　建久８年（1197）大隅国図田帳　「廻村弟子丸五丁」

廻・加礼川･･･建治２年（1276）大隅国在庁石築地役配符　「小河院内敷根･廻･加礼川･･」

廻氏　･･･　　弘安 10 年（1287）･･「宮侍守公神結番」に「廻大和入道」の名あり。

廻村　･･･　　応永 25 年（1418）･･･　栗野・薬師堂　「大隅国小河院･大願主良光、敬白、奉懸祈進廻村･･･」

佳例河北田二反八畝廿七歩･･･慶長６年８月２５日に島津氏から松下久宜へ宛行う。

福山牧は天正８年、義久が鹿屋高牧から合戦野へ移して開牧した。藩最大の馬牧であった。藩内の馬牧２０ケ所あり、宝永６年（1709）では藩合計 7236 匹のうち福山牧 2263 匹で全体の 31.3 ％を占めていた。安永８年（1779）桜島大噴火で一時壊滅した。そして、天明元年（1781）福山牧と末吉牧と合併した。文久３年（1863）廃牧した時、約 1000 頭いた。

福山･･･ 貴久が命名したという。忠将公戦死でこの禍を福に転じようとして。

福沢村･･安永 10 年(1781)年重豪公が西目方面（谷山･加世田･川辺･阿多）から開拓者を入植。阿多口の小字もある。

福地村･･牛根郷から砂走地区へ移植。天明２年(1782)に福地村と命名。１ｍ以上降灰した。砂走、合戦野地区は牛根郷出身が多いという。

佳例川は廻村に吸収された（天正８年の福山牧と同時に）

牧ノ原に先住者は天明２年（1782）頃下牧の橘口家であった（町郷土誌 p.509)。

池之谷の灰塚は安永の桜島爆発でできた丘であろう（町郷土誌 p.285）

御建場･･･１０号線の北側で牧場に関係ある（町郷土誌 p.514）

大水溜（おおみったまい）･･･キツネケ岡付近にあり湧水池で馬の飲料水になった。

黒巣　･･･行商人の行き交いが見られた所で油、酢など産物の交易が見られた所のようだ（前田義人）

比曽木野は古代は曽津野ケ原と呼んでいた（前田義人)。

鍋田　　･･･炊飯その他器具を購入する費用にあてるための（町郷土誌 p481）田。

外戸口（木戸口・けどんくっ）･･･牧場内の道路の要所には木戸が立っていて夜間の人の通行は許されず馬が水飲みに通る場所だった。木戸番は下級武士が置かれた。

堀の頭　　･･･放牧している馬が飛び越して崖から落ちないように要所要所には２ｍ以上の堀がつくられていたといわれ、その後、牧場が廃止されてからその堀の上の方にできた部落を掘之頭と呼ぶようになった(町郷土誌 p.493)。

御前水（ごぜみっ）･･･西牧の西端、福山街道をやや少し下る。湧水があり廻城の人馬の飲料水になった。

池水　　･･･開牧時、池を掘って天水をためて馬の水になった（町郷土誌 p.514)。

総津越　　･･･芝は最大（町郷土誌 p.281）

総津丘の谷　･･･芝。海抜 458m。砂走入り口付近。

国師　　･･･芝。国師は大字福山の飛び地。

狩猟関係

四角目　　･･･シカクメ→シカコメ→鹿込

込の段　　･･･たま込め。

間伏段　　･･･待伏。

二間瀬　　･･･「マセ」は馬が牧の外にでないようにした垣で二間瀬は二重になった籬のこと。　マセガキ。（平田氏）

参考文献

歴史探訪「佳例川・比曽木野編」前田義人著
中島勇三氏の四角目論文
福山町郷土誌

1.

福山町の小字分類表 13/.12/.2

地形地名

大字	小字
佳例川	貸原
〃	池段
〃	池ノ貸
〃	板権山
〃	市ノ瀬
〃	市ノ瀬下
〃	岩穴
〃	岩戸
〃	大入足跡
〃	大野迫
〃	小川内
〃	小川内前
〃	鳥迫
〃	川窪
〃	川路山
〃	久保野
〃	小坂元
〃	小平
〃	坂ノ上
〃	下久保野
〃	十文字迫
〃	新鍋
〃	瀬戸口
〃	底仕
〃	長谷
〃	中原
〃	西迫
〃	野谷
〃	野谷原
〃	野谷ノ下
〃	八窪
〃	東平
〃	広谷
〃	前ノ谷
〃	前原
〃	三種ケ迫
〃	肉原
〃	山下ノ上
〃	吉原

大字	小字
福沢	池ノ上
〃	池ノ迫
〃	池ノ谷
〃	池ノ段
〃	後迫
〃	大川内段
〃	大川内ノ上
〃	大入足
〃	川路原段
〃	川路原
〃	最谷
〃	高尾
〃	竜ノ上
〃	竜ノ平
〃	中敷段
〃	中谷
〃	中段
〃	中鶴
〃	鍋ケ迫
〃	鍋山
〃	新原谷
〃	新原段
〃	二折谷
〃	八谷
〃	東谷
〃	平野
〃	平野谷
〃	前谷
〃	前段
〃	水溜段

大字	小字
福地	枝谷
〃	上窪
〃	上鍋山谷
〃	上西迫
〃	北吹段
〃	北三角段
〃	窪地下
〃	窪ノ口
〃	小谷
〃	下鍋山谷
〃	中鍋山谷
〃	西ノ迫
〃	前段
福山	猪久保
〃	池平都
〃	池坪
〃	磯脇
〃	宇都
〃	宇都口
〃	大川内
〃	大坪平
〃	大平
〃	大水溜
〃	大渕
〃	海岸
〃	海添
〃	川路
〃	久保下
〃	桑水流
〃	小河原
〃	坂ノ口
〃	猿ハミ
〃	角ノ谷
〃	瀬戸
〃	瀬戸口
〃	瀬戸口
〃	中敷
〃	中ノ段
〃	中ノ平
〃	野平
〃	前ノ段
〃	前平
〃	丸鳥頭
〃	木屋敷
〃	木屋敷
〃	屋根添

116

目印植物

大字	小字	大字	小字
佳例川	赤松	福地	一本松
〃	赤松段	〃	上猿字治
〃	板権山	〃	上松窪
〃	一本松	〃	上持手木
〃	イラケ谷	〃	上湯ノ谷
〃	イラノ谷	〃	桑ケ谷
〃	横田	〃	桑別府
〃	猪木田	〃	堺松
〃	梶原	〃	下杉瀬
〃	熊松	〃	下松窪
〃	栗脇	〃	下持手木
〃	桑ケ迫	〃	杉谷
〃	雑山	〃	杉瀬
〃	境ノ尾	〃	竹山ノ上
〃	境松	〃	植木平
〃	境山	〃	中松窪
〃	桜ケ宇都	〃	中持手木
〃	高松ケ尾	〃	猿字治
〃	武脇	〃	松山
〃	栗窪	〃	松山跡
〃	神之迫	〃	松山薬
〃	松ケ野	〃	松山ノ上
福沢	石ノ下	福山	猪久保
〃	石ノ前	〃	一本松
〃	雑谷	〃	芋山
〃	一本松	〃	植木平
〃	楠木迫	〃	枯松ケ谷
〃	大杉谷	〃	楠平
〃	楠木迫口	〃	熊ノ谷
〃	楠木平	〃	桑水流
〃	桜木段	〃	蔵薄田
〃	桜木山	〃	竹下
〃	姫松	〃	竹山段
〃	松崎	〃	竹瀬
〃	松山口	〃	中柏木
〃	真手ケ山谷	〃	並木薬
〃	猿ノ上	〃	檜木
〃	吉野	〃	豹ケ下
〃	蕨窪久保	〃	松木山
〃	ニガキ	〃	松原坂
		〃	待手木
		〃	柳ノ元
		〃	楡木
		〃	楡木田
		〃	楡木平

85

信仰地名

大字	小字	大字	小字
佳例川	天ケ谷	福山	石仏段
〃	大人足跡	〃	大塚谷
〃	御建場	〃	大塚前
〃	供養元	〃	芝
〃	権現ケ尾	〃	笠ノ頭
〃	栗窪	〃	隈防段
〃	錦福	〃	大王坂
〃	大王ノ上	〃	宝瀬谷
〃	大王ノ前	〃	宝瀬口
〃	塚ケ坪	〃	塚田
〃	寺屋敷	〃	寺屋敷
〃	堂ケ尾	〃	寺山
〃	堂田	〃	天神平
〃	堂前原	〃	堂ノ前
〃	堂前田	〃	花窪原
〃	中羽山	〃	宝瀬段
〃	萩塚	〃	宮下
〃	羽山迫	〃	宮田
〃	次米田	福沢	大馬
〃	貴津具田	〃	中馬立
〃	墓塚		
〃	宮ケ野		
〃	宮ケ野谷		
〃	宮田		
〃	宮ノ迫		
〃	宮ノ谷		
〃	山神段		
福沢	下り山		
〃	銚魚		
〃	銚魚口		
〃	八月隅		
〃	花窪原		
〃	山神段		
福地	下牧神		
〃	隈防平		
〃	銚魚		
〃	灰塚		
〃	牧神		

59

2

16

田畑地名

大字	小字
佳例川	池田
〃	池田前
〃	牛田
〃	銀田
〃	小田
〃	小田前
〃	柿木田
〃	北田
〃	作平
〃	精田
〃	精山
〃	芹牟田
〃	次米田
〃	比前田
〃	貴津真田
〃	前田
〃	宮田
〃	和田
〃	和田前
〃	鈴子田
福沢	国路段
〃	国師畑
〃	田尻
〃	仁田内
〃	畑迫
福山	石原田
〃	江尻田
〃	榎田
〃	大田
〃	摩田
〃	迫田
〃	真瀬田
〃	白田
〃	田方
〃	田尻
〃	田ノ尻
〃	田ノ平
〃	田ノ平
〃	塚田
〃	野田
〃	平田
〃	前田
〃	宮田
〃	牟田尻

44

開発地名

大字	小字
佳例川	上村
〃	瓶松
〃	郷土段
〃	込ノ段
〃	込山
〃	新村
〃	中馬段
〃	中段
〃	横瀬段
〃	古前
〃	堀之元
福沢	有村
〃	新堀
〃	長割
〃	二別府上
〃	東新堀
〃	堀添
〃	堀ノ内
〃	堀ノ頭？
〃	堀ノ尻？
福地	後新堀
〃	桑別府
〃	新堀平
〃	新堀向
〃	新道
〃	西前段
〃	西村
〃	東前段
〃	東村
〃	北浦
〃	前新瀬
〃	南吹段
福山	樽木段
〃	上別府
〃	上町
〃	竹山段
〃	中ノ段
〃	前ノ段
〃	南園
〃	並木添

40

意味不明

大字	小字
佳例川	曽薙野
〃	黒岩
〃	黒黒
〃	釣瓶
〃	東郷
〃	永礁
〃	野付
〃	野滝代
福沢	大黒
〃	金礁段
〃	クルス谷
〃	サリゴ
〃	サリゴ谷
〃	曙津蔵
〃	曽原頭
〃	曽原谷
〃	曽原段
〃	七折
〃	鳥瀬
福地	上猫宇治
〃	上持手木
〃	下持手木
〃	中持手木
〃	防戸ノ上
〃	防戸ノ口
〃	防戸ノ下
福山	池坪
〃	石飛
〃	イツク島
〃	大分野
〃	カラミ
〃	クチワ
〃	勢遠
〃	猫内
〃	遠崎
〃	遠崎平
〃	本笠
〃	椅手木
〃	屋鳴

39

民俗地名

大字	小字
佳例川	天ケ谷
〃	大人足跡
〃	御建場
〃	供養元
〃	権現ケ尾
〃	薬籠
〃	銭瓶
〃	大王ノ上
〃	大王ノ前
〃	羽山浪
〃	次米田
〃	貴津真田
〃	山神段
福沢	銭亀
〃	銭亀口
〃	花瀬原
〃	山神段
福地	下牧神
〃	銭亀
〃	灰塚
〃	牧神
福山	石仏段
〃	茳
〃	笠ノ頭
〃	鐘肪段
〃	大王坂
〃	宝瀬谷
〃	宝瀬口
〃	天神平
〃	花瀬原
〃	宝瀬段
〃	弓場山

32

産業地名

大字	小字
佳例川	小豆ケ野
〃	鳥間伏
〃	鳥間伏頭
〃	四角目
〃	砂段
〃	牧野
〃	牧野後
〃	牧野前
〃	豆前
福沢	洗出
〃	鳥木屋岡
〃	鳥木屋久保
〃	鳥木屋段
〃	釜ケ鶴
〃	倉ケ尾
〃	四角目
〃	鹿角
〃	鳥羊ケ谷
〃	鷹取
福地	鳥屋段
〃	倉ケ尾
〃	豆渕
〃	南牛牧
福山	羊山
〃	上ノ茶屋
〃	桶ノ下
〃	加治屋坂
〃	釜ケ鶴
〃	木場平
〃	山薛
〃	船木
〃	二間瀬平
〃	二間瀬
福沢	砂取

33

位置地名

大字	小字
佳例川	男鹿山
〃	黒岩
福沢	外戸口
〃	砂段
〃	砂走頭
〃	砂走段
〃	松山口
〃	湯ノ谷
福地	湯ノ上
〃	上横ノ口
〃	下横ノ口
〃	谷ノ口
〃	戸ノ口
〃	西三角
〃	横ノ口
〃	湯ノ谷
福山	荒平口
〃	石ケ峯
〃	踊石
〃	谷ノ口
〃	中嶺
〃	山下
〃	山ノ口
〃	山ノ口

24

歴史地名

大字	小字
佳例川	仮屋
〃	仮屋追
〃	狐塚
福沢	国路段
〃	国師畑
福地	倉敷野
〃	小陣
〃	免谷
福山	大塚谷
〃	大塚前
〃	御前水
〃	草ケ尾
〃	国師
〃	世免
〃	湯免
〃	池陣平
〃	中町
〃	麗
〃	本屋敷
〃	本屋敷
〃	山田屋敷

21

交通地名

大字	小字
佳例川	石坂
〃	新道
〃	馬渡
〃	道ケ迫
〃	渡り
福沢	街道筋
〃	外戸口
〃	出道
〃	三俣
〃	渡り
福地	黒田渡
〃	下杉渡
〃	中渡
〃	中渡平
〃	何中渡
〃	古中渡
福山	黒木越
〃	竹渡
〃	渡
〃	渡屋

20

水利地名

大字	小字
佳例川	池段
〃	池ノ後
〃	井手山
〃	大井手
〃	中水流
〃	樋ノ口
福地	井川下
〃	上井手
〃	下井手
〃	貫ノ口
福山	井手谷
〃	菁平
〃	曽原頭
〃	出水

14

城塞集落

大字	小字
佳例川	城ケ尾
〃	仲城
福沢	上城ケ尾
〃	城ケ尾
福地	城ケ尾
福山	片城
〃	旧城山
〃	小城平
〃	城ケ尾
〃	城平
〃	高原陣
〃	古城

12

人名地名

大字	小字
佳例川	池田
〃	池田前
〃	立元
〃	立山
〃	立本下
福沢	上三郎山
〃	下三郎山
〃	源兵エ坂段

8

門地名

大字	小字
佳例川	大屋敷
福沢	門道段
福山	市屋敷

3

浸食地名

大字	小字
佳例川	辰伴
福沢	竜ノ上
〃	竜ノ平
福山	猿ハミ

4

擬音地名

大字	小字
佳例川	鼎木

1

大字	気象地名		大字	瑞祥地名
	なし			なし

（郡名）

牧・荘地名集計表　13./12/2

1		鹿児島市	21
2		阿久根市	4
3		出水市	4
4		指宿市	6
5		大口市	2
6		加世田市	9
7		鹿屋市	65
8		串木野市	2
9		国分市	5
10		川内市	7
11		垂水市	18
12		西之表市	26
13		枕崎市	1
14	姶良郡	姶良町	8
15	姶良郡	加治木町	4
16	姶良郡	蒲生町	6
17	姶良郡	霧島町	1
18	姶良郡	栗野町	5
19	姶良郡	隼人町	5
20	姶良郡	福山町	9
21	姶良郡	牧園町	9
22	姶良郡	溝辺町	1
23	姶良郡	横川町	2
24	姶良郡	吉松町	1
25	伊佐郡	菱刈町	1
26	出水郡	高尾野町	0
27	出水郡	野田町	0
28	出水郡	長島町	1
29	出水郡	東町	1
30	指宿郡	頴娃町	12
31	指宿郡	開聞町	4
32	指宿郡	喜入町	6
33	指宿郡	山川町	1
34	鹿児島郡	桜島町	0
35	鹿児島郡	十島村	1
36	鹿児島郡	三島村	0
37	鹿児島郡	吉田町	2
38	川辺郡	大浦町	0
39	川辺郡	笠沙町	2
40	川辺郡	川辺町	15
41	川辺郡	知覧町	29
42	川辺郡	坊津町	1
43	肝属郡	吾平町	4
44	肝属郡	内之浦町	5
45	肝属郡	大根占町	9
46	肝属郡	串良町	17
47	肝属郡	高山町	38
48	肝属郡	佐多町	8
49	肝属郡	田代町	11
50	肝属郡	根占町	27
51	肝属郡	東串良町	6
52	熊毛郡	上屋久町	11
53	熊毛郡	屋久町	-
54	熊毛郡	中種子町	42
55	熊毛郡	南種子町	15
56	薩摩郡	入来町	1
57	薩摩郡	薩摩町	0
58	薩摩郡	祁答院町	1
59	薩摩郡	鶴田町	0
60	薩摩郡	東郷町	5
61	薩摩郡	樋脇町	0
62	薩摩郡	宮之城町	1
63	薩摩郡	里村	1
64	薩摩郡	上甑村	0
65	薩摩郡	下甑村	4
66	薩摩郡	鹿島村	0
67	曽於郡	有明町	15
68	曽於郡	大崎町	16
69	曽於郡	大隅町	37
70	曽於郡	財部北町	12
71	曽於郡	志布志町	14
72	曽於郡	末吉町	45
73	曽於郡	財部町	3
74	曽於郡	松山町	3
75	日置郡	伊集院町	2
76	日置郡	市来町	1
77	日置郡	金峰町	0
78	日置郡	郡山町	3
79	日置郡	東市来町	15
80	日置郡	日吉町	4
81	日置郡	吹上町	9
82	日置郡	松元町	0
	合計		682

（ソート）

牧・荘地名集計表　13./12/2

53	熊毛郡	屋久町	-
7		鹿屋市	65
72	曽於郡	末吉町	45
54	熊毛郡	中種子町	42
47	肝属郡	高山町	38
69	曽於郡	大隅町	37
41	川辺郡	知覧町	29
50	肝属郡	根占町	27
12		西之表市	26
1		鹿児島市	21
11		垂水市	18
46	肝属郡	串良町	17
68	曽於郡	大崎町	16
40	川辺郡	川辺町	15
55	熊毛郡	南種子町	15
67	曽於郡	有明町	15
79	日置郡	東市来町	15
71	曽於郡	志布志町	14
30	指宿郡	頴娃町	12
70	曽於郡	財部北町	12
49	肝属郡	田代町	11
52	熊毛郡	上屋久町	11
6		加世田市	9
20	姶良郡	福山町	9
21	姶良郡	牧園町	9
45	肝属郡	大根占町	9
81	日置郡	吹上町	9
14	姶良郡	姶良町	8
48	肝属郡	佐多町	8
10		川内市	7
4		指宿市	6
16	姶良郡	蒲生町	6
32	指宿郡	喜入町	6
51	肝属郡	東串良町	6
9		国分市	5
18	姶良郡	栗野町	5
19	姶良郡	隼人町	5
44	肝属郡	内之浦町	5
60	薩摩郡	東郷町	5
2		阿久根市	4
3		出水市	4
15	姶良郡	加治木町	4
31	指宿郡	開聞町	4
43	肝属郡	吾平町	4
65	薩摩郡	下甑村	4
80	日置郡	日吉町	4
73	曽於郡	財部町	3
74	曽於郡	松山町	3
78	日置郡	郡山町	3
5		大口市	2
8		串木野市	2
23	姶良郡	横川町	2
37	鹿児島郡	吉田町	2
39	川辺郡	笠沙町	2
75	日置郡	伊集院町	2
13		枕崎市	1
17	姶良郡	霧島町	1
22	姶良郡	溝辺町	1
24	姶良郡	吉松町	1
25	伊佐郡	菱刈町	1
28	出水郡	長島町	1
29	出水郡	東町	1
33	指宿郡	山川町	1
35	鹿児島郡	十島村	1
42	川辺郡	坊津町	1
56	薩摩郡	入来町	1
58	薩摩郡	祁答院町	1
62	薩摩郡	宮之城町	1
63	薩摩郡	里村	1
76	日置郡	市来町	1
26	出水郡	高尾野町	0
27	出水郡	野田町	0
34	鹿児島郡	桜島町	0
36	鹿児島郡	三島村	0
38	川辺郡	大浦町	0
57	薩摩郡	薩摩町	0
59	薩摩郡	鶴田町	0
61	薩摩郡	樋脇町	0
64	薩摩郡	上甑村	0
66	薩摩郡	鹿島村	0
77	日置郡	金峰町	0
82	日置郡	松元町	0
	合計		682

5

	A	B	C	D	E
1	牧・荘地名				
2	郡名	市町村名	大字	小字	
3		大口市	青木	片牧	
4		大口市	白木	牧ケ迫	
5	伊佐郡	菱刈町	田中	宮牧	
6	姶良郡	姶良町	平松	小牧	
7	〃	姶良町	平松	小牧	
8	〃	姶良町	北山	中牧	
9	〃	姶良町	北山	馬場牧	
10	〃	姶良町	北山	牧	
11	〃	姶良町	北山	牧大浪	
12	〃	姶良町	下名	下牛牧	
13	〃	姶良町	寺師	牧口	
14	〃	栗野町	権現崎	牧野	
15	〃	栗野町	中田	牧神	
16	〃	栗野町	木場	牧後	
17	〃	栗野町	木場	牧野	
18	〃	栗野町	木場	牧ノ内	
19	〃	牧園町	三体堂	上牧原	
20	〃	牧園町	三体堂	牧原	
21	〃	牧園町	下中津川	先右牧	
22	〃	牧園町	下中津川	右牧	
23	〃	牧園町	宿窪田	下牧	
24	〃	牧園町	宿窪田	牧神園	
25	〃	牧園町	宿窪田	牧園	
26	〃	牧園町	宿窪田	牧山	
27	〃	牧園町	万膳	牧原	
28	〃	霧島町	永水	牧内迫	
29	〃	横川町	中ノ	牧崎	
30	〃	横川町	中ノ	牧原	
31	〃	溝辺町	麓	牧	
32	〃	吉松町	鶴丸	牧迫	
33	〃	蒲生町	久末	牧迫	
34	〃	蒲生町	米丸	牧宮田	
35	〃	蒲生町	米丸	牧神山	
36	〃	蒲生町	久末	高牧	
37	〃	蒲生町	米丸	牧竹下	
38	〃	蒲生町	津	牧	
39	〃	加治木町	西別府	牛牧	
40	〃	加治木町	西別府	牧内	
41	〃	加治木町	辺川	牧内谷	
42	〃	加治木町	小山田	牧口	
43	〃	隼人町	小浜	小牧	
44	〃	隼人町	小浜	本小牧	
45	〃	隼人町	嘉例川	小牧屋	
46	〃	隼人町	松永	牧ケ宇都	
47	〃	隼人町	松永	牧ケ平	
48	〃	福山町	佐俣川	牧野	
49	〃	福山町	佐俣川	牧野後	
50	〃	福山町	佐俣川	牧野前	
51	〃	福山町	福沢	荒之元	
52	〃	福山町	福地	牛牧	
53	〃	福山町	福地	下牧神	
54	〃	福山町	福地	牧神	
55	〃	福山町	福地	南牛牧	
56	〃	福山町	福山	荒	
57		国分市	重久	牧神	
58		国分市	郡田	八牧原	
59		国分市	敷根	下小牧	
60		国分市	敷根	上小牧	
61		国分市	上之段	牧内	
62					
63	曽於郡	有明町	伊崎田	大牧	
64	〃	有明町	伊崎田	下牧	
65	〃	有明町	伊崎田	後牧	
66	〃	有明町	伊崎田	牧	
67	〃	有明町	伊崎田	牧	
68	〃	有明町	伊崎田	牧原	
69	〃	有明町	伊崎田	牧之口	
70	〃	有明町	蓬原	牧	
71	〃	有明町	蓬原	牧ノ上	
72	〃	有明町	野神	牧原	
73	〃	有明町	野神	中牧	
74	〃	有明町	野神	伏牧	
75	〃	有明町	野神	高牧	
76	〃	有明町	原田	牧	
77	〃	有明町	山重	高牧	
78	〃	大崎町	神領	小牧	
79	〃	大崎町	井俣	牛牧	
80	〃	大崎町	井俣	小牧	
81	〃	大崎町	井俣	鞠田牧	
82	〃	大崎町	井俣	上牧	
83	〃	大崎町	井俣	中牧	
84	〃	大崎町	井俣	下牧	
85	〃	大崎町	永吉	牧山	
86	〃	大崎町	永吉	牧ノ上	
87	〃	大崎町	永吉	牧谷	
88	〃	大崎町	永吉	小牧	
89	〃	大崎町	神雷	外牧	
90	〃	大崎町	神雷	牧	
91	〃	大崎町	野方	内ノ牧	
92	〃	大崎町	野方	牧	
93	〃	大崎町	假宿	五郎城牧	
94	〃	大隅町	岩川	牧谷	
95	〃	大隅町	岩川	牧	
96	〃	大隅町	岩川	別底牧	
97	〃	大隅町	中之内	荒ノ浪	
98	〃	大隅町	中之内	手牧ノ窪	
99	〃	大隅町	中之内	荒浦	
100	〃	大隅町	中之内	荒後	

6

	A	B	C	D	E
101	〃	大隅町	中之内	荒ノ段	
102	〃	大隅町	中之内	荒ノ元	
103	〃	大隅町	中之内	荒前	
104	〃	大隅町	中之内	牧神追	
105	〃	大隅町	中之内	牧神殿	
106	〃	大隅町	中之内	牧神殿追	
107	〃	大隅町	中之内	牧神追口	
108	〃	大隅町	中之内	荒原	
109	〃	大隅町	中之内	牧之谷	
110	〃	大隅町	中之内	牧	
111	〃	大隅町	中之内	牧内	
112	〃	大隅町	月野	牧元	
113	〃	大隅町	月野	恋網牧	
114	〃	大隅町	月野	新牧	
115	〃	大隅町	月野	牧原坂	
116	〃	大隅町	月野	牧原	
117	〃	大隅町	月野	上牧原	
118	〃	大隅町	月野	下牧原	
119	〃	大隅町	月野	牧ノ山	
120	〃	大隅町	月野	上牧山	
121	〃	大隅町	月野	牧ノ口	
122	〃	大隅町	月野	下牧	
123	〃	大隅町	月野	上牧	
124	〃	大隅町	月野	牛牧	
125	〃	大隅町	月野	下牧	
126	〃	大隅町	月野	牧内	
127	〃	大隅町	月野	牧ノ上谷	
128	〃	大隅町	幅吉	牧	
129	〃	大隅町	幅吉	小牧	
130	〃	大隅町	大谷	新牧	
131	〃	恵布恵町	恵布恵	北牧	
132	〃	恵布恵町	恵布恵	牧	
133	〃	恵布恵町	恵布恵	南牧	
134	〃	恵布恵町	帖	上牧	
135	〃	恵布恵町	帖	下牧	
136	〃	恵布恵町	帖	木牧	
137	〃	恵布恵町	帖	牧ノ内	
138	〃	恵布恵町	帖	牧川平	
139	〃	恵布恵町	安楽	牧	
140	〃	恵布恵町	安楽	高牧	
141	〃	恵布恵町	安楽	小牧	
142	〃	恵布恵町	田之浦	小牧	
143	〃	恵布恵町	田之浦	牧原	
144	〃	恵布恵町	田之浦	牧野	
145	〃	財部町	南俣	井牧ノ平	
146	〃	財部町	北俣	小牧	
147	〃	財部町	下財部	小牧	
148	〃	松山町	新橋	小牧	
149	〃	松山町	新橋	牧之殿	
150	〃	松山町	新橋	牧之原	
151	〃	輝北町	上百引	内牧	
152	〃	輝北町	上百引	牧ノ殿	
153	〃	輝北町	上百引	小牧	
154	〃	輝北町	上百引	小牧ホキ平	
155	〃	輝北町	上百引	牧山下	
156	〃	輝北町	平房	牧ノ迫	
157	〃	輝北町	平房	牧ノ下	
158	〃	輝北町	平房	牧	
159	〃	輝北町	平房	東牧迫	
160	〃	輝北町	平房	西牧ノ浪	
161	〃	輝北町	市成	中牧	
162	〃	輝北町	岡防原	牧	
163	〃	末吉町	二之方	小牧谷	
164	〃	末吉町	二之方	小牧谷段	
165	〃	末吉町	二之方	牧ノ向	
166	〃	末吉町	二之方	小牧谷頂	
167	〃	末吉町	南之郷	牧ノ尾下	
168	〃	末吉町	南之郷	牧	
169	〃	末吉町	南之郷	後牧	
170	〃	末吉町	岩崎	牧崎	
171	〃	末吉町	岩崎	牧内	
172	〃	末吉町	岩崎	小牧	
173	〃	末吉町	岩崎	牧ノ内ノ下	
174	〃	末吉町	岩崎	牧原前	
175	〃	末吉町	岩崎	五牧ケ谷	
176	〃	末吉町	岩崎	新牧ノ谷	
177	〃	末吉町	岩崎	目倉牧	
178	〃	末吉町	岩崎	西之牧	
179	〃	末吉町	岩崎	牧内	
180	〃	末吉町	岩崎	小牧ノ殿	
181	〃	末吉町	岩崎	中牧ノ谷	
182	〃	末吉町	岩崎	中ノ牧	
183	〃	末吉町	岩崎	中牧谷ノ原	
184	〃	末吉町	岩崎	中牧谷頂	
185	〃	末吉町	岩崎	牧境	
186	〃	末吉町	岩崎	仮牧	
187	〃	末吉町	岩崎	丑牧ノホキ	
188	〃	末吉町	諏訪方	牧口	
189	〃	末吉町	諏訪方	牧ケ入佐	
190	〃	末吉町	諏訪方	牧原	
191	〃	末吉町	諏訪方	牧	
192	〃	末吉町	諏訪方	上牧	
193	〃	末吉町	諏訪方	高牧	
194	〃	末吉町	諏訪方	牧原ノ下	
195	〃	末吉町	深川	荒牧	
196	〃	末吉町	深川	牧之谷	
197	〃	末吉町	深川	牧原	
198	〃	末吉町	深川	西牧原	
199	〃	末吉町	深川	牧殿	
200	〃	末吉町	深川	中牛牧	
201	〃	末吉町	深川	牛牧下	

	A	B	C	D	E
202	〃	末吉町	深川	牛牧	
203	〃	末吉町	深川	上牛牧	
204	〃	末吉町	深川	牛牧入口	
205	〃	末吉町	深川	牧内	
206	〃	末吉町	深川	仮り牧	
207	〃	末吉町	深川	牧野山	
208					
209	肝付郡	喜平町	鷹	広牧	
210	〃	喜平町	鷹	久保田牧	
211	〃	喜平町	鷹	大牧野	
212	〃	喜平町	鷹	牧	
213	〃	大根占町	馬場	牧	
214	〃	大根占町	城元	仮屋牧	
215	〃	大根占町	城元	牧	
216	〃	大根占町	神川	下牧	
217	〃	大根占町	神川	下大牧	
218	〃	大根占町	神川	下小牧	
219	〃	大根占町	神川	上小牧	
220	〃	大根占町	神川	大牧	
221	〃	大根占町	神川	牧屋	
222	〃	串良町	上小原	牧神下	
223	〃	串良町	上小原	牧中	
224	〃	串良町	上小原	上小牧	
225	〃	串良町	上小原	小牧東	
226	〃	串良町	上小原	中崎牧	
227	〃	串良町	上小原	西牧	
228	〃	串良町	細崎	牧之内	
229	〃	串良町	有量	牧屋	
230	〃	串良町	有量	西北原牧	
231	〃	串良町	有量	東北原牧	
232	〃	串良町	有量	大牧	
233	〃	串良町	有量	牧内	
234	〃	串良町	細山田	小牧	
235	〃	串良町	細山田	牧屋	
236	〃	串良町	細山田	牧山道	
237	〃	串良町	細山田	鳥牧	
238	〃	串良町	細山田	牧山	
239	〃	佐多町	伊座敷	牧神	
240	〃	佐多町	馬籠	牧之道	
241	〃	佐多町	馬籠	牛牧	
242	〃	佐多町	馬籠	牧平	
243	〃	佐多町	辺塚	牧之口	
244	〃	佐多町	辺塚	高牧瀬戸	
245	〃	佐多町	辺塚	高牧	
246	〃	佐多町	辺塚	牛之牧	
247	〃	田代町	鷺	牧屋川原	
248	〃	田代町	鷺	牧折小野原	
249	〃	田代町	鷺	内之牧	
250	〃	田代町	川原	小牧ノ下	
251	〃	田代町	川原	小牧	
252	〃	田代町	川原	牛牧坂ノ上	
253	〃	田代町	川原	牧之馬	
254	〃	田代町	川原	小牧坂	
255	〃	田代町	川原	牧ノ原	
256	〃	田代町	川原	中牧ノ瀬	
257	〃	田代町	川原	牛牧	
258	〃	根占町	川北	牧屋崩穴	
259	〃	根占町	川北	牧屋崎	
260	〃	根占町	川北	牧屋	
261	〃	根占町	川北	牧屋宇都	
262	〃	根占町	川北	牧御道	
263	〃	根占町	川北	東牧御道	
264	〃	根占町	川南	牧	
265	〃	根占町	川南	下牛牧	
266	〃	根占町	川南	牛牧	
267	〃	根占町	山本	南高牧	
268	〃	根占町	山本	小牧	
269	〃	根占町	山本	小牧平	
270	〃	根占町	山本	牛牧崎	
271	〃	根占町	山本	小牧坂之上	
272	〃	根占町	辺田	芒ノ下	
273	〃	根占町	辺田	芒	
274	〃	根占町	辺田	芒宇都	
275	〃	根占町	辺田	上牧	
276	〃	根占町	辺田	下牧	
277	〃	根占町	辺田	牧之口	
278	〃	根占町	辺田	小牧	
279	〃	根占町	辺田	本牧	
280	〃	根占町	別府1	西牧	
281	〃	根占町	別府1	東牧	
282	〃	根占町	別府1	小牧ケ尾	
283	〃	根占町	別府2	牧之平	
284	〃	根占町	別府2	牧口迫	
285	〃	東串良町	池弘	牧之内	
286	〃	東串良町	池之原	牧之園	
287	〃	東串良町	新川西	新牧後	
288	〃	東串良町	新川西	小牧	
289	〃	東串良町	新川西	牧下	
290	〃	東串良町	新川西	牧内	
291	〃	内ノ浦町	北方	牧神平	
292	〃	内ノ浦町	北方	牧	
293	〃	内ノ浦町	岸良	牧ノ原	
294	〃	内ノ浦町	岸良	小牧	
295	〃	内ノ浦町	岸良	牧	
296	〃	高山町	波見	牧ノ尾	
297	〃	高山町	波見	牧ノ内	
298	〃	高山町	新富	上牧	
299	〃	高山町	新富	北上牧	
300	〃	高山町	新富	小牧	
301	〃	高山町	新富	高崎寺牧	
302	〃	高山町	新富	小牧	

	A	B	C	D	E
303	〃	高山町	新富	長熊廻牧	
304	〃	高山町	新富	中牧	
305	〃	高山町	新富	中牧	
306	〃	高山町	新富	煙牟田牧	
307	〃	高山町	新富	牧原	
308	〃	高山町	前田	下中牧	
309	〃	高山町	前田	中牧	
310	〃	高山町	前田	牧元	
311	〃	高山町	後田	増幅牧	
312	〃	高山町	後田	後牧	
313	〃	高山町	後田	大牧	
314	〃	高山町	後田	大牧	
315	〃	高山町	後田	上牧	
316	〃	高山町	後田	後見崎牧	
317	〃	高山町	後田	小牧	
318	〃	高山町	後田	下牧	
319	〃	高山町	後田	中牧	
320	〃	高山町	後田	永野牧	
321	〃	高山町	後田	中牧	
322	〃	高山町	後田	西原上牧	
323	〃	高山町	後田	西原下牧	
324	〃	高山町	後田	東牧	
325	〃	高山町	後田	丸田牧	
326	〃	高山町	後田	牧園	
327	〃	高山町	後田	牧ノ迺	
328	〃	高山町	富山	今市牧	
329	〃	高山町	富山	上牧	
330	〃	高山町	富山	下牧	
331	〃	高山町	富山	下上牧	
332	〃	高山町	富山	中牧	
333	〃	高山町	富山	牧川	
334		鹿屋市	高牧町	内牧	
335		鹿屋市	高牧町	堰木牧	
336		鹿屋市	大浦町	牧鼻	
337		鹿屋市	大浦町	牧神塊	
338		鹿屋市	大浦町	牛牧	
339		鹿屋市	鯛之原町	下牧	
340		鹿屋市	鯛之原町	西牧	
341		鹿屋市	新生町	牧	
342		鹿屋市	寿町	曽田牧	
343		鹿屋市	上祓川町	牧ノ下	
344		鹿屋市	祓川町	牧久保	
345		鹿屋市	祓川町	鍋ノ内牧	
346		鹿屋市	祓川町	牧野	
347		鹿屋市	祓川町	瀬戸口牧	
348		鹿屋市	祓川町	大久保牧	
349		鹿屋市	祓川町	牧久保	
350		鹿屋市	下祓川町	小牧	
351		鹿屋市	下祓川町	小牧段	
352		鹿屋市	西祓川町	下牧	
353		鹿屋市	田崎町	内牧	
354		鹿屋市	川西町	中牧	
355		鹿屋市	川西町	上牧	
356		鹿屋市	川西町	牛舞牧	
357		鹿屋市	川西町	牧堰	
358		鹿屋市	川東町	牧園	
359		鹿屋市	川東町	次郎熊牧	
360		鹿屋市	川東町	牧迫	
361		鹿屋市	永野田町	下牧	
362		鹿屋市	永野田町	中牧	
363		鹿屋市	永野田町	上牧	
364		鹿屋市	永野田町	小牧	
365		鹿屋市	名貫町	上牧端	
366		鹿屋市	飯隈町	牧迫ノ上	
367		鹿屋市	池園町	大牧	
368		鹿屋市	池園町	小牧	
369		鹿屋市	笠原町	貫防牧	
370		鹿屋市	南町	牧ノ田	
371		鹿屋市	南町	小牧	
372		鹿屋市	南町	牧ノ原	
373		鹿屋市	南町	小牧	
374		鹿屋市	南町	中牧	
375		鹿屋市	堀山町	南牧	
376		鹿屋市	大姶良町	アザミ牧	
377		鹿屋市	大姶良町	下牧	
378		鹿屋市	大姶良町	牧	
379		鹿屋市	野里町	外増牧迫	
380		鹿屋市	野里町	外増牧	
381		鹿屋市	野里町	東牧	
382		鹿屋市	野里町	東溝井牧	
383		鹿屋市	野里町	溝井牧	
384		鹿屋市	上野町	中牧	
385		鹿屋市	上野町	新牧平	
386		鹿屋市	上野町	上新牧	
387		鹿屋市	上野町	新牧	
388		鹿屋市	白水	牧内	
389		鹿屋市	古江町	上牧原	
390		鹿屋市	古江町	中牧原	
391		鹿屋市	古江町	下牧原	
392		鹿屋市	古江町	木牧	
393		鹿屋市	上高隈町	牛牧	
394		鹿屋市	下高隈町	新牧	
395		鹿屋市	下高隈町	大牧	
396		鹿屋市	下高隈町	小牧	
397		鹿屋市	下高隈町	木場田上牧	
398		鹿屋市	下高隈町	牧原	
399		曽於市	新城	牧形	
400		曽於市	新城	牧迫	
401		曽於市	新城	牧屋	
402		曽於市	新城	上牧原	
403		曽於市	新城	東小牧	

	A	B	C	D	E
404		垂水市	新城	南小牧	
405		垂水市	新城	小牧	
406		垂水市	新城	下小牧	
407		垂水市	新城	西小牧	
408		垂水市	本城	牧川原	
409		垂水市	本城	牧	
410		垂水市	本城	牧之宇都	
411		垂水市	高城	小牧	
412		垂水市	高城	牧瀬戸ノ上	
413		垂水市	市来	小牧	
414		垂水市	海潟地区	牛牧	
415		垂水市	二川	牧	
416		垂水市	牛根境	牧	
417	鹿児島郡	桜島町	0	0	
418		三島村	0	0	
419	〃	吉田町	本城	牧ノ谷	
420	〃	吉田町	富之浦	牧ノ口	
421	〃	十島村	口之島	牧内	
422	日置郡	松元町	0	0	
423	〃	金峰町	0	0	
424	〃	吹上町	中之島	芒ノ園	
425	〃	吹上町	中之島	芒原	
426	〃	吹上町	中之島	芒ノ原	
427	〃	吹上町	湯之浦	小牧田	
428	〃	吹上町	湯之浦	小牧	
429	〃	吹上町	和田	芒口	
430	〃	吹上町	和田	芒元	
431	〃	吹上町	和田	芒原	
432	〃	吹上町	和田	牧ノ原	
433	〃	日吉町	日置	牧神平	
434	〃	日吉町	日置	牧神園	
435	〃	日吉町	日置	牧内原	
436	〃	日吉町	日置	牧内	
437	〃	鄙山町	有量田	下牧原	
438	〃	鄙山町	有量田	上牧原	
439	〃	鄙山町	旭須木	牧ノ口	
440	〃	市来町	川上	永牧	
441	〃	伊集院町	妻生田	下牧原	
442	〃	伊集院町	妻生田	上牧原	
443	〃	東市来町	養母	荻牧ノ尾	
444	〃	東市来町	養母	荻牧ノ尻	
445	〃	東市来町	湯田	西丸牧	
446	〃	東市来町	湯田	上西丸牧	
447	〃	東市来町	湯田	中丸牧	
448	〃	東市来町	湯田	中丸牧上	
449	〃	東市来町	湯田	丸牧大堰	
450	〃	東市来町	湯田	丸牧大堰上	
451	〃	東市来町	湯田	下丸牧	
452	〃	東市来町	湯田	東丸牧	
453	〃	東市来町	湯田	上元芒	
454	〃	東市来町	湯田	元芒	
455	〃	東市来町	湯田	永牧	
456	〃	東市来町	湯田	芒之元	
457	〃	東市来町	伊作田	牧之口	
458					
459	川辺郡	大浦町	0	0	
460	〃	笠沙町	片浦	芒ノ元	
461	〃	笠沙町	片浦	牧内	
462	〃	坊津町	久志	中牧	
463	〃	川辺町	中山田	牧之田山	
464	〃	川辺町	上山田	下牧ノ田	
465	〃	川辺町	上山田	上牧ノ田	
466	〃	川辺町	本別府	外之牧	
467	〃	川辺町	本別府	西外之牧	
468	〃	川辺町	本別府	東外之牧	
469	〃	川辺町	本別府	牧堰	
470	〃	川辺町	高田	下牧田畑	
471	〃	川辺町	高田	牧田山	
472	〃	川辺町	高田	牧角	
473	〃	川辺町	高田	外ノ牧	
474	〃	川辺町	高田	内ノ牧	
475	〃	川辺町	高田	東内ノ牧	
476	〃	川辺町	高田	東外ノ牧	
477	〃	川辺町	宮	牧之園	
478	〃	知覧町	西元	青木ケ迫	
479	〃	知覧町	西元	芒新田	
480	〃	知覧町	西元	芒新田	
481	〃	知覧町	西元	芒新田ノ上	
482	〃	知覧町	郡	小牧小野	
483	〃	知覧町	東別府	新牧園	
484	〃	知覧町	東別府	鷺屋平牧	
485	〃	知覧町	塩屋	東牧内	
486	〃	知覧町	塩屋	牧内	
487	〃	知覧町	西元	牧内	
488	〃	知覧町	西元	牧内下	
489	〃	知覧町	西元	牧内ノ園	
490	〃	知覧町	塩屋	牧内東	
491	〃	知覧町	瀬世	牧口	
492	〃	知覧町	瀬世	牧口原	
493	〃	知覧町	東別府	牧添	
494	〃	知覧町	東別府	牧添上	
495	〃	知覧町	東別府	牧高山	
496	〃	知覧町	瀬世	牧園	
497	〃	知覧町	郡	牧野	
498	〃	知覧町	東別府	牧ノ下	
499	〃	知覧町	郡	牧野畑	
500	〃	知覧町	郡	牧野原	
501	〃	知覧町	郡	牧野原道	
502	〃	知覧町	郡	牧野比良	
503	〃	知覧町	東別府	牧ノ向	
504	〃	知覧町	塩屋	牧堰	

	A	B	C	D	E
505	〃	知覧町	塩屋	牧場ノ上	
506	〃	知覧町	塩屋	牧原之園	
507		加世田市	川畑	牛牧道	
508		加世田市	川畑	牛牧平	
509		加世田市	川畑	牛牧尻	
510		加世田市	川畑	牛牧	
511		加世田市	川畑	牛牧内	
512		加世田市	川畑	上牛牧	
513		加世田市	川畑	中牛牧	
514		加世田市	宮原	北牧ノ原	
515		加世田市	宮原	南牧ノ原	
516		枕崎市	西鹿籠	牧園	
517					
518	指宿郡	開聞町	十町	芒口	
519	〃	開聞町	十町	芒口後	
520		開聞町	十町	芒口前	
521		開聞町	十町	下芒口	
522		喜入町	生見	上牧	
523		喜入町	前之浜	旧牧	
524		喜入町	生見	小牧	
525		喜入町	生見	牧	
526		喜入町	中名	牧園	
527		喜入町	生見	牧山	
528		頴娃町	御領	牛牧	
529		頴娃町	牧ノ内	内牧ノ西	
530		頴娃町	牧ノ内	内牧ノ平	
531		頴娃町	上別府	上平牧	
532		頴娃町	上別府	北平牧	
533		頴娃町	上別府	下平牧	
534		頴娃町	郡	下牧	
535		頴娃町	上別府	平牧	
536		頴娃町	上別府	平牧内	
537		頴娃町	郡	東牧	
538		頴娃町	郡	牧	
539		頴娃町	別府	牧内	
540		頴娃町	上別府	六斗牧久保	
541		山川町	利永	上牧	
542		指宿市	東方	牧ケ平	
543		指宿市	東方	牧ノ迫下	
544		指宿市	東方	西牧ケ平	
545		指宿市	東方	牧ケ水クレ	
546		指宿市	池田	牧道	
547		指宿市	池田	牛牧	
548					
549	薩摩郡	薩摩町	0	0	
550	〃	鶴田町	0	0	
551	〃	樋脇町	0	0	
552	〃	鹿島村	0	0	
553	〃	上甑村	0	0	
554	〃	下甑村	手打	花瀬牧口	
555	〃	下甑村	手打	牧神	
556	〃	下甑村	長浜	上牧野	
557	〃	下甑村	長浜	下牧野	
558	〃	里村	里	牧神ノ前	
559	〃	宮之城町	久富木	牧ノ峯	
560	〃	入来町	浦之名	牧内殿	
561	〃	祁答院町	鳥木	小牧	
562	〃	東郷町	藤川区	下牧野	
563	〃	東郷町	藤川区	上牧野	
564	〃	東郷町	南瀬区	小牧原	
565	〃	東郷町	南瀬区	小牧田	
566	〃	東郷町	南瀬区	山計牧	
567	出水郡	野田町	0	0	
568	〃	高尾野町	0	0	
569	〃	長島町	平原	芒平	
570	〃	東町	鷹巣	芒平	
571		出水市	武本	西牧野	
572		出水市	武本	牧野下	
573		出水市	武本	牧野小畑	
574		出水市	武本	牧野	
575		阿久根市	赤瀬川地区	牧ノ堂	
576		阿久根市	赤瀬川地区	牧ノ内	
577		阿久根市	多田地区	西牧内	
578		阿久根市	多田地区	東牧内	
579		阿久根市	鶴嶺	牧ノ口	
580		阿久根市	上名	牧門	
581		川内市	寄之浦	牧田	
582		川内市	網津	牧口	
583		川内市	中郷	牧ノ内	
584		川内市	山田	高牧	
585		川内市	山田	牧堰	
586		川内市	寄田	芒平	
587		川内市	寄田	芒元	
588					
589		鹿児島市	喜之原	牧ノ口	
590		鹿児島市	喜之原	下牧ノ口	
591		鹿児島市	川上	牧口	
592		鹿児島市	川上	牧ノ口	
593		鹿児島市	吉野	牧之平	
594		鹿児島市	吉野	牛牧	
595		鹿児島市	吉野	上新牧	
596		鹿児島市	吉野	下新牧	
597		鹿児島市	小野	牧ノ口東	
598		鹿児島市	小野	牧ノ口中	
599		鹿児島市	小野	牧ノ口西	
600		鹿児島市	小山田	牧ケ谷	
601		鹿児島市	小山田	牧ケ谷中	
602		鹿児島市	小山田	牧ケ谷下	
603		鹿児島市	田上	小牧	
604		鹿児島市	田上	大牧	
605		鹿児島市	西別府	大牧口	

	A	B	C	D	E
606		鹿児島市	西別府	南牧口	
607		鹿児島市	西別府	大牧園	
608		鹿児島市	鴨池	牧外	
609		鹿児島市	山田	牧田宇都	
610					
611		西之表市	西之表	野部牧	
612		西之表市	西之表	牧山	
613		西之表市	西之表	上小牧	
614		西之表市	西之表	小牧	
615		西之表市	西之表	下小牧	
616		西之表市	西之表	小牧野	
617		西之表市	西之表	下小牧野	
618		西之表市	西之表	西小牧野	
619		西之表市	西之表	南牧	
620		西之表市	西之表	古牧	
621		西之表市	伊関	牧山	
622		西之表市	宮納	牧ノ口	
623		西之表市	宮納	上牧ノ口	
624		西之表市	宮納	牧ノ平	
625		西之表市	宮納	北牧ノ平	
626		西之表市	現和	八重牧	
627		西之表市	現和	鯛取牧	
628		西之表市	現和	東牧田代	
629		西之表市	宮城	牧野	
630		西之表市	宮城	牧口	
631		西之表市	宮城	内牧	
632		西之表市	宮城	牧門	
633		西之表市	住吉	下牧内	
634		西之表市	住吉	上牧内	
635		西之表市	住吉	下塩屋牧	
636		西之表市	住吉	小牧山	
637		中種子町	牧川	下牧川	
638		中種子町	納官	牧ノ峯	
639		中種子町	納官	西牧口	
640		中種子町	納官	東牧口	
641		中種子町	増田	上ノ牧	
642		中種子町	増田	下ノ牧	
643		中種子町	増田	東鯛牧	
644		中種子町	増田	西鯛牧	
645		中種子町	増田	牧迫	
646		中種子町	増田	小牧	
647		中種子町	増田	牧ノ口	
648		中種子町	野間	牧之口	
649		中種子町	野間	牧内	
650		中種子町	野間	内牧	
651		中種子町	野間	上牧内	
652		中種子町	野間	小牧	
653		中種子町	野間	小牧の平	
654		中種子町	野間	高牧	
655		中種子町	野間	小牧山	
656		中種子町	野間	内小牧	
657		中種子町	野間	中ノ牧	
658		中種子町	野間	宮井牧	
659		中種子町	野間	内牧	
660		中種子町	野間	八工牧田ノ平	
661		中種子町	野間	西牧堰	
662		中種子町	野間	東牧堰	
663		中種子町	野間	牧ノ口	
664		中種子町	野間	荒牧	
665		中種子町	野間	牧松	
666		中種子町	野間	中之牧	
667		中種子町	野間	牧ノ下	
668		中種子町	坡久	小牧	
669		中種子町	坡久	牧外	
670		中種子町	坡久	五浜工牧	
671		中種子町	田島	西中ノ牧	
672		中種子町	田島	北中ノ牧	
673		中種子町	田島	東中ノ牧	
674		中種子町	田島	東牧ノ峯	
675		中種子町	田島	西牧峯	
676		中種子町	田島	南中ノ牧	
677		中種子町	坂井	小牧	
678		中種子町	坂井	小牧野	
679		南種子町	平山	八重牧田	
680		南種子町	平山	牧田	
681		南種子町	茎永	牧内	
682		南種子町	中之下	上牧	
683		南種子町	中之下	牧田	
684		南種子町	西之	牧内	
685		南種子町	西之	新牧	
686		南種子町	西之	牧口	
687		南種子町	島間	内ノ小牧	
688		南種子町	島間	外ノ小牧	
689		南種子町	島間	島間小牧	
690		南種子町	島間	小牧角	
691		南種子町	中之上	牧ノ峯	
692		南種子町	中之上	小牧	
693		南種子町	中之上	鯛ノ牧	
694		上屋久町	楠川	牧野西道	
695		上屋久町	楠川	牧野本道	
696		上屋久町	楠川	牧野ノ上	
697		上屋久町	楠川	牧野	
698		上屋久町	楠川	下牧野	
699		上屋久町	楠川	小牧野	
700		上屋久町	楠川	小牧野東	
701		上屋久町	宮之浦	牧山	
702		上屋久町	宮之浦	免牧山	
703		上屋久町	口永良部	中牧	
704		上屋久町	口永良部	中牧ノ上	

平成13年　歴史探訪（佳例川・比曽木野編）前田義人著より抜すい。

3、地名考

佳例川・比曽木野には、藩政時代の狩猟や稲作に関する字名や俗称が多い。
字名は、一般的にひとまとまりの田畑や山を区画する呼び方として、租税徴収を目的とした検地によって確定された言葉である。

小字の集合により大字となり、大字の集合により村や町が生まれる分けだが、「佳例川」はその例に逆行し小字が後から付けられている。

字名はその名称を通して、地域の歴史的展開や開発の経過をも探る事が出来る。歴史探訪の観点から、特色と思える地名や俗称を照会する。

1.「佳例川」

和名抄十巻本に「葛例」の文字が残るが、「嘉例」の当て字であろう。和銅年間（708～714）に、都の中央集権より全国各地に「所名制定」の令が２度に亘り出されるが、中国大陸の１文字の地名との混雑を防ぐため、2文字以上の地名となる。

何処の地域も、良い言葉やめでたい文字を使用する傾向となり、「嘉例」もその類である。古語辞典に「嘉例」「佳例」は、（めでたい例・良い試し）とあり、謡の「鶴亀」の段にも用語として使われている。

その後、「川」の文字が加わるが、稲作文化や生活へ恵をもたらす幾線もの小川の存在を尊ぎ「佳例川」と呼称する様になったと想像する。

隼人町にも「嘉例川」の地名があるが、全国的にも特有な同じ地名を付けた地区も多く、当時の都の役人にもそれを取りまとめる権力や方法も無く、「所名制定」は自在に行われたはずである。同名の地区は歴史性や地勢・地形ともに類似性も多い。

2.「比曽木野」

「比曽木野地区」は住居表示上、今でも大字「佳例川」に属している。
藩政時代以前、今の「佳例川」とは落人集落としての風土や連続する地勢・人的交流などから特別に区分する必要も無く、現在でも両地域の境界線を探すことは困難なことである。

永き代、「佳例川」の一部として経過してきたが、島津氏の開墾開田政策による八公二民（他藩は四公六民）の租税制度の煩雑や、福山牧の点在・門割・庄屋制度の複雑化のため、広い「佳例川」を便宜上区分したことにより、名付けられた地名と想像する。

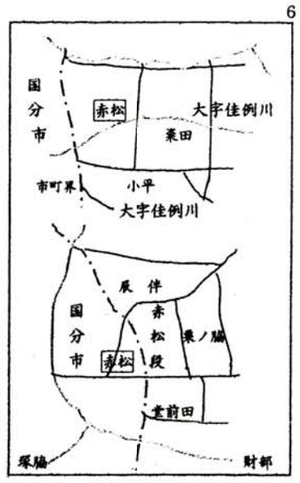
「比曽木野」の地名を通称「そっの」と呼称するが、文字に直すと「退野」と書ける。「退」は（そき）と呼び、古語辞典によると（遠く離れること・その所・はて）とある。また「比」は（他の事物に例え比べて、思う心を読んだもの）とあり、広い大字「佳例川」を分別した為の地名と推測する。

また、比曽木野中村地区に「曽木」と言う家名があるが、地名との関係の手掛りは掴めない。

「記紀」に登場する「古代隼人族」を俗称「熊襲（熊曾・熊曽）」とも言い、霧島の山を８世紀の頃まで「曾の峰」とも言った。高千穂峰や隼人国分寺の神話・古代の舞台との距離や山間の地形から「曾・曽」との関わりも考えられる。

3.字「赤松・赤松段」

字「赤松」は比曽木野の大屋数集落の西側と、国分市塚脇地区の北側にある。また、塚脇の「赤松」と挟し佳例川側に字「赤松段」がある。「あかまつ」は雌松で多の松類に比べ、灯火に適した樹木である。古来、油を採取する松であり、根部も「ツガ松」と称し、灯火材として貴重視されていた。字「赤松」は、薩摩藩の油山であり、城山（ろうやま）や狩倉山などとともに、藩の山見回り役の管理した所と思える。
一説に、夜に赤松の松明を灯し、狩りをした場所とか、猟の帰りに暗くなり松明を灯した所とも言われるが、ともかく「火」との関わり合いには共通する。



4.「荒磯」

「荒磯」とは俗称であり、字「尾間伏頭」を中心とした急坡の地である。一帯を「荒磯岳」と呼び、佳例川と比曽木野に跨る標高539mの高山である。

「荒磯岳」は別名「殿丘（とのおか）」とも称し、藩政時代領主の狩場であったと言われる。荒磯岳の北部に字「永磯」と言う地名もあるが、海と関連ある「磯」の文字が、なぜ山間の地にあるのか疑問視される。

全国に「牟礼」と称する地名も多いが、「牟礼」とは、（小高い山の連なり）の語句と言われる。「牟礼」と同様、字「尾間伏頭」周辺の険しい山々の連なりを、荒波に見立て「荒磯・永磯」と称したのかも知れない。また当て字だとしたら、「比曽木野」の地名のごとく、より山間の所と言う意味から「荒い退・荒い曾（あらいそ）」「永い退・長い曾（ながいそ）」と呼称したのかも知れない。荒磯岳周辺は明治の世、西南戦争の戦いの場ともなる。明治10年7月14～15日、官軍が砲台を設置し、今の財部町「陣ガ丘」に対峙する薩軍に砲弾を雨霰と降らせた場所である。



この戦いで官軍の使用した砲弾は180発と言われる。おりしも佳例川の士女が比曽木野への嫁入りの日と同時し、行列を官軍が「野谷」まで追い駆けた逸話も残る。

5. 字「井手山」

通称（いでんやま）と称し、比曽木野の大屋数集落の東北部に位置する。
藩政時代の狩猟の場と言われ、（射手山）の当て字で弓・鉄砲を持った射手が陣取った所と残る。字「井手山」と連続して南の方へ、字「込山」、字「込山段」と続くが、字「込山」も（鉄砲に弾を込めた所・獲物を追い込んだ所）とも言われる。

前述の如く、比曽木野・佳例川の地は薩摩藩の御狩場（おかりば）としての色合いの濃い地域であるが、寒冷な湧水から産出する良米の水田地帯として、田を荒らす獣から水田を守る為、保護を加えた地域であり、併せて、武術の錬成を行った所と言われる。

島津藩は、武家諸法度による参勤交代や幕府への拠出費の増大により、財政窮乏を補う為、田畑の拡大に力を注いでいるが、比曽木野や佳例川は稲作に適した谷間の地である為、注目した地域のひとつであろう。



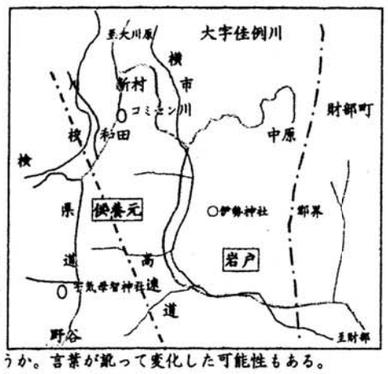
6.「岩戸」・字「供養元」

荒磯岳の北部「岩戸集落」は、横市川に沿い約20戸ほどが点在する。字「岩戸」の名もあり、谷合の中腹には旧村社「伊勢神社」が鎮座する。

比曽木野の歴史上、最も早く開けた地区であり、平安初期の島津荘園との関り合いが強い。

谷間の周囲はシラスの高い崖で囲まれ、侵蝕によると思われる洞穴も目に触れる。

「岩戸」の地名は、神秘的雰囲気の漂う地形や地勢のあり様から生まれたと思われるが、「記紀」の「岩戸神話」との関係は薄い。幾筋もの渓谷を発する高台に字「供養元」があるが、この地名も（侵蝕によるシラス崖の崩れる元）と言う意味から、元々は「崩え（くえ）の元」では無かろうか。言葉が訛って変化した可能性もある。



また、宇気母智神社の鎮座する西側一帯の高台を地元民は「重盛丘」とも言う。「平重盛公」を哀願し、公を祭神とする「小松神社」まで創建した先人達は、この高台を「平重盛公」の陵墓、または「神奈備（神の降臨場所）」と夢想し祭拝（供養）した場所とも思える。

十文字丘周辺に藩の馬場が存在したとも想像され、佳例川の「羽山神社」と同様に「宇気母智神社」創建に至り、字「供養元」の名が生まれたとも想像出来る。一帯は東回り自動車道の整備や県道拡張工事に伴う遺跡群の発掘研究が進められている。古代から中世に亘る祭祀や墓墳などの形跡が確認出来れば、字名の由来に繋がるであろう。

7.字「尾間伏」

字「尾間伏（おまぶし）」は（おまぶせ）とも称し、荒磯岳の北東部に位置し岩戸集落へ傾斜している（「荒磯」P6の地図参照）。「尾間伏」は（御射伏）の当て字と思われる。射伏（まぶし）は（猟師が身を隠すもの・待ち伏せ）の意味であり、追手（せこ）が追詰めた獲物を弓や鉄砲で射た場所である。（御）は殿様の美称であろう。

「荒磯岳」は藩政時代より島津領地であり、領主の狩り場として普段は禁猟区とされた山である。現在でも北側斜面は国有地として残る。山の頂上付近を字「尾間伏頭」と言い、狩猟にとっては絶好の見張り場でもある。曽於郡大隅町坂元にも字「尾間伏」があり、福沢の川路原には同種の意味を持つと思われる字「小伏」がある。

大隅の台地から肝属の高隈山一帯は、獣の害から水田を守りつつ、領主の為に得物の繁殖をも維持させた特異な地域である。

8.字「掛葉ケ野」

比曽木野の野谷集落西部と、佳例川の牧野集落西部に字「掛葉ケ野」がある。
ともに荒磯岳の裾野に位置し、藩政時代の狩猟と関りの深い地名である。

「掛葉ケ野」は落士達が狩の折、休息をした見晴らしの良い場所であり、小高い丘陵地である。道中服の羽織を脱ぎ、葉の付いた木の枝に掛けたことから生まれた地名と言われる。

羽織を掛けたことから「掛羽ケ野」とも書ける。羽織は袖なしの衣服で、着脱が容易な為、（打掛）とも言う。



9.字「仮屋」

佳例川の飯富神社付近に字「仮屋」がある。当地は宝永２年（1705）に高岡街道（日州街道）が開通するまでの間、「日州通道（佳例川筋・島例筋）」と呼ばれた郡伝路の要地で、一帯を通称「宮田仮屋」とも言う。

「日州通道」は国分から島津庄（都城）に通ずる郡伝路の中でも、最短距離の陸路筋で、都城側で呼称されている古道「寺柱街道」が、この道の延長であったと推測する。

文治元年（1185）、源頼朝は諸国に地頭の設置を求め「仮屋」を置いた。領地の管理・年貢・兵糧米の徴収・治安維持などを司る地方行政府であり、後の世に「地頭仮屋」と呼ぶようになった。福山町では江戸時代に現在の福山小学校の用地に置かれる。

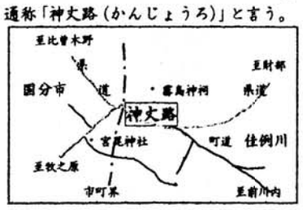
佳例川の「仮屋」は、番所（主張所）と想像出来る。字「仮屋」は、地域性から主要筋の中継・休息地でもあったと思われ、建物の跡地や引水路などの箇所も確認出来る。

近くに薬師堂跡や伝染病患者の隔離場所跡、無縁墓なども存在し、簡単な事務の他、武士や旅病人などの休憩・療養を兼ねた所と想像する。近郊では大隅町恒吉（島津氏の直轄地）と福山の中間付近、大隅町坂元の南側谷間に「御仮屋」の跡が見られる。佳例川の「御仮屋」は16世紀には廃止されたと見る。



10.「神丈路」

国分市塚脇から佳例川の内場地区に入る所を、通称「神丈路（かんじょうろ）」と言う。付近の字名は「堂前田」であり、隣接して、字「堂田原」、国分市側に字「堂田」がある。「丈」の語源に、（恐れ多き物の後につける言葉・賢き物の後に付ける語句）とあり、「神丈路」の「丈」の文字を除くと「神路」となる。この「丈」の文字や近郊の字名などから「神丈路」の由来は複数考えられる。



近くに、塚脇の鎮守「宮昆神社」が創建されている。この神社は元暦元年（1184）に、平氏朝臣「熊谷但馬守宗直」が奥州より虚空蔵菩薩を護持し勧請した寺である。廃仏毀釈回避のため明治初期に神号に改めたそうであるが、一帯の字名の「堂」が「宮昆神社」であるとすれば、この時期、一帯を「神丈路」と呼ぶようになった可能性もある。

また、民家の裏山に富島神宮の分霊を戴き奉った祠（ほこら）がある。旧官幣大社の御祭神を奉戴する為、神領する道の分岐路付近を「神丈路」と称したのかも知れない。

落政時代の猟場との関連も考えられる。「神丈路」の「神」が「領主」だとすると、荒磯岳の佳例川口と比曽木野口の分岐路に当たり、当地を「神丈路（お上の通り道）」と言ったのかもしれない。

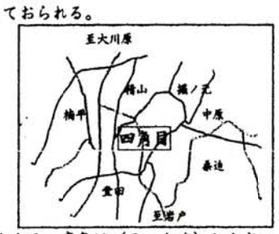
現在の県道「塚脇・財部線」は、近世の幕造である。以前の道は上ノ段・塚脇から内場へ抜け、字「一本松」から六村集落・前川内集落や飯富神社の鎮座する谷間に下っていた。この道中の神社は不思議なことに、ご祭神が系列化されている。上ノ段の「飯富神社」は「猿田彦命」を、塚脇の「宮昆神社」は猿田彦命の妻「天鈿女命」、佳例川の「飯富神社」は両神を奉っている。道すがらの「神丈路」との関係はないものか?

11.字「四角目」

比曽木野新村集落の県道から岩戸集落に下る町道を挟み、字「四角目（しかくめ）」がある。「四角目」の語源については、大隅史談会発行「大隅」第41号（H.10）に大隅町文化財保護審議会会長の中島勇三氏が説述しておられる。

「四角目」は「鹿込」の当て字であり、藩が定めた保護林で鹿倉山（または狩倉山）のこととある。昔の南九州は鹿（しか）の数が多く、狩猟の格好の獲物でもあった。

鹿倉山は領主しか猟の出来ない場所で、平常は禁猟区とし獲物を保護繁殖させた所である。



字「四角目」は町内福沢の川路原にもあり、隣接して字「鹿角（かのつの）」や字「鹿取」もある。鹿角は（ろっかく）とも言い、鹿柴（ろくさい）・鹿垣（しかがき）・逆茂木（さかもぎ）と同句で、田畑へ侵入する獣を防ぐ為、柴の付いた木の枝を鋭利に切り、山に向けた防護柵を意味する。また、鹿取は鹿狩りの鹿を繁殖させる為に、藩が指定保護した山である。字「四角目」は、近郷の大隅町中ノ内や輝北町上百引にもあり、当時大隅台地の獲物の多さが窺い知れる。

12.字「薬田」

（しとぎでん又はしとぎた）と読む。比曽木野の和田集落より、林道「郷戸口線」を国分市側に下った谷間に字「薬田」がある。（字.赤松・赤松段の地図P.6参照）

（しとぎ）とは、米の粉で作ったモチの名で、直径3～5ｃｍ程の白く丸い形をしたモチで、神前へのお供えに使われる。「薬田」は、比曽木野の「小松神社」の祭礼に供する米を生む御神田のあった所と想像される。

近年、「しとぎ」をお供えする習俗は薄れつつあるが、佳例川の割子田・池田集落の数軒の家庭で、毎年12月の氏神祭の折、赤飯の上に乗せてお供えされる。

鎌倉初期の「宇治拾遺」に、（この女の薬欲しかりければ…）とあり、全国的に共通したお供え物であった。

赤飯の上の薬
（割子田の小原良幸宅氏神祭）

13.「柴立（柴建）」

宝永２年（1705）、今の牧之原から割子田地区を経て柴立に通ずる「高岡街道」が開通する。「柴立」は郡城への本筋から財部郷への分岐路に位置し、落政時代ことに栄えた地区である。街道筋には享保17年（1732）に「羽山神社」も建立され、春の「はやま祭」は近在近郊よりの参拝者で異常な賑わいを呈したと言われる。現在も５月３日に祭が開催される。（柴）は、真榊や陽榊（サカシバ）のことであり、立てる場所が「羽山神社」であったと思える。

「羽山神社」の境内地付近は元々、馬場が設置されていたらしく、その由来から今でも馬頭観音としての神格を保っている。

今の下牧ノ原の街道筋には、「花建原」の字名も存在し、堂の立地（現在の愛宕神社か?）があったことも想像出来る。

財部筋側には「馬立」の地名もある。全国的に街道筋に（立・建）の文字が付く所も多く、馬場の存在や陸路の要衝の地としての共通点があるような気がする。



14.「千段の坂」

旧高岡街道は「割子田」から「柴立」へ通じていたが、この区間は急坂迂路の難所とされ、通称「千段の坂（せんだんのさか）」と呼ばれた。赤土土壌の路は水分を含み滑りやすい為、階段状に造られていたと言う。

その段状の多さから付けられた坂道の名称であろう。現在「割子田」の登口付近は農地造成の為、寸断されている。坂の周囲には、大きな墓石や塔が点在している。

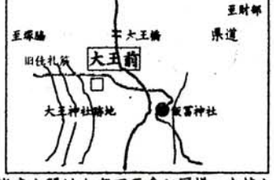


15.字「大王前」

字「大王前」は、鎮守「飯富神社」の北東部にある。昔、「大王神社」の鎮座した付近であり、六村集落と牧野集落の間の谷間に位置する。

「大王神社」の創建は不明であるが、延宝３年（1675）の「飯富神社」社殿再興の棟札に「大王」の名が残る。延宝３年は徳川３代「家光」の時代であり、幕藩体制が整いつつある頃であった。

「大王」の名の由来は、大隅八幡の「弥五郎どん」、日置八幡の「でおどん」などの巨人伝説から生じたものと思える。福山の小野に「大王神社」と名の良く似た「太玉神社」が鎮座するが、御祭神は布刀玉命（ふとだまのみこと）である。



大隅八幡の「弥五郎どん」とは「竹内宿禰（野見宿禰命）」をモデルにしていると言われ、相撲の神様である。布刀玉命を祖先とし、天の岩戸神話で岩扉を開けた布刀玉命と同様、力持ちのイメージがある。天の岩戸での神事との関りや、占いから生じたと言われる「相撲」との関係から、吉兆占いと祭りを目的とした信仰が根源にあるのでは無かろうか。

昭和の中期、大王前付近一帯の水田が区画整理された折、古い墓跡や墓石が大量に確認され、現位置に埋め戻されたそうである。字「大王前」で大昔より人間の営みがあったのは紛れ無き事実である。下牧之原にも「大人足跡」の字名が残る。

16.「六村」

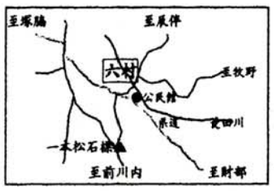
県道塚脇・財部線沿いに「六村（もむら）集落」がある。戸数20数戸で県道と笹田川沿いに点在する。字「一本松」の分岐路に建つ明治39年の石碑に「六村谷方限御中」の文字が刻まれており、県道開通までは字「一本松」が六村集落の入口であったことが伺い知れる。

落政時代の門割（屋敷）制度により、「北田門」「穂満門」「飯山門」「市吉門」「銭瓶門」、「樺元」もしくは「藤山門」の６門に区分され、現在の「六村」の名が生まれた。

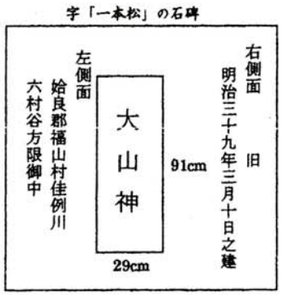
一つの門（屋敷）は5～6戸で形成され、米高30石以上を「門」とし、以下を「屋敷」と呼んだ。

門割制度は貢租の関係から制定され、佳例川の庄屋（東野家）の始務地となり、各門に「名主（名頭）（みょうず）」と言う長が置かれ、その下に「名子（なご）」が置かれた。

「六村」は笹田川の上流部の谷間に集落が形成され、「迫（さこ）」や「瀬（せ）」などの谷間を表現する地名や俗称が多く目に付く。



字「一本松」の石碑



17.「門前口」

前川内公民館付近を通称「門前口」と言う。地元では江戸時代の学校（寺小屋）が近くの山中にあり、その寺の入口に当ることから「門前口」と呼んだと言う。記録では、前川内の上鍋に「観音堂」があったとされ、お堂が子供達の勉強の場として活用されていたことが想像出来る。「観音堂」には定住する僧侶がいたはずも無く、大番（うばん）と言われる集落の禅宗門徒頭か番役の古老、もしくは集落の有識者、巡回の僧が定期的に教示したものと思える。

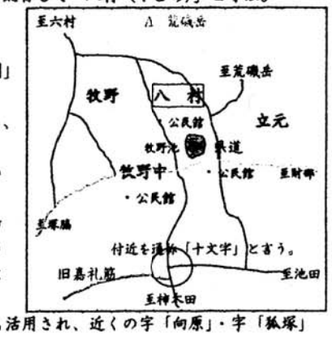
薩摩藩の教育は古くから儒教思想を根底としており、集落の子供達も薩摩二才（にせ）としての質実剛健な教育を受けたはずである。立元集落では、孝子「立元の善太郎」が私塾を開いている。

18.「八村」

現在の立元集落・牧野集落・牧野中集落を総称して「八村（やむら）」と呼ぶ。

「六村」と同様、落政時代の門割制度から生じた地名である。「有村門」「仮屋門」「立元門」「大王門」「牧野門」「宮路門」「出水門」井料門」の八つの門から成る。

旧嘉礼筋を宮田仮屋より登った所に位置し、財部町馬立にぬける道中にある。「八村」は荒磯岳の裾野にあり、昔は原野が広がっていた。「立元（立本）」の（元・本）の文字は、（根・根元・つけね）の意味を持ち、狩猟場としての荒磯岳の入口を示した語句で、（立）は、領主の御建場の（建）と同句の文字ではなかろうか。「牧野」は（牧場の原野）であろう。原野は馬牧の他、茅の採取地としても活用され、近くの字「向原」・字「狐塚」の地名などからも当時の荒野の様子が窺い知れる。



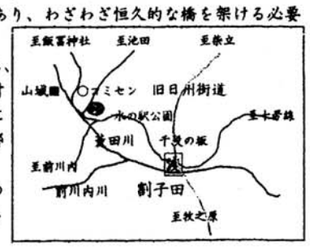
19.字「渡」

通称（わたい）と呼称するが、（竹の渡り）とも言う。江戸時代中期より旧日州街道は、多くの通行人や荷馬車・馬子で賑わいを呈する。牧之原から坂道を降り下った谷間に笹田川が流れ、一服の休憩地となる。

川は比較的浅く、川幅もさほどでも無い為、馬は川を渡り人は仮設的な竹の橋を渡った。人馬にとって笹田川は親水的な場所でもあり、わざわざ恒久的な橋を架ける必要も無かった。

上流約300m程で笹田川と前川内川が合流し、接して島津の山城が築かれていた。字「渡」付近は谷間が狭小である為、軍事的にも非常時に堰を架ける事により、山城の麓を一時的な水郷（堀）とすることも可能であったとされる。

「渡」の地名は各地に存在するが、佳例川の字「渡」は、人が単に川や溝を超える交通路を



意味する名称のみならず、島津氏の戦略的な目的を担った場所でもあった。

佳例川の山城は、豊臣秀吉の薩摩進入や明治の「西南の役」の戦いに使用されているが、「渡」を締切り水防とした記録は残らない。

20.字「割子田」

大隅町文化財保護審議会会長の中島勇三氏は、「割子田」の地名は水田の水利権から生じた言葉と熱説される。水利権の争いを避けることが禄を安定させ、一族を守る一番の術だからである。

一族の水田は定まった水利からしか引かず、開田する時もシラス崖や山に穴（ぬき）を掘ってでも争いを避けたのであろう。当地の水田は昔より大隅坂元村と境を接し、耕作者の身分も混在している。水利権が西村や身分の政治的争いにもならないように配慮したものとも想像出来る。隣接して字「岩穴（いわな）」の地名も残る。財部町大川原や熊本県菊地郡にも字「割子田」の地名が存在する。

溝辺町の竹子（たかぜ）地区には、「段溝（だんみぞ）」と言う遺構が残る。1660 年前後に、薩摩郡永野村段部落から竹子まで引水した「溝」や「ぬき」の跡で、平成３年に溝辺町文化財に指定された。明治初期まで使用されたが、水利権から西村の政治的問題に発展し、いつしか廃絶した。字「割子田」も、これら「溝」・「ぬき」・「溜め池」などの存在を総称して起こった地名であろう。

佳例川・比曽木野には、狩猟に関する字が多く目に付くが、他にも「田」「山」「谷」「迫」「段」「野」「原」など地域の環境や地理条件に適合した名称も多い。また「城」「塚」「堂」などの歴史性を含んだ字や地名も多く実在する。その幾つかを地元の呼び名と合わせて紹介する。

「田」 … 小田・前田・牛田・芹牟田・神木田（かっのっだ）・油田・榎田・宮田・精田・北田など

「山」 … 境山・男鹿山・神山・川路山（かっじゃま）・込山・井手山・羽山・精山・立山（たっちゃま）など

「谷」 … 天ケ谷・野谷・長谷・イラケ谷・広谷・宮ノ谷・前ノ谷・東部谷（つべんたん）など

「迫」 … 犬ノ迫・宮ノ迫・通ケ迫・羽山迫・尾迫・橋迫・十文字迫・西迫など

「段」 … 中尾段・橋場段・中段・山神段・赤松段・郷戸段（ごとんだん）・池段など

「野」 … 三種ケ野・小豆ケ野・野明・牧野・久保野・松ケ野・宮ケ野など

「原」 … 向原（むこばい）・梶原（かっぱら）・吉原・前原・中原（なかばい）・後原など

「城」 … 仲城（ちゅじろ）・城ケ尾・城ノ鼻（ぞのはな）

「塚」 … 屋塚・萩塚・狐塚・塚ケ野・二子塚（ふたごっか）

「堂」 … 堂田・堂前田（どぜんだ）・堂田原（どたがはい）・堂ケ尾・仏具田（ぶっぐでん）

また、「マンダグラ」「ミノ」「コシンマッ」「ドンドン」「イッスン」など、鹿児島弁訛りの口伝で残り、漢字に記すことの出来ない地名も多い。

4、史跡

1.神社・寺

佳例川・比曽木野の史跡として神社が多く残る。江戸時代から定着したと思える多種な民間信仰が今の世も脈々と生き続けている地域でもある。その基となった寺社が当時数多く建立されていたと言う。

残念ながら、寺や堂は廃仏毀釈の影響からか全て消滅し、記録としてしか残らない。現今に残る神社や寺・堂の資料を中心に紹介する。

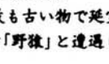
1.鎮守　飯富神社（いいとみじんじゃ）

佳例川地区の総鎮守「飯富神社」は、後一条天皇の御世長元６年（1033）の創建とされ、藤原氏から平氏への移行期にあたる。「猿田彦命（サルタヒコノミコト）」を主神とし、相神に「天鈿女命（アメノウズメノミコト）」を奉る。

由緒によると、「猿田彦命」は天尊「邇々芸命（ニニギノミコト）」の高千穂の峰にご降臨の折、出迎えに出た国神（元々の地の神）で、笠沙宮への道案内も務めたと言う。

邇々芸命の笠沙宮行中の折、佳例川に一泊され、手厚くもてなした住民 30 戸に猿田彦命が、稲の種子を与えたとあり、その後、住民は猿田彦命を地域の守神として社（やしろ）を建てたとされる。

時世的には、島津荘園開発との関わりが深く、万寿３年（1026）大宰府大鑑「平　季基」が島津荘園開発に先駆け、郡域に「神柱神社」を創建するが、７年後には佳例川の地に開田の波が及び、稲作と関わりの強い猿田彦命を奉る「飯富神社」が創建されたと思える。


飯富神社

「飯富神社」と名の付く神社は、郡域周辺や霧島山系の山懐に多く、島津荘園開発との因果関係が伺われる。

境内は日光をも遮る古木で覆われ、閑静な社叢を形成する。ことに「いぬまき」「いちいがし」「いろはもみじ」は、巨大老木で町文化財に指定されている。「いぬまき」は樹齢 800 年～1,000 年の老木と推定され、全国的にも貴重な天然記念物である。

また木像の御神体 10 柱は平安時代の作とされ、猿田彦命と天鈿女命の神像は赤と白を基調とした鮮い色調が施されている。

天鈿女命は「天の岩戸神話」に登場する女神であり、やがて猿田彦命の妻となり「猿君姫」とも称され、音楽や舞にご神徳を持つ神様とされる。

江戸時代よりの棟札も数枚保存されており、最も古い物で延宝３年（1675）の年号が残り町内で最も古い木札とされる。地元では里内で「野猿」と遭遇したら吉兆の報せだとし、飯富神社に参る信仰も残る。

昔より、交通安全・厄祓・農業・勉学の神として信仰され、参拝者も多い。平成９年に 65 年ぶりに「お田植祭」が復活し、秋の「収穫祭」も田んぼを舞台とした種々のイベントが催され、大勢の老若男女が集う。

福山町小字全図

平成１３年１２月２日
鹿児島地名研究会資料　（松田誠作成）
この小字全図は以前、前田義人氏（福山町文化財保護審議会）より
拝受した複写コピー図を摩耗していたので複製したものである。

（福地）

12 八月開　83 石ノ前
14 八谷　87 街道木
15 栗谷　90 三ヨ元
17 上栗谷　91 神木口
81 大明内上　92 島小屋田

（福地）

32 栗ノ谷　41 橋ノ口
33 四郎打段　42 下橋口
34 下神平　43 上橋口
35 二神平　45 松山頭
36 宮下渡　55 上神木
37 早渡　57 上城頭
38 宮ノ口　60 宮地下
39 中浦平　78 上城ノ谷

地名研究会報

第76号

平成14年6月2日

鹿児島地名研究会

Ⅰ．第76回例会　　平成14年3月3日（日）　　於教職員互助組合会館和室

（出会者）　大田照夫・納　栄蔵・川野雄一・久米雅章・小山　更・坂本　誠・築地成郎・西田春人・繁昌正幸・肥後芳尚・肱岡修一郎・平田信芳・松田　誠・松浪由安・三善喜一朗・米原正晃　（計１６名）

Ⅱ．大日本地名辞書読会　　P.1766～P.1767　宮丸・神柱神社・末吉・財部・島津

Ⅲ．野田町の地名

〔話題となった地名および事項〕　伴掾館址・島津荘と大隅正八幡・日宋貿易と薩摩・１頃の広さ・島と方限・浜之市・唐坊・上名の小字・下名の小字・相垣・十三奉行迫・加生岡・「立」地名・上名下名の区分・前木場・特手と特牛二つの前田・石走と砂走・大人足・墨書土器・野呂川内・宇津良と宇都良アガリとサガリ・川骨・擬声語と擬態語・花立・～木野・仁田と牟田・牟礼・片見取

伴掾館址

平田　今日読んだところは、都城です。平季基が開いた荘園が島津荘のはじまりということで、梅北とか萩原とか安楽というのは伴兼貞の子孫になります。先日、清水城のことが記事になりましたが最後の方に伴掾館（ばんじょうかん）：伴掾兼行（とものじょうかねゆき）の館（やかた：たて）のことを述べておきました。薬丸自顕流総師範の方から、すぐ電話が来まして範囲についての質問でした。一緒に巡りましたが、立派な山城跡が残っています。いつか天気の良い時に、機会があったら案内します。伊邇色（いにしき）神社の裏山です。そして妙谷寺跡の裏山にもなります。見事な山城跡が残っています。

伴兼行の孫がここに出て来た伴兼貞で高山に移って肝付氏を名乗るわけです。薬丸自顕流すなわち野太刀自顕流総師範の東さんの話では、肝付氏と薬丸氏の出自は伴氏で、薬丸氏は肝付氏の家老だった、と。そして自顕流は伴兼行が元祖なんだという話です。だから自顕流の人たちは関心を持っていたのだそうです。

島津荘と大隅正八幡

久米　島津荘のところ、下の段の４行目、大隅正八幡宮と出て来ますが、ここはどういうことを書いているのですか。

平田　これ？

久米　この頃、正八幡宮を支配していたのは税所氏とか、そこら辺だと思いますが。

平田　島津荘を開発した平季基が大隅国府を焼き討ちする事件がありますね。大隅正八幡宮と争いを起こしたのは、正八幡宮が島津荘にいろんなことを要求しないように、俺達は特別な許可を得ているのだということから大隅正八幡宮の造営費用などは負担しないということを主張したのじゃないか。私はそのように理解しているのですが。

久米　島津氏は結果的に荘園侵略をやる。

平田　島津氏は島津荘の荘官だったわけで

久米　荘官ですよね。そして支配を拡げていくなかで、大隅だけでなく薩摩半島の方には忠久からずーっと時代が下りて忠良あたりの伊作島津家が南薩の地域を侵略して行きますよね。

平田　はい。

久米　その時、先生がこの前書かれた大隅正八幡宮の所に弥勒寺の話が出て来たのですが、そしてそこから磁器が出て来たという。

平田　あゝ、弥勒院の発掘の結果。

久米　あれは、ずーっと時代が下がる？

平田　下がるというより、どういうことなんですかね。平季基が島津荘から出て来て大隅国府を焼き討ちした事件の後、大隅国府は桑原郡から囎唹郡に帰って来たと私は考えます。現在の国分市府中への復帰です。その時、府中にある国府を守護するものとして東北の方に台明寺、東南の方に国分寺、西北の方に弥勒寺、そして西南の方に正国寺を配置したというのが弥勒寺の話です。

弥勒院跡を掘った時に元の飛青磁（とびせいじ）が出て来たわけで、時代はもっと下ります。

久米　元？宋の後ですね。

平田　そうです。あなたが言われたことを整理すると、島津荘の荘官であった島津氏が薩摩国に入って来るのは、頼朝の家来となって薩隅日三国の守護職を与えられて木牟礼城に代官を派遣することから始まります。島津荘と木牟礼城の間にルートがあったということを言われたのが江平望先生で、『島津忠久とその周辺』という本を書かれました。木牟礼城を支配していたのは総州家島津氏です。鹿児島に乗り込んで来るのは奥州家です。奥州家が総州家を３代で倒してしまいます。今あなたが言われた島津忠良の伊作島津氏が出て来るのは14代勝久の頃です。相当時代が違います。一つずつ整理していけばと思うのですけどね。

日宋貿易と薩摩

久米　以前、持躰松遺跡が話題になった時小園先生が10号線に近い鳩なんとかという地名があって、そこから、俊寛ですか・・・

平田　あゝ、鳩脇です。

久米　鳩脇ですか。それとのつながりは考えられないものか。そういうルートのことがずーっと気になっています。正八幡宮を中心としたルートがあったのではないか。

平田　正八幡宮はどんどん大きくなっていくわけで、どの時代の話なのかをしぼる必要がある。それと持躰松遺跡が日宋貿易の拠点になったのかどうか、ということに対してはいろいろ議論があるわけです。

久米　それにはやはりこの正八幡が。

平田　正八幡は全く関係がない。

久米　これは全く、それとは関係がない？

平田　正八幡だって、貿易にいくらか関係したとは思いますよ。

久米　そうであれば伝統的に見て、日置の地域、伊集院とか市来湊などと蒲生・郡山との官道というか、そこら辺につながって来るのではないかな、と思ったりします。それで島津荘との関連もいろいろあるのかなぁと、そんな疑問を持ったものですから。

平田　日宋貿易の時代に薩摩がどれだけ関わったかというのは、持躰松遺跡をめぐっての話でしょうけどね。大きな要素は、硫黄が日宋間の重要な商品になるので、薩摩が関与したということは間違いないと思います。

霧島が硫黄の産地であれば、大隅国府も大きな役割を示すでしょうけどね。霧島の硫黄はそんなになかったと思うのです。

交通路の問題は別に整理した方がよさそうに思うのだけど。まあ疑問が出発点ですから何なりと出して下さい。繁昌君、持躰松遺跡の話はその後どんなになってるの？

繁昌　実際に調査していないし、また中心が金峰町の方がやっていますから、県の方は全体の調査が済むまでは判らないという基本姿勢でいるのです。そこら辺で話が錯綜しています。

久米　ちょっとそれに固執して申しわけないのですけど、博多の櫛田神社は神崎荘から勧請された神社ですよね。

平田　何という神社？

久米　博多の櫛田神社です。

平田　櫛田神社？

久米　博多ドンタクの。

平田　博多ドンタクという有名な祭。

久米　はい。その櫛田神社は日宋貿易と非常に関係が深い所なんです。臨済宗をもたらした栄西も関わっています。有明海から船でくりこめる場所だというのです。（編集時後記：筑後川下流右岸にあった。時代は異なるが吉野ケ里遺跡も同じ地域になる）。そういう所と持躰松遺跡はつながっていたのじゃないか。はっきりとまだ判らないのだけど。そういう状況を踏まえた時に、ルートがそういう形で南の方の島ともつながって来る。そういう日宋貿易と薩摩も関係していたというふうに考えて来ると、南薩の市来湊とか永吉湊とか万世、そこら辺が関係して来るんじゃないかとずーっと思っているのです。それに島津荘とか正八幡がもろもろな所で結構つながっている。これはまぁ仮説、仮説の一歩手前なんですけど。時代が宋の時代、どうしても元は後なんですけども。正八幡宮は税所氏ですか。税所氏は何か大宰府の方と関係しているとのことなんですけど。

平田　税所氏は藤原姓で、京都から下って来ます。要するに資料として判っているのは日明貿易が相当判っているわけで、日宋貿易の段階は日本側にほとんど資料がないわけです。宋史とか宋会要とか中国側の史料はあるけれども、東洋史関係の者がタッチしているだけで日本史の人はそれを読んでいないと思います。史料的な分析もまだ進んでいないと言えます。考古学的な発掘調査によって遺物が出て来たことによって皆が気が付き、それをどうやって日宋貿易と結び付けようかという段階じゃないでしょうか。

そうなって来ると持躰松遺跡で日宋貿易が云々された時期は、阿多忠景の時代であって島津の時代じゃないわけです。それをごっちゃにすると話がこんがらがって来ると思うのです。私が整理出来るのはそんなところになります。

久米　忠久の頃と・・・。

平田　忠久の頃は、まだ。結局、こういうことです。平安時代の大隅・薩摩の実態は史料的に判らないわけです。大隅・薩摩でいろいろ争いが起こって来るのは、元寇がきっかけです。鎌倉幕府は頼朝が建てたので源氏の時代ですが、その前は薩摩守忠度が知られている通り、薩摩平氏が勢力を張っていた平氏の時代です。鎌倉時代になっても大隅・薩摩には平氏の残党が相当残っているわけです。平家が滅んだ後、御家人にその領地が配られたのですが、モンゴルが攻めて来る事態に

なって九州に領地を持つ御家人は九州下向を命ぜられます。島津氏、二階堂氏、渋谷氏、鮫島氏など、皆、下って来ます。そうすると在地の土豪と争いが起こり、そう言った中で島津氏が勝ちを占めていくのは数百年後になります。争い出してから薩摩・大隅の記録が残されていくのであって、それ以前のことは記録にないのです。だから、後の記録と記録のない時代を結び付けて議論すると混乱することになります。

1頃の広さ

三善　1,767ﾍﾟｰｼﾞの中段、8行目ぐらいに「広野を開きて墾田若干頃を得たり」とありますが、「頃」というのはどれぐらいの広さですか。

平田　1町の10倍です。10町で1頃です。（編集時後記：中国の度量衡は日本と若干異なるので整理しておく。100畝＝1頃。秦漢以降、1畝＝240歩、1歩＝6尺四方）

三善　これは面積の単位ですか。

平田　そうです。

島と方限

西田　1,766ﾍﾟｰｼﾞの10行目「島は締(シマリ)の、りの略にて、一村にもあれ、一郷にもあれ、一と方限をいへるなり」とありますね。方限のことを、島というのですか。

平田　さぁー、そういう著者の解釈でしょうね。

西田　解釈ですね。今でも鹿児島では方限というけれど、方限のことを島とは言いませんね。

平田　言いません。

浜之市

納　1,766ﾍﾟｰｼﾞの中段、真ん中頃「玄与日記云、文禄五年七月、近衛殿、浜市より廻へ御船をうつりおはします」と書いてありますが、この浜市とか廻は国分近くの浜之市と見ていいですね。

平田　そうです。浜市・廻。近衛信輔が豊臣秀吉の怒りを買って坊津に流されます。許されて帰る時に此処を通ったということです。浜之市から廻を通って都城。都城では伊集院幸侃の館に泊った。島津義久が見送りに来て、その晩に近衛信輔はこういう歌を作った。島津義久の歌が後のものです。この二つが掲げてあるのです。

納　そうすれば浜之市(はまんち)という所は、源平の昔から湊としては重要な所だったのでしょうね。というのは、平家物語の話。

平田　鳩脇がありますからね。

納　あすこから出て行って、桜島へ渡るのでしょう、俊寛は。

平田　そうです。

納　そうしたら浜之市というのは、今はさびれていますが、昔は相当盛んな町だったわけですね。

平田　それは、そうでしょう。大隅国府のお膝元ですから。

納　あゝそうか。大隅八幡は浜之市から真っ直ぐ上って行った所にありますね。

松田　国府には遠いのですか？

平田　何が？

松田　浜之市からは。

平田　近いですよ。

松田　国府への入口になるのですか？

平田　入口は水戸川（須戸川）、広瀬の方に。あすこに「湊」という集落があります。

松田　浜之市とは別に湊があったのですね国分の方は。

平田　そうです。浜之市はあの辺の人たちが野菜とか稲藁とかいろんなもの持って来て「市」を開いた所です。

松田　加治木も湊で栄えたことになっているけど、なかなか出て来んのですよ。

平田　加治木は鹿児島県の中でただ一つ、春日神社を総社とする所です。春日神社が大事にされているのは、加治木だけ。だからあすこは特別だったのじゃないかな。春日神社を総社とするということは、藤原氏の領地ということでしょう。それが史料に残っていないだけのこと。島津の支配になってからもあすこは一門が特別に支配するわけです。荘園としての歴史があるのだが、それが歴史から消えているのじゃないか。そのことを物語るのが春日神社の存在だと思います。

唐坊

久米　海のルートというのは、時代が先程の宋の話に帰るけど、浜之市とか加治木などにも海外の船も入っていたと考えられるわけですね。当時はやっぱり坊津でしょうが、薩摩のいわゆる湾内、錦江湾の方にも船は結構入って来たのでしょうか。

平田　先日、東北大の柳原さんと県立図書館でばったり遭ったのですけどね、彼が注目しているのは「唐坊」という地名です。日宋貿易の時代に宋の商人が住んだ所を唐坊と名付けた。日明貿易は「唐人町」になるわけです。唐坊と唐人町を使い分けておられる。鹿児島県内の唐坊は、川内の当房、加世田の当房がある。私が気付いたものに、喜入の生見に「東方(ﾄﾎﾞ)」という地名がある。（編集時後記：垂水にも東坊・当坊がある。さらに谷山の小松原に「当功」という地名があり、当坊の変化とも考えられる）

久米　唐坊の「ボウ」は？

平田　あれは、フサ（房）。

久米　フサ（房）ですか。

平田　それはいろいろあると思うよ、房・坊。だから鹿児島湾に入って来たことも考えられるわけです。これは史料がないわけだから今後の遺物の出土によってそれが明らかになって来ると思います。文献的な史料も残っていないし、考古学的な調査もなされていない。ただ手がかりになるのは地名だけという状態です。現段階で日宋貿易の拠点だったと持ち出すのはちょっと無理があると思うのだけど。

久米　地名の存在も考えていく一つの方法ですね。

平田　鹿児島県の場合、昔から現在まで、現在はちょっと違うけど、江戸時代まではどの港が栄えたかということを考えてみたらそんなに沢山はあがらないと思うのです。重要な拠点は根占とか志布志とか。

久米　そうなると、志布志ですね。

平田　山川は少し時代が下がります。

久米　中世？

平田　山川が大きな意味をもつのは奄美・琉球を支配するようになってからのこと。

久米　市来湊などの重要性というのは？

平田　あるのだろうけれども史料もないし遺物もまだ出ていない。惟宗氏の本拠地は市来だったということだけが判っている。

久米　そうですね。

平田　市来氏がどれくらい影響力をもっていたかというのは、市来とか東市来から出て来る遺物によって考察しなければならんと思うのです。それが出ていないから何とも議論のしようがないわけです。後半の繁昌君の時間がなくなるから前半はこれで終ります。

野田町の地名

繁昌正幸

皆さん、今日は。一年半ぐらい前に参加させてもらってから欠かさず来ています。繁昌と申します。よろしくお願いします。

こういう機会を与えて頂いて有り難うございました。こういう機会がないとなかなか自分で勉強するということがなく、今回調べてみて本当に大変だなと思うし、また相当勉強になりました。また次々に問題が出て来て、平田先生に二度ほど手紙を差し上げて尋ねましたが、まだ完全でないと思っています。

野田町の東側が高尾野町と出水市、西の方が阿久根市になります。早速、内容に入っていきたいと思います。

上名の小字

レジュメの１枚目にまとめたものがありますが、これは後回しにして３枚目の字名から始めます。読みが特殊だったりするのが多いようです。さっと流し読みしていきます。

上名・下名、二つの大字からなっている所で非常にやりやすいフィールドです、上名が132、下名が136、合計260ほどの小字です。分類をどういうふうにするか迷いましたが、こういう形に落ち着きました。

うしろの方の２枚に読みがありますが、印刷が悪く読みづらいと思います。また現在野田町では新しい字図とか字地名表とかを作っている段階のようで、以前の資料には出ていたのに新しいのには出て来ないとか、小字一覧にもいろいろあって、どれを信じればいいのかなと、ちょっと迷っています。

まず上名の小字、信仰地名。愛宕山・寺原・堂免・堂山・花立、これは後で述べます。弁天平・山神元・田ノ神丸・弓場平・注連下という11字があるようです。

城郭・集落に関するものとして、大丸・熊陣・城迫・城内・城ノ下・城ノ平・新城・山城・野首迫という９字。

土地区画として、大坪ケ迫。

交通地名では、石坂・岩坂・馬渡と読むようです。それから越地・下越地・下橋掛・橋掛・橋口・橋口原。

水利地名として、井手口・受口・受口段・受口峠・冷水。

人名地名はないようですが開発地名として別府・伯父ケ迫。

田畑地名として、大久保田。田畑地名には「ダ」と「デン」といろいろあるようで、この区別が何を意味するのかなというのがあります。上新田・小松田・小松畑・新田・小山田・大畑・山田・前田・前田・西田・東田・長田・角田。

産業地名として小豆野・井杭田・石倉・大角鹿倉・上菜切・三斗蒔・下三斗蒔・菜切・樋渡・湯之谷・前木場。

自然地名として、歎ケ谷・惰原・西木佐木野・東木佐木野・町原(ﾏﾁﾊﾞﾙ)どっちも言うようです。冨山・田島原・湯之谷・湯ノ迫・大迫・要ケ迫・牛ケ迫。

位置地名として上大谷・下川頭・下野角・西田平・西長谷・山ノ口・東長谷・上世美・下世美・上床並・下床並・西笠掛・尻無・大迫口。

形状地名として、大川内・大谷・小野段(ｺﾉﾝﾀﾞﾝ)と二通りに読みます。上小川内(ｶﾝｺｺﾞﾁ)とも読むようです。小川内・下小川内・白谷・立平・野角・野添・野元・籠土山・西小川内・野呂川内・七枝・鋤崎。

目印地名として、一本松ケ迫・岩下・梅ケ谷・柿野・角石・白木元・鷹之巣・鶴田・鳶之巣・松ケ迫・桑木丸・青木・竹林・藤原・小葛川・涼松・勝負ケ元。

湿地地名として、西牟田・山仁田。

浸食地名はありませんでした。

気象地名として、嵐田。

擬音地名として、堂目木。判らない地名として平田先生に送ったら、擬音地名とのことでした。

意味不明のもの、尾毛無・特手。勝負ケ元これは消すのを忘れていました。目印地名の方がよいとのことでした。龍巣川その次は十三奉行迫(ｼﾞｭｻﾌﾞﾛｳｻｺ)と読みます。宇津良・打上(ｳﾁｱｶﾞﾘ)・小伏川。

全部で132あります。一番多いのは目印地名で18あるようです。それに次ぐのが田畑地名が14、位置地名が同じく14。自然地名11と信仰地名が11になります。レジュメの1ﾍﾟｰｼﾞにまとめておきました。

下名の小字

同じように下名の小字を説明します。

信仰地名として、鐘付・金剛園・社下・田神丸・早馬尻・不動原(ﾌﾄﾞｳﾊﾞﾙ)・祭田・宮下・宮脇・大人。これは後で平田先生から説明があると思います。鉾立・矢立ケ迫。

城郭・集落地名として、垣内・桜ケ城・出丸・甕城・野首。

市・町地名として、本町・森町・井町。

交通地名として、大道原(ｵｵﾄﾞｳﾊﾞﾙ)・路上これは皆さん方に配ってあるのには出て来るのですが、新しい小字集には出て来ません。この辺が相当混乱があるのか、まとめつつあるのか、判りません。それから大道添・辻・辻ケ迫・茶屋迫・茅越迫。

水利地名として、井手元・落水・水ノ手・片見取。

人名地名として、吉戸丸。

開発地名として、大園・下園・重園・田多園・奥園・古川園・猿楽園・竹添・春・平八重・下今村・上今村。「園」も田と同じように「ソノ」と読んだり「ソン」と読んだり、その区別があるのかなと思うのです。

田畑地名として大畠・三月田・三斗蒔・野田畠・東畑・東備多田は私の間違いで東備田多に文字の順序を変えます。前田・岡畑・堤田は正しくは鞁田です。次は、タケカンムリでなくてクサカンムリ、薖田。上浜田・下浜田。下浜田は新しい地名表には出て来ておりません。浜田・上備田多・紙田・佐司田・大法田・袴田・八多田・招田・夜中田・六多田・浦田・北山田・五反田・四反坪・八反田・六反田・一町田。これは29で非常に多いです。

産業地名として、宍取と書いてありますがワープロの関係で出て来なかったのです。完取と書いてあります。高細工・川漉。

自然地名として、加生岡。これは後程説明します。土瀬戸・高岡・平原・餅井迫・浅井迫・雪手ケ迫・板川平・兎迫・岡迫・大迫・曲迫。小田迫、これも以前のに出て来て新しい地名表には出て来ません。次が長迫・青茅迫。

位置地名として、橋上・橋下・東笠掛・塩入、それから中林。これも新地名表には出ていません。

形状地名。鏡渕・長尾・平地・石亀・六

枝・船ケ迫。

目印地名として、岩崎・岩元・榎木丸・椙木迫・藤ケ谷・松ケ迫・松元・竹之下。新しいのでは竹ノ下になっています。川骨、これはコウボネかなと思ったのですが、カワボネに読みがなっているようです。次は、茅刈でなくて葦刈。

湿地地名。小渕・水洗・石走。

気象地名として、荒崎。法目木は今度の新しいのでは法メ木。耳取・早風・下早風・上早風。

意味不明のもの。荒巻・上荒巻・下荒巻・重津川・高棚・駄白。田多吉でなくて田多園・徳手・羽下・袈川・来仙。相垣、これも後で説明します。

以上、下名の小字では田畑地名が29で圧倒的に多く、それに次ぐものとして自然地名の15、それから信仰地名と開発地名の12ずつというような数になっています。意味不明のものも12あるようです。

そこでレジュメの１枚目に書いてあるまとめを見ます。野田町の地名は田畑地名・目印地名・自然地名・信仰地名・形状地名・意味不明な地名が多い。人名地名・浸食地名・湿地地名・土地区画地名は少ない。意味不明の地名が多いのは歴史の古さを物語るとみてよいのでしょう。また、地名の付け方が割合に素直な印象を受けます。例えば、前田とか後にあるから後田とか、そして曲迫とか素直な印象を受けます。それから、田・畑・迫・川内などの付いた字名が目につきます。この字総図は野田町から頂いたのですけど、こちらが南、こちらが北です。北が海の方になります。上名が広くて下名が狭い。

野田町に多い地名を、田畑・目印・自然・信仰・形状というふうに、印を付けてみました。信仰地名はある程度の偏りがあるかなと思います。田畑地名は、例えば田圃の部分と畑の部分が分散するようです。目印地名は全体的に散らばる傾向がみられるようです。自然地名もある程度分かれるような気がします。

この図はちょっと薄く書いてありますが、これが主な道路なんです。これから道に関する地名、例えば橋とか坂、そういう地名が出て来ないかなと思ったのですが、あまり出て来ずに主要路でない所に「橋」の地名が出て来たりします。一般的な傾向としては言えないのかなと思ったりします。

地名を羅列していけば、それだけのことなんですけども、その他に図書館に行って調べて来たことがあります。それを説明します。主に『野田村郷土史』S.49.8.によりました。

相垣(ｴﾝｶﾞｷ)。亀井山城の南境に接近した地名になります。島津氏が入って来て高尾野の方に木牟礼城を造ります。それ以前の城がほぼ中心部にある亀井山城です。これが中心になって、野田・高尾野を治めていたわけです。亀井山城の南に「相垣」というのがあると、ただそれだけでした。調べてもよく判りませんでした。

十三奉行迫(ｼﾞｭｻﾌﾞﾛｳｶﾞｻｺ)。これもその近辺にあるのですが、郷土史には築地という当時の県文化財専門委員の説明を引用して「十三奉行は下名村のうち、古戦場にて、武将十三名が戦死せしより、名を得るという。十三ケ所、土を高く盛り上げ、墳墓の塚があり傍らに一つの石碑あり」と云々。現在はなにもなく、果樹園に変っているということです。『由緒調帳』には、奉行とは戦奉行のことで、戦時中の将校団に当たると書いてあります。十三奉行迫の丘陵地が上餅井の字勝負ケ元に続いていることから「この十三の武将の勝負を決した元の場所」という伝承があるようです。勝負ケ元は長い迫になっています。

笠掛という地名が上名・下名それぞれ一ケ所ずつあります。東笠掛は下名、西笠掛は上名にあります。鎌倉時代によく行われた騎射の式で弓矢を使用する武芸の一つ。ただ笠懸のカケの文字がちょっと違っているようですけど。

加生岡(ｶﾓｵｶ)。現在は加生になっていますが、これは「加賀どん」のことで、野田城主島津忠道の重臣、市来加賀守。主君が暗殺されて後、世捨人となって川底に逃れて原野を開墾して世を送ったとのことです。加賀どんが「カモどん」になって、さらに「加生岡」という地名になっているのだそうです。

袈川(ﾔﾝｶﾜ)。地下水がもくもくと吹き上げ四季冷水絶えない川と書いてありました。袈川の「ヤン」は何なのか、それ判りません。

「立」という地名が柴立とか矢立とか花立とかありましたので調べて来ました。『総合日本民俗語彙』に、神事の際、柴を立てた所を柴立というとありました。また、人の送り向えを此処に於いてする、というのが『肝属郡方言集』に載っているとのことです。山に近い所みたいです。柴立・花立について「峠越の礼」の項に「峠路の上に旅人が越えた青草を折り取って捧げる霊地を、およそ国境としている。これは畏い山神への、恐れ多い山神への手向けなのだが、柴折さん・折花さん・柴立・花立場などと称している。一方変死した人の跡にも道行く人が柴・青草を折りとって捧げて柴神、峠や山道の入口により通行の安全を守る路傍の神とも言っている」ということです。このことから、それがあれば道に結びつくのかなという気がします。

それから「矢立」。これは『日本民俗語彙辞典』の「矢」の項に「狩の初めに矢を放って予祝：前祝をすることを矢立ともいう」と書いてあります。狩山の麓にあって、そこから狩りを始める所をいうようです。

仁田

山仁田という所もあり、県の埋蔵文化財センターにいる関係もあって、松元町の仁田尾遺跡、種子島の奥ノ仁田遺跡とかを耳にしているので、仁田というのを調べて見ました。結構あるようです。長島町に仁田原、阿久根市に３ケ所：木場仁田・山仁田・中仁田。鶴田町に仁田原。吹上町に赤仁田。知覧町に山仁田・仁田尾。加世田市に仁田山。坊津町に仁田川。蒲生町に赤仁田。姶良町にも赤仁田。国分市にも仁田尾。福山町には仁田尾城跡という城跡の名前として出て来ます。

～木野

意味の判らない地名も結構あって歴史が古いのかなと思う一方、わりと自然に地形の要素に基づいて自然に付けているのではないかという印象をもちました。

意味不明の地名を下の方に書いておきました。篭土山・木佐木野・備多田・石走・堂目木・法目木・春・袈川・耳取・徳手それから宇津良。

「～木野」というのがありましたので、それもちょっと気になりました。串木野という地名もあるんですけど、「木が生えている野原」と考えると、例えば桑が生えている桑木

野、これは東市来にあります。それから加治木の桃木野など。これらは植生からと考えても判ります。串木野とか弓木野とか、木佐木野は、意味や使い方が判らない。「～木野」というのは何か別な意味があるのかなと思ったりします。

最後に、こういう分類を自分でやってみてするのは簡単ですけど、どちらの方に入れるか、どちらの方がおさまりがいいか、そのことからどういうことが言えるかなど非常に難しく、二つの大字で 260程度の字名だったのですけど、その小字も動いているという事実があったり、まとめをするのも難儀だなと思いました。でも、いい勉強になりました。これを機会にいろんな所も調べて見たいと思います。どうもありがとうございました。

〔質疑応答〕

上名・下名の区分

平田　遠慮なく質問を出して下さい。

三善　野田町の大字は、上名と下名の二つだけですか？

繁昌　二つだけです。

三善　上名と下名はどちらの方が海に近いですか？

繁昌　えーと、上の方。下名の方が海に近いです。

三善　上名はどうですか？

繁昌　上名は山手の方にあります。

坂本　「名」というのは？

繁昌　「名」は何ですか？

平田　「名田」から来たのでしょうね。そして上村・下村という表現に変わっている例も多い。上名が上村に、下名が下村とか。「名」の方が古いとみられます。

米原　どういう形で分けたのですかね？上と下とは。上の方が下になるのですか？

平田　川の上流と下流という関係です。

鐘付

納　面白いとおもったのは下名の小字で一番最初の信仰地名に、鐘付(カネツキ)という地名がありますね。私が知っている範囲内では国分市に「カネツキ」という所がありますがあのカネツキは「付」ですかね？

肥後　いや、突く方。

平田　鐘を突く方。

納　「甲突」の「突」ですね。人名でもカネツキというのがあります。テヘンに童、鐘撞という名字もあります。

屋地(ヤヂ)

納　それから屋地。下名の小字の下から5行目、湿地地名のところ。宮之城の屋地は湿地地帯なんですか？

平田　だと思いますよ。

納　あすこは私が見たところでは高い所ですよ。

平田　高いのですか。

米原　結構、高台。

平田　それならば「屋形がある土地」と考えていいのでしょうね。

納　屋地と虎居、ちょうど差し向かいになっている。湿地やろかいなと思って。

平田　関東の方で「谷」を「ヤツ・ヤチ」と言います。屋地は地名の方では一般に湿地帯をいう（パソコンでも谷地と出て来る）と解釈してたもんですから屋地はそうなんだと思っていたのですが、高い所ですか。

納　それから昔の軍隊用語なんですが、海軍の用語にヤチがありました。

平田　どんなふうに使っていたのですか。

納　アクセントはどこにもっていくのか知らんですがヤチ・ヤチと言いよったです。

平田　意味は何ですか？

納　意味は、よかかな。女性器です。それで湿地帯かなと思ったのですけど。

平田　そんたぁ知らんな（笑い）。

往還

納　もう一つ。これは川内の人から聞いたのですが、大通りのことを往還(オカン)という。どこから来たかというと、そこは昔は大通りだったらしい。これを往還というらしいのです。今はどうですか。言うか言わんか判りません。それから郵便番号簿がありますね。場所はもう忘れましたが、鹿児島県以外ですが「往還」という地名があります。何カ所かあります。

平田　昔から往還という表現はあったですよ。

納　あった場所はもう忘れました。俺たちが小さい時は往還と言いよったというもんですから。

平田　古い言葉が残ったと理解すればいいのじゃないですか。

鷹之巣

久米　感応寺はどこら辺になりますか。

繁昌　下名になります。

久米　麓、野田の中心地？

繁昌　中心地ですね。

久米　地図ではどの辺になりますか。

繁昌　（地図を指しながら）この辺じゃないですか。

久米　鷹之巣という小字はどこにありますか。上名ですか、下名ですか。

繁昌　鷹之巣は上名です。

久米　ということは感応寺の。あっそうか反対側になるか。

繁昌　そうですね、感応寺は下名になりますね。

久米　鷹之巣というのは東町にもありますね。

繁昌　ありますね。

久米　鷹之巣の「鷹」というのは、鷹狩と関係があったということを、民具の会で橋口先生が話をされたのです。鷹狩をしながら隠密・密使を見付けたりしたのかなと思って。目印地名に二つありますね。

繁昌　一つは鳶之巣。

久米　鳶之巣？

平田　鷹の巣があったことから付いた地名でしょう。鹿屋の高須も本来は鷹巣です。

前木場

三善　上名の産業地名のところに前木場というのがありますが後木場はないのですか。

繁昌　見たところではありません。人名・名字でも前木場・平木場というのは聞きますが、後木場というのは聞かないようです。

三善　産業地名とはどんな産業ですか。

平田　これは木を集める山林作業の場という意味で産業と見たわけです。

三善　昔の焼畑農業があったといわれる地名じゃないですか。

繁昌　確かに木場は九州に相当散らばっています。だけど焼畑と直接結び付けられるかというのは、ちょっと判らない。地名として分類したのは、木を集める場所というふうな感じでしか理解できないのじゃないかなと思いますけど。

特手：特牛

納　上名の小字、一番下の意味不明の前から２番目、特手(コッテ)。上・下特手とあるように聞いたことがあるのですけど。

平田　上特牛・下特牛はあるでしょう。

納　そして、この特牛の場合、山口県にもありますよね・

平田　特牛(ｺｯﾄｲ)がある。

納　あすこのコットイは「牛」じゃないですか。

平田　そうです。牡牛のことを「コッテ」というわけですから、鹿児島弁ではコットイをコッテに訛っているだけのことです。

納　鹿児島の場合、特手は牛と手の間違いじゃなかろうかと私は考えたのですが。

平田　そうですよ。

納　それでいいのですか。

平田　書き違いですよ。

米原　「コッテ」というもんだから「手」の字を当てたのですね。

二つの前田

西田　上名の田畑地名のところが14あるのですが、これの真ん中に前田・前田と二つ並んでいます。これは？

繁昌　はい、場所が離れている別の場所です。

西田　離れて、あるのですね。

繁昌　場所が離れて、あります。

西田　なるほど、同じ地名で。

繁昌　同じ地名です。

平田　それぞれある屋敷の前でしょう。田圃地名では前田が一番多い。

石走・砂走

坂本　意味不明の地名で、前回もちょっと話したとおもいますが、石走(ｲｼﾊﾞｼﾘ)という名字の方も沢山おられますね。だから、何かあったのだろうと思うのだけれども、谷山の場合は砂走(ｽﾅﾊﾞｼﾘ)なんです。砂走というのは、梅雨とか大雨の時に砂がだーっと流れ込んで今までここら辺にあった砂がこっちに流れる。実際に小さい時に見ていて感じよったわけですけどね。だから、雨なんかの時に石がごろごろ出る場所かなと思うのですけど

平田　そういう所ですよ。根占にもありますね。石走は。

米原　全部、崩壊地名と見てよいですね。

平田　はい、これは崩壊地名に入れてよいでしょう。

坂本　崩壊地名ですね。

平田　浸食崩壊地名ですね。石走は。

大人・大人足形

繁昌　下名に「大人」という小字があります。これは平田先生に説明をお願いします。

平田　「大人」については、私のノートを2ﾍﾟｰｼﾞ分、コピーして来ました。前回も「大人」は質問事項になって、福山町の「大人」が話題になりました。２枚目をあけてください。その後、木下　良氏、元國学院大学教授から年賀状で「大人」地名についての問い合わせがありました。現在は古代交通研究会長をしている人ですが、彼とはもう40年ぐらいつき合っている仲です。その年賀状のコピーの４行目に「駅路に沿って大人地名があることを知りました」と。５行目に木本雅康君、現在長崎大学経済学部の講師をしているとのことですが、大学院の時に木下さんが彼と中村君・橋村君の３人を連れて来て薩摩・大隅の駅路を調べて歩いたことがあるのです。それで知っているのですが、木本君が「大人足は古代の駅制と関係がある」との論考を書いたらしいのです。それで、鹿児島はどうですかの問い合わせがあったわけです。

右側がその返事です。１枚目に返ります。鹿児島県の「大人足形」地名を14例拾ってあります。それを大きな赤で印をしたのですが、赤も青も黒一色でコピーされるのではっきりしませんけど、ノートで見ると赤の〇印と青の〇とか△はやっぱり同じような分布になります。

右側の方に書いてありますが、阿久根とか出水とか野田の「大人」や「大道」は薩摩国から肥後国に向う駅路に沿って分布するのが判ります。隼人・牧園・栗野・菱刈に分布する「大人」地名も大隅国から肥後国に向う駅路に沿っていることが判ります。

「大人足形」という呼び名はどういうことかというと、田圃なんかで泥を踏みつけた時にU字形のくぼみが出来ます。切通しを造った時にそれを巨人の足形のように理解したと考えられます。「大人・大人足形」などの地名を拾いあげると古代の駅路を探す手がかりになるのじゃないか、そういうことです。鹿児島県の「大人」地名はすべて道路に関係があるとの結論に達したのが、木下氏に対する私の返事になります。

前回も「大人」が問題になりましたが、古代の駅路と関係があるとなると、民俗学的な巨人伝説だけでなくて、古代の交通路を探る手がかりになる面白い視点が出て来たということです。

この他に古代の道路を探す方法として、中世の城跡を拾って行けば、中世・近世の道路だけでなく、古代の駅路を探すのに早裁けになります。それから石橋の存在を全部調べて道路との関係を探すと、やっぱり道がつながって来ます。また鹿児島県の場合は「麓」があります。「麓」と「麓」をつないで行けば近世の道が判ります。これは当然、中世の道・古代の道につながって来ます。

私が以前『地名が語る鹿児島の歴史』で書いたのは墨書土器の分布を地図上に落としていけば駅路と重なるということでした。考古学の成果も活用出来ます。また、鹿児島県の場合、八幡神社の分布もひとつの手がかりになります。古代駅路に沿って著名な八幡が並んでいます。（後記：八幡は説明もれ）

現代の３号線・10号線も基本的には昔の駅路を骨組みとしているわけでしょうから、駅路をきちっと抑えることが鹿児島県の歴史では大事な事と思います。それよりも大事なのは、まだ盲点になっているのは、先程久米君から質問が出たように、海のルートが解明されていないことです。それが鹿児島県の課題だと思います。「大人足形」はプリントを読んで頂ければ判ると思いますので説明はこれくらいにします。

墨書土器

西田　一番最後の「麓」に次は何ですか？ボクショ土器？

平田　墨書土器です。

西田　ボクショ土器って何ですか？

平田　土師器の坏に墨で字を書いたもの。

西田　その墨書ですね。

平田　出て来るのが、大体９世紀頃のものです。『地名が語る鹿児島の歴史』の中に出ておりますから、それを見て下さい。

久米　これを見ると、この×印というのは意味深な所にありますね。

平田　重要な所にあります。こういう所に近世は「麓」が置かれます。とくに川の分岐点に重要な城が置かれています。

久米　錦江湾のところには、ちょっと見えないのですが。

平田　陸路よりも船だからでしょう。

久米　船の着き易い所。

平田　ということでしょう。よろしいですか、それで。

野呂川内

平田　先程の野田町の字で気付いたことをいくつか。産業地名の中にある菜切、これは何だろう。波切の方じゃないかな。よく判りません。樋渡は樋が渡る所ですから水利地名に入れた方がすなおに通るかも知れません。

重要なのは形状地名の最後の方に野呂川内というのがありますが、金糞をノロと言いますから製鉄に関係のある地名だと思ってよいでしょう。タタラ・ノロ・金糞、これは一つのテーマになります。そういうことで、野呂川内は産業地名の方がよいでしょう。

意味不明の地名。尾毛無(ｵｹﾅｼ)は判りません。特手(ｺｯﾃ)は先程解決済みです。牡牛のこと。龍巣(ﾘｭｳｽ)は判りません。十三奉行は説明がありました。

宇津良と宇都良

平田　宇津良(ｳﾂﾗ)、これは判りません。宇都良と宇津良は、県内に合計20カ所ぐらいあります。そのうち宇津良は４カ所です。宇都良の場合は宇都に地名語尾の「ラ」が付いた形でしょうが、殊更に強調する意味がよく判りません。

ただ宇都と迫を比較すると、宇都の方が狭く、宇都から下の方に下って来ると地形上は「迫」になっているようです。台地を越える時、迫を登って行くと宇都になって、宇都を越えることになるのじゃないでしょうか。まだ多くの現地を歩いていませんが、どうもそんな感じがします。宇津良の方はどういう所か、見当がつきません。

アガリとサガリ

平田　その次の打上(ｳﾁｱｶﾞﾘ)。アガリ・サガリというのは、山に修験者たちが登る時、村人たちが送って行く場所がアガリです。そして修行を終えて帰って来るのを迎える場所がサガリになります。これは信仰地名に入れる方がいいでしょう。その次の小伏川は判りません。

川骨

平田　下名の方はほとんど説明がありました。田畑地名に入っている三月田、これは祭礼地名です。三月の祭の費用に充てる田。他にも二月田・七月田・八月田・霜月田、九日田とか沢山ありますので、それらはすべて信仰・祭礼地名として処理する方がよいでしょう。目印地名の終りの方にある川骨は何ですか？

繁昌　川骨が生えている所ということで、そこに入れたのですが。

平田　川骨って？

繁昌　植物の名前。

平田　そんなのがあるの？

繁昌　湿地に生えているので。

平田　川骨という植物があるの？

坂本　あります。

平田　そうですか。それなら、目印地名でよいでしょう。

坂本　あまり目立たんですけどね。

平田　昔の人は目聡いですから何かの役に立てたのでしょう。

小山　その川骨は今もあるのですか。昔、鹿児島でそう言ったのでしょうか。そこは問題ですよ。鹿児島語でそう言ったのか。川骨(ｺｳﾎﾞﾈ)と言ったのか。

平田　方言が地名になっているのはあまりないですよ。

小山　鹿児島語と普通語は違うでしょう。例えばニガウリだったら、鹿児島語で言えばゴイ。向うじゃ何というか。兎に角違うわけです。川骨を本当にコウボネというのか。現在は標準語ですけど、鹿児島で何と言ったのか問題にせにゃいかんのじゃないですか。

平田　うーん。

小山　川骨(ｺｳﾎﾞﾈ)にしていいかどうかは疑問もあり得ます。ヒトツバと槇は名前が違うのに全く同じもの。

平田　植物の名は、いろいろありますけど

小山　全然違いますから。

平田　じゃー、植物以外とすると、これは何と解釈しますか。

小山　その辺を考察して下さい。

平田　難しいな。判らないのが多いです。意味不明の終りから５番目の特手は、特牛(ｺｯﾃ)の変形でしょうね。特手→徳手、牛→手に変っている。

擬声語・擬態語

平田　気象地名の２番目、法目木(ﾎﾒｷ)。ホメクは現在も鹿児島語では言いますが、古語にもあります。

小山　それは辞書に載っています。

平田　載ってますか。

小山　はい、これは一般語でしょうね。

平田　しかし、ほとんど使わないのじゃ。

小山　使わない。

平田　鹿児島の人たちが使うだけ。

小山　鹿児島でもあまり使いません。

平田　これは気象地名に入れてもよいし、擬声語というよりは擬態語でしょうね。堂目木(ﾄﾞｳﾒｷ)と似たようなものです。

花立

平田　今日配られたものに、柴立・花立がありますが、『三国名勝図会』に庶民が花を供える場所という説明があります。境内に入れずに一般の者が花を供える場所があったらしいのです。そこに「花立」という地名が付く。そういう信仰地名でしょう。

勝負ケ元は、昔、武将が勝負をしたとする解釈が多いのですが、それよりも菖蒲が生えている湿地帯という目印地名の方が自然でしょうね。

～木野

繁昌　～木野はどうです。木佐木野？

平田　～木野は焼畑の名残を示す地名という説があるけど、よく判りません。このタイプの地名は桑木野とか樫木野とか桃木野など植生地名の方が多い。木佐木は何を意味するのか判りません。鹿児島県には庭月(ﾆﾜﾂｷﾉ)野という地名がありますが、庭用の木をとって来る所かなと思ったりします。

袈川(ｹﾝｶﾜ)は判りません。前々回、胎盤を「イヤ」という説明があって、特別に捨てる場所があったとの説明がありました。それに近いのかなと思ったりしますが、さらに情報を集めて下さい。矢立は解釈された通りです

仁田・牟田・牟礼

平田　仁田と牟田とがありますが、仁田は関東から入って来た湿地地名です。牟田は西日本の湿地地名。さっきも話題になりましたが、元寇の時、関東武士が九州に下って来ます。そして、ほとんどが支配者になります。島津とか渋谷、足立・宇都宮・小山、いろんな人が下って来ますから、関東のことばが入って来たと思ってよいでしょう。牟田は古くからの湿地帯です。その区別だと思えばよい。

牟礼はフレ・ムレの類です。これは九州に

かたまっています。古代朝鮮語とつながる表現で、集落の意味だとされます。古代朝鮮語とのつながりを考えた方がよいでしょう。川内(ｶﾜﾁ)は随所にあります。

片見取

米原　下名の水利地名の片見取(ｶﾀﾐﾄﾞﾘ)、これはどうですか。

平田　ミドロ（水泥）・ミドリ（水取）。これはミドロと同系統の用語です。

米原　ミドロですね。

平田　水取(ﾐｽﾞﾄﾘ)から訛ったもの。ミズトリ→ミットリ→ミドリ→ミドロ。水を取る場所です。

今、発言されたから、次回はどこをされますか。坊津、それとも高山？

米原　高山をします。

平田　高山。えーと、つい先日、私も高山高校の校長さんを通じて手に入れました。内之浦に教え子がいましたので、内之浦も手に入りました。手に入らないのは東串良だけです。誰か東串良につてのある人はいませんか。時間をかけてゆっくりやりましょう。そのうちに手に入るでしょう。あとは大体手に入るようです。角川の地名大辞典で小字収録がなかったのは９カ町村あるのですが、まず桜島をこなし、今日野田町を処理しました。次が高山、その次が坊津・内之浦。

じゃー６月に高山をして、９月は私が内之浦を、12月に坊津をやって下さい。

米原　他の人にやって下さい（笑い）。

平田　まあ若いうちに頑張って下さい。何か発表したいことがあったら出して下さい。地名以外のことを話すのだったら、いろいろあるのですけど。何なりと面白いことに気付いたら連絡して下さい。今、米原さんが南日本新聞に「鯨の民俗」を書いておられます。切り抜かれると役に立つでしょう。

今日は、これで終わります。

野田町の小字集計表

分　類	上名計	下名計	計	合計　㌫	順位
信仰地名	11	12	23	8.59	◉ 4
城・城郭	9	5	14	5.22	○ 9
市町地名・土地区画	1	3	4	1.49	◇15
交通地名	9	7	16	5.97	○ 8
水利地名	5	4	9	3.36	12
人名地名	0	1	1	0.37	◇17
開発地名	2	12	14	5.22	○ 9
田畑地名	14	29	43	16.05	◉ 1
産業地名	10	3	13	4.85	○11
自然地名	11	15	26	9.70	◉ 3
位置地名	14	5	19	7.09	○ 7
形状地名	16	6	22	8.21	◉ 5
目印地名	18	10	28	10.45	◉ 2
湿地地名	2	3	5	1.87	◇14
浸食地名	0	3	3	1.12	◇16
気象地名	1	6	7	2.61	13
擬音地名	1	0	1	0.37	◇17
意味不明	8	12	20	7.62	◉ 6
	132	136	268	100.00	

順位の印について　◉　２０以上ある地名
○　１０以上ある地名
◇　　５以下の地名

野田町の地名

繁昌　正幸

上名の地名

目印地名・形状地名・位置地名・田畑地名・信仰地名・自然地名・産業地名が多い
人名地名・浸食地名はなく，市町地名・気象地名・開発地名・湿地地名は少ない

下名の地名

田畑地名・自然地名・信仰地名・開発地名・意味不明・目印地名が多い
擬音地名はなく，人名地名・湿地地名・浸食地名・土地区画地名が少ない

野田町の地名

田畑地名・目印地名・自然地名・信仰地名・形状地名・意味不明な地名が多い
人名地名・浸食地名・湿地地名・土地区画地名は少ない
意味不明な地名が多いことは，歴史の古さを物語る
地名の付け方が，割合に素直な印象を受ける
田・畑・迫・川内などの付いた字名が目に付く

特色のある地名

花立
十三奉行迫（じゅさぶろうがさこ）
笠掛
山仁田
相垣（えんがき）
加生岡（かもおか）

意味不明の地名

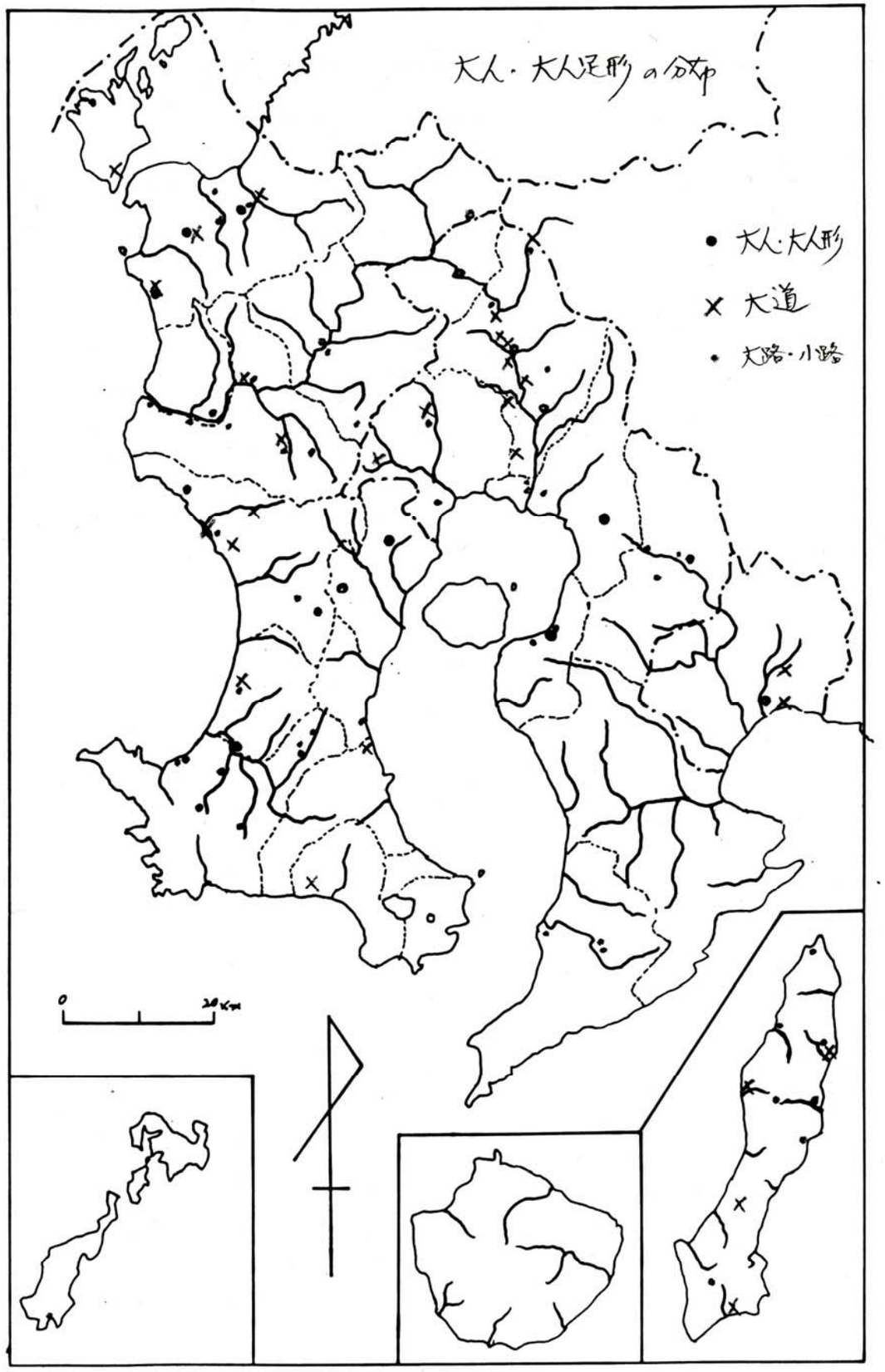
籠土山・木佐木野・備多田・石走・
堂目木・法目木・春・畿川・耳取・特手・宇津良

野田町上名小字

分　類	字　名	字　数	字数　%
信仰地名	愛宕迫・寺原・堂免・堂山・花立・弁天平・山神元・田ノ神丸・田ノ神丸・弓場平・注連下	11	8．33
城・城郭	大丸・熊陣・城迫・城内・城ノ下・城ノ平・新城・山城・野首迫	9	6．82
土地区画	大坪ケ迫	1	0．76
交通地名	石坂・岩坂・馬渡・越地・下越地・下橋掛・橋掛・橋口・橋口原	9	6．82
水利地名	井出口・受口・受口段・受口峠・冷水	5	3．79
人名地名		0	0
開発地名	別府・伯父ケ迫	2	1．51
田畑地名	大久保田・上新田・小松田・小松畑・新田・小山田・大畑・山田・前田・前田・西田・東田・長田・角田	14	10．61
産業地名	小豆野・井杭田・石倉・大角鹿倉・上菜切・三斗蒔・下三斗蒔・菜切・樋渡・湯之谷・前木場	10	7．57
自然地名	歎ケ谷・情原・西木佐木野・東木佐木野・町原・冨山・田島原・湯之谷・湯ノ迫・大迫・要ケ迫・牛ケ迫	11	8．33
位置地名	上大谷・下川頭・下野角・西田平・西長谷・山ノ口・東長谷・上世美・下世美・上床並・下床並・西笠掛・尻無・大迫口	14	10．61
形状地名	大川内・大谷・小野之段・上小川内・小川内・下小川内・白谷・立平・野角・野添・野元・野路川内・龍土山・西小川内・七枝・鋤崎	16	12．12
目印地名	一本松ケ迫・岩下・梅ケ谷・柿野・角石・白木元・鷹之巣・椿倒・鍋田・鳶之巣・松ケ迫・桑木丸・青木・竹林・藤原・小葛川・涼松・勝負ケ元	18	13．64
湿地地名	西牟田・山仁田	2	1．51
浸食地名		0	0
気象地名	嵐田	1	0．76
擬音地名	堂目木	1	0．76
意味不明	尾毛無・特手・勝負ケ元・龍巣川・十三奉行迫・宇津良・打上・小伏川	8	6．06
	計	132	100．00

野田町下名小字

分　類	字　名	字　数	字数　%
信仰地名	鐘付・金剛園・社下・田神丸・早馬尻・不動原・祭田・宮下・宮脇・大人・鉾立・矢立ケ迫	12	8．82
城・城郭	垣内・桜ケ城・出丸・畏城・野首	5	3．68
市町地名	本町・森町・井町	3	2．21
交通地名	大道原・路上・大道添・辻・辻ケ迫・茶屋迫・茅越ケ迫	7	5．15
水利地名	井出元・落水・水ノ手・片見取	4	2．94
人名地名	吉戸丸	1	0．73
開発地名	大園・下園・重園・田多園・奥園・古川園・猿楽園・竹添・春・平八重・下今村・上今村	12	8．82
田畑地名	大畠・三月田・三斗蒔・野田畠・東畑・東備多田・前田・岡畑・堤田・筵田・上濱田・下浜田・浜田・上備多田・紙田・佐司田・大法田・袴田・八多田・招田・夜中田・六多田・浦田・北山田・五反田・四反坪・八反田・六反田・一町田	29	21．32
産業地名	宍取・高細工・川瀬	3	2．21
自然地名	加生岡・土瀬戸・高岡・平原・餅井迫・浅井迫・雪手ケ迫・板川平・兎迫・岡迫・大迫・曲迫・小田迫長迫・青茅迫	15	11．03
位置地名	橋上・橋下・東笠掛・塩入・中林	5	3．68
形状地名	鏡渕・長尾・平地・石亀・六枝・船ケ迫	6	4．41
目印地名	岩崎・岩元・榎木丸・椙木迫・藤ケ谷・松ケ迫・松元・竹之下・川骨・茅刈	10	7．35
湿地地名	西牟田・川原田・屋地	3	2．21
浸食地名	小渕・水洗・石走	3	2．21
気象地名	荒崎・法目木・耳取・早風・下早風・上早風	6	4．41
擬音地名		0	0
意味不明	荒巻・上荒巻・下荒巻・重津川・高棚・駄白・田多吉・徳手・羽下・畏川・来仙・相垣	12	8．82
	計	136	100．00



No. 1.

Date

大人足形の分布.

1. 大人足形 (ダイニン・アシカタ) —— 鹿児島市川上
2. 大方形 (オオヒロガタ) —— 鹿児島市大迫
3. 大人足 —— 出水市武本
4. 大人跡、 —— 串木野市下名
5. 人足形 (ニンソクガタ)? —— 垂水市牛根境
6. 大人足跡、 —— 福山町佐俣川
7. 大人形 —— 牧園町下中津川
8. 大人形 —— 横川町上ノ
9. 大方形 —— 菱刈町徳辺
10. 大人足 —— 志布志町安楽
11. 大 人 —— 末吉町二之方
12. 大 人 —— 阿久根市大川
13. 定之足形 —— 川辺町野間
14. 大 人 —— 野田町下名

① 阿久根・野田・出水 —— 大人足形・大道は古道に沿って分布.
② 隼人・牧園・栗野・菱刈 —— 大人足形・大道は古道に沿って分布
①は、肥後・薩摩の駅路. ②は肥後・大隅の駅路
「大道」の分布 メモ No.7 23 参照

末吉町二之方(大人) ═══ 大隅町大谷(大路)・末吉町二之方(中小路)
垂水市牛根境(人足形) ═══ 垂水市牛根麓(中小路)

No.

Date

謹賀新年 2002年

昨年中はいろいろお世話になりました。
本年もどうぞよろしくお願いいたします。
３０年前の調査で肥後国坂本・長埼・片野諸駅想定地に「大人足」地名が在ることを知りましたが、その意味は不明でした。昨年、木本雅康君がこれは巨人の足跡を言うものとして、古代駅制と巨人伝説との関係を雑誌『本郷』に書きました。これを見て安芸国木綿駅想定地の近くに「大人」地名が在ることを報せてくれた人があり、私も筑前国席打駅近くの「大人」地名に気付きました。さらに、年末に服部英雄氏の『二千人が七百の村で聞き取った二万の地名、しこな』を見ていて、佐賀平野の古代道路の代表的遺構である鳥ノ隈の切通しに「うーわしかた・人足形」と、上峰村切通にも「うーどんと・大人さんの足形」が在るのを見付けました。駅路の大規模な切通しを巨人の足跡と見たようです。今更ながら地名の面白さ、重要性を思いますが、これらの地名について他にも御存知のことがあれば、御教示願います。
今年は古代交通研究会発足から１０年で、９月１５日に福岡の西南学院大学で記念大会を開き、１６日は現地見学をいたします。

木下良様

平成14年1月10日

平田信芳

拝復.

お便りにもとづき、鹿児島県内の「大人足形」地名と大道、大路、小路などの地名とを比較してみました。幸いなことに、これらの地名は、既にカードにまとめられていました。

「大人足形」地名14例のうち、「道」と直接結びつくデーターが得られなかったのは3例（鹿島市2、串木野市1）だけですが、この3例も「道」関連地名がないだけで、中世の道が通っていたことは、事実です。

鹿児島県内の「大人足形」地名すべてが、道路と関係があったと言えます。これは一つの成果です。本年の古代交通研究の際、会長挨拶等で触れられるとよいでしょう。以上、ご報告まで。

敬具